
OLFEED ~ギルド職員の仕事~

藤原無稔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

OLFEED ～ギルド職員の仕事～

【Nコード】

N7196W

【作者名】

藤原無稔

【あらすじ】

オルフィード大陸に広く存在する仕事幹旋機関ギルドに就職した一年目の新人、リキット。忙しい仕事の日々……なんて全然無かった。暇だ暇だと呪文のように唱える毎日。トラブルが起こる中、浮浪児を育てます。

第一日 ヒマな仕事（約8000字）

海に囲まれた広大な大地、オルフィード大陸。地図で見ればひし形を少し歪めたような大陸。東西南北にそれぞれ大国があり、大陸の中心にエクセリアという大国があった。エクセリアの東端に位置する街、リザリア。ここにもオルフィード大陸全土に張り巡らされた仕事斡旋機関、ギルドがあった。

ギルドはありとあらゆる仕事を対価とともに引き受け、これをギルドに登録している者に受けた対価の一部を報酬に斡旋する。言わば、何でも屋の仲介業者である。どんな仕事も仲介することから、傭兵の斡旋やアイテム探しに人探し、収穫の手伝いなどは当たり前、その組織ネットワークの大きさから情報の売買も行い、果てはならず者への宿の貸し出しもしていた。

ともすれば、犯罪者やならず者の巣窟のように誤解を受けそうだが、公共機関のような厳格さがそこにはあった。その一つとして、犯罪者に懸賞金を掛け公布するのもギルドの役割だった。もちろん懸賞金には国の公金や被害者遺族からの献金で賄われている。

ギルドは魔法通信システムという独自の技術を使っていて、斡旋業の補助や賞金首の照会に情報の販売も、この魔法通信の端末を使用させるほどの技術力をもっている。

ともかく、情報力という点において大国ですら並び立つ事が無いほどであった。

中央エクセリア国の東端、リザリア。

エクセリアと交易の最も多い、東の大国イーリアとの国境に程近い街。両国の交易者が頻繁に立ち寄るために宿と厩舎を提供する者が多く、繁華街が大きく夜にもなれば騒々しいほど賑わうが、昼にはせせこましく商隊が大通りを行き交う。だがそれ以上に目立つのが町全体を覆い隠すように大きな防壁が囲んでいる事だ。また軍

が駐留するための基地があり、防壁の効果も手伝ってか治安がよかつた。

物流の中継点、商人たちが立ち寄り休息をする場所を求めるのだから、治安は良いに越した事はない。だが、日に入れ替わる人の数がかこれだけ多い街で、治安が良いというのは珍しい。

もともと治安のためのというよりも、東のイーリアへ睨みを利かせているという背景が強いのかも知れない。実際、軍備もそれなりに大きく、至る所でエクセリア軍人を見ることが出来る。

リザリアは商人のオアシスと呼ばれている。

リザリアのギルドには商人がよく訪れる。毎日違う商人が出入りする。

商隊の護衛を雇うことは、中継点であるリザリアでは滅多に無いし、この街で一番の顧客である商人が求めるようなサービスや道具は、専門店が立ち並んでいるから、ギルドで商人がする事といえば情報を売り買いしていくくらいだ。

魔法ネットワーク端末、台上の操作パネルの上部に位置する青い魔法立方体からキューブと呼んでいる。このキューブで商人が情報を閲覧する。情報売っている商人もたまに見かけるが、キューブを使った魔法通信で行うので、実際に僕たち、リザリア在中のギルド職員がする事はほとんどない。今も何かの情報を売った商人風の男に銅貨を三枚渡したところだ。ハッキリ言って、暇だ。

お金といえば、キューブで情報を買う時にキューブに金貨・銀貨・銅貨を入れるんだけど、内部に簡単なセンサーがあるだけで、後は重さでそれぞれの硬貨と判断するらしい。サイズと重さが一緒なら同じ鉱物って事なんだろうけど……とにかく、暇だ。

「はぁーーーーー」

銅貨を渡した商人が出て行ったのを確認して長く大きなため息を

吐く。今ギルドには職員しか居ない。

「仕事しろよ、リキット」

すぐさま、このギルドで唯一の相棒が皮肉った。

唯一の相棒と言っても、僕に友達が少ないわけじゃなく、ただ単にリザリア東ギルドには、僕と相棒のレーデしか職員が居ないだけだ。決して、友達が少ないわけじゃない。

「仕事って言っても、今みたいに情報代渡すか、キューブのお金を銀行に持つてくくらいしか、することないじゃん」

顔を膨らませながら両肘をカウンターにつく。

「ははは……まあ、確かにな」

苦笑いしながら、管理用キューブに先程の商人の情報代の受け渡しについて入力するレーデ。

管理用キューブというのは、仕事の登録や顧客・ギルドメンバーの照会、報酬の受け渡し状況なんかを閲覧入力するためのキューブで黄色い魔法立方体がついてるので、僕たちは単に黄色とか、黄キューブとか呼んでいる。僕たちのような末端の職員用のキューブだ。逆に、客用のキューブは青いので、青キューブと言う。

「ん。……やっぱり、商人じゃなくてハンターだったか」

入力していたレーデが、黄色の管理キューブを見ながら言った。商人とかハンターというのは、ギルドメンバー、つまりギルドに登録した斡旋を受ける人の、系統の事で、斡旋を受ける際に重要な要素の一つ。

外では、自分はハンターだとか、商人ギルド所属だとか、言うみたいだけど、実際にはギルド組織は一つで、それぞれギルドが認定した系統の、許可されたランクまでの仕事しか斡旋されないだけで、系統ごとに商人ギルド、ハンターギルド、学者ギルド、技巧士ギルド……なんていう風にギルドの建物が立ち並んでいたりはしない。「別に珍しくも面白くもないよ」

格別リザリアでは人目を引き付ける為の商人の格好の方が、修道士や冒険者を装うより、よほど目立たないため、そうしている人も

いる。

仮にハンター系統のギルドメンバーだったとしても、情報の売買のためだけに最低のハンターランクを得て、クエストを受けず商いをしていない人も多い。商人系統のライセンスには所在地が必要で、旅商売をしている人はハンターのライセンスを得ているのだろう。

ちなみにクエストというのは、ギルドが受けて紹介する仕事の呼称で、設立当初ギルドがエクセリア王国立地図製作委員会と呼ばれていた頃。オルフィード大陸の地図製作のついでに未開地の開拓余地を測つたり、魔窟への進入といった探索を主とする作業を一般から募集していた事を起源としている。ハンターと言うのもこの頃の名残だ。

当初、地図の製作は数世紀はかかると推測されていたらしいが、今ほど発達していなかった魔法通信を使用した製作は、あまり正確ではないにしろ、通常の使用に問題の無い程度の地図を、たったの五年で完成させた。正確な測量による大陸図の製作は、ギルド設立から半世紀経った今でも専門チームによって続けられている。

もっとも、仕事の引き受けと紹介が十分な事業になるという商機が大きかったことから、クエストの引き受けと紹介を事業として独立させる結果となった。名を新たにギルドとした上、本懐であった地図製作を国から引き継ぐ事で準公的機関という立場を確立した。

更にエクセリア王国とは別に、魔法通信の研究開発に非常に力を入れ、独自の通信システムを瞬く間に作り上げた。半世紀前には、術者同士の思念会話のようなものを魔法通信と呼んでいたが、今では、魔力を原動力としたデータ通信の事をいう。革命といって差し支えないほどの変化と言える。当然各国、ギルドの魔法通信システムを導入している。

ギルドが準公的機関という立場とネットワークを柔軟に利用して、他の追従を許さないほど巨大な組織に急成長したのは事実だ。だからこそ僕は、ギルド職員になったことをステータスだと確信できる。

しばらく、沈黙が続いたので目を閉じていると。

「ああ……また止まった」

そう、四日ほど前から黄キューブが止まって反応しなくなるのだ。といつても一〇分ほど置けば、また普通に動くようになるので、暇なギルドには大した影響は無かった。でも一応、メンテナンスを要請している。ギルドの特殊技術だから、開発部だか技術部から専門員がやってくるのに結構時間がかかる。その上、青キューブや魔法通信には異常が無いために、後回しにされてるのかも知れない。

「また？ 暇なのに、更に……暇になつた」

わざと最後ゆっくりと伸ばして言う。黄色キューブは暇な時、クエストやギルドメンバーの情報を閲覧するという大事な暇つぶしに使えるのだった。まあ、良識ある使い方ではないよね。

「リキット……お前、だらけ過ぎだぞ」

怒気も無く、先輩風を吹かされる。まあ、確かに一つ年上で、一〇ヶ月先輩だけだ。

「とは言つても仕事が無いし」

それでもレーデに対して敬語を使わないのは、僕が礼節を重んじないからじゃなく、ギルド職員になる前からの知り合いだからだ。

エクセリアでは幼少時、少年時の教育を経て社会へ出るのが普通だけど、僕の家は割と裕福で、更にも上の教育を受けられた。そうして入った学院、エクセリア王国立経済学院で知り合った。レーデは一年留年していて、最初はそうとは知らなかったから、そのままズルズルと敬語を使わず話していた。レーデも口調を気にしない気さくな性格で、年上と知った後で改めて敬語を使ったら、逆に皮肉の一つでも言われていただろう。

学院を卒業した後、僕は更に上の経済研究学院に入って、一生安泰と言われるギルド職員になったという訳。

一方、レーデは学院卒業後、研究学院に入る金もないし商隊に入

って世界を見て回ると言って、僕とは違う道を進んだ。

結果的に、同じギルドの二人しか常駐しない、僕の初めての職場である、ここリザリア東ギルドで再会する事になったのだから、世間は狭いと思えてしまう。

「そっいえば、お前エリートコースだっけ？」

妬みも羨ましさも感じない世間話のような口調で尋ねてくるレーデ。

「……さあ？」

ギルド内を見回した後、両手を軽く上げ答える。

「はははっ、本当にわからなくなるな」

「他人事だと思って」

愉快そうに笑うレーデを余所目に、両手を頬に付け目を閉じる。

今度は口をへの字に曲げて。

本当は、二年の間に複数のギルドに赴任した後、試験があつてそれに合格すれば晴れてエリートコース確定。となる筈なんだけど、こういふ仕事の少ないギルドに配属されている現状。これは暗に試験勉強しろと言われてるようで、逆にやる気が起きない。

仮に、嫌味な上司や性格の悪い同僚のいる配属先で仕事に忙殺されることを考える。友人と仕事の少ない今の配属先というのは、比べるべくも無く良環境なのは間違いない。むしろ、かなりの優待遇なんじゃないかと思う。

そんなことを考えていると、来客を知らせるドアベルがカラカラと鳴った。

いつものように一瞥し、軽くお辞儀をしようとしたが、出来なかった。明らかにこの街の雰囲気とそぐわないその少年の姿が、何気ない一連の仕草を躊躇させてしまったのだ。

軍製品のような機能重視でどこか重苦しい印象を与える、黒を基調とした制服のような服装は、袖口から先が干切れて無くなってお

り、泥の乾いた後もある。ほとんど黒一色なのにやたら汚れを感じさせるほどボロボロの状態だった。その服装とは対照的に顔立ちは幼さを残しながらも整っており、何より白い肌に、燃える様に天に向かつて伸びる赤い髪が印象的で何かの美術作品かと思わせた。年の頃は一五くらいだろうか。

その綺麗な印象を与える汚らしい少年は、こなれたように青キユーブを操作し始める。そのいつも通りの光景に自分が飲まれていた事に気が付く。同時に、少年が腰から伸びて地に着きそうなほど大きな剣を帯剣している事にも気付いた。完全に雰囲気にも飲まれていたらしい。

リザリアでは滅多にお目にかかれないだろうが、遺跡や魔窟に程近いギルドならばよくある光景なのではないか。などと、勝手なイメージをして現実に戻った僕は、レーデの方を見やる。

レーデもまた僕の方へ向きなおそうとしていた。お互いの視線が交わる。レーデの顔が呆けている様に感じた。

それがひどく滑稽思えて、思わず吹き出しそうになり、慌てて両手で口を押さえた。

レーデはレーデで僕の行動が可笑しかったのかクスクスと笑い始める。

にやけた顔をさせたままレーデが、いつの間にか直っていた黄キユーブで閲覧者の情報をすぐさま表示させる。僕もそれを見ようと横から覗くと、表示された情報に一際興味をそそられるものがあった。

そこにはハンターランクとあった。

ランクは資格系統にもよって三丁六種類あるが、ハンター資格のランクは最高Aから最低Fまでの六種類あつて、全系統の中でランク数が一番多い。というのも、ハンターの仕事というのが、他の系統に当てはまらない仕事……つまり、何でも屋のような仕事が多いから。単純に仕事の数も、登録者の数も最も多い。

最低のFランクは正直、誰でもなれる。報酬こそ少ないが、主婦

だろうが浮浪者だろうが、誰でもやれるような仕事だ。従って、商人ライセンスを得られない人もハンターライセンスを得て情報売買したりする。それ故に一番多いのがFランクハンターだ。逆にEランクからが本当の意味でハンターと言える。

もつともEランクとDランクは同格というのがギルドの見解だ。Eランクは知識を、Dランクは体力を必要とする要素が大きい仕事と、性質の違いで仕事を分けているだけ。

何でも屋という性質上、上位のランクを得るためには、知識、戦闘力、判断力、適応力とあらゆる能力を要求され、どうしてもクエストをこなす上での総合力が必要とされる。

そして、この少年は既にCランクハンターだって事。Cランクともなると、要人とまでいかないまでも旅の護衛や、規模にもよるが賊退治なんていう、実力者向けの危険クエストも含まれるランクだ。

こんな子どもがとも邪推がよぎってしまうが、汚れきった服装もクエストの勲章かのように、見る目が変わってしまった。というのもCランクハンターなら選り好みさえしなければ、クエストの報酬だけで暮らしていける。プロのハンターって事だ。

ひとしきり青キューブを眺めていた少年は、さもつまらなさそうな顔を一瞬浮かべ、思索する素振りをみせる。どうやら気に入るクエストが無かった様だ。それはそうだろう、リザリアのCランクのハンタークエストはここの一週間で、急ぎの行商護衛クエストと、国境付近の山賊討伐クエストの二件。どちらもクエスト進行中で、残ったクエストも数少なく、誰もやりたがらない様な内容か、怪しさが伺えるようなクエストだったと思う。

基本的に、リザリアは行商が休息に立ち寄る場所で、行商途中の商隊ばかり。リザリア発の商隊も計画的に護衛を雇うならば、定期間雇う相手をギルドを介さず決めている事だろう。ギルドに制約を受けられないように、手数料を払わないようにするのは一理ある。

ギルドのクエストでは、登録メンバーの管理とランク分けがある。その為、依頼受諾者が裏切ったり、能力を詐称ために積荷を守れなかったというのは、あり得ない。逆を言えば、ギルドへの手数料は、安心を買う代金と考えれば高くは無い。その代わり、手数料と報酬は必ず前金で全額だ。

その制約が無いと依頼者は別の者を雇ってしまったたり報酬を踏み倒すというトラブルが必ず起こる。従って、全額前金制度は絶対に必要だ。もちろんクエスト受諾者、ソルバーが決まらなかった場合は、手数料としての一部以外を返金する。ギルドでは、問題を解決する者の意を込めて、クエストを受ける人をソルバーと呼んでいる。行商人でもギルドを利用しない人もいる。中には、護衛を全く雇わず、賊に遭わない事に賭ける商魂逞しいツワモノもいると聞く。それがあるから、賊もなかなか減らないのだと思う。

奪われた事への報復に討伐依頼をするくらいなら、最初から奪われないように護衛を雇えばいいのにと、現在遂行中であろう討伐クエストの事をふと考える。

少年が面倒臭そうに立ち上がり僕たちの居る方へ近寄る。

「クエストを受ける」

ただそれだけをカウンター越しに言う。随分と無愛想な子供だと思いが、ソルバー無しにクエストは達成しない。故に代金を払う依頼者と同等と考え、解決者ソルバーと依頼者を巧く取り持つのが僕たちの仕事。ってことで、営業スマイルで応対する。

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」
言っただけで黄キューブを操作して、少年が登録したクエストを照会する。

「……こちらのクエストでよろしいですか？」

黄キューブの反対面にクエスト情報を表示させて、事務的な確認をするが、それとは別に本当にこのクエストでいいのかという疑問の意味を込めて語尾が強まる。

そのクエストには覚えがあつた。事件というほどの事はなく、そういう事もあるのだと、働き始めたばかりの僕が憶えるには十分のトラブルがあつたクエストだ。一見、ただのアイテム收拾クエストなのだけど、失敗報酬が〇%のクエストなのだ。

失敗報酬とはその名の示すとおり、クエストを失敗した時のソルバーへの報酬で、クエストの内容で分類されるギルド規定以上であれば、何%にでも設定できる。アイテム收拾はその中でもクエストの成否がハッキリとした形で判断できるため、ギルド規定に則つて失敗報酬を〇%を設定できる。

まあ、失敗報酬は誰でも規定丁度で設定するから、そこは問題じゃない。問題になつたのは、ギルドで受け渡しを行う前に盗難にあつた事だ。その時のソルバーは、依頼人が盗んだ犯人だと主張した。しかし、ギルドとしてはアイテムを持つて来れなかつた以上、失敗とする他は無かつた。

その時は、新人なりにも精一杯対応したのだけど、怒鳴られながら詰め寄られた。その記憶は、今思い返してもイライラしてくる。まあ、生活が掛かつてるのだから必死になるのも当たり前というもの。しかし、それ一回きりではなく以前にも同じことがあつたと、今はギルド本部勤務の先輩に教えてもらった。どう考えても、依頼を果たせなかつたのが原因だけど、問題の潜伏しているクエストであることには間違いない。

「ああ」

その生返事に、このクエストでなければ感じなかつただろう、不快感というか苛立ちを覚える。この少年ソルバーに忠告をする事にした。

「こちらの薬素材收拾クエストなんですが。素材アイテムが盗難に遭つたり、狙われる事がありますので、お気をつけください」

「……」

無視。

「あ、あの。聞いてますか？ このクエストの素材アイテムは」

「だから何だ？ 盗まれる奴が間抜けなだけだろう……」

つい、その通り。と口を滑らせそうになりつつ、少し気分が晴れた気がした。

「早くしてくれないか？」

「すみません。では、登録しましたので、アイテム收拾頑張ってください」

「……」

青キューブで、クエストの受諾と情報を確認すると、やはり無言で出て行ってしまふ。本当に無愛想だ。

レーデが少年を目で追いながら、呆けているように見えた。

「どうかしたの、レーデ？」

「いや、なんでもない……あんな子どもが儀式場跡地に行くんだから、世も末だと思つてな」

リザリアから南に程近い場所に、邪教集団が何かの儀式に使っていたらしい廃墟がある。そこは負のManaが漂っているらしく、普通ではお目にかかれないモンスターと植物の巣となっていた。その中に薬の素材となる植物が生息している。

「でもあの子もランクハンターなんだし、大丈夫でしょ」

「……そうだな、それでもモンスターが怖いつて思うんじゃないのか？つてな」

「そうかな？ さっきの子供の場合、モンスター相手に眼を付けてそうだけど」

「……だといいんだが」

切れの悪い物言いに何だか心配になってくる。

「レーデって子供好きだった？」

「ん？どうかな……嫌いではなかったが」

「子供が欲しいなら、まず彼女を作らないと！ 大雑把でがさつなレーデには、細かいところに気の利く娘がいいと思うよ」

「……お前こそどうなんだ、彼女作る気ないのか？」

「あ、あるよ」

自分で振っておいてなんだけど、この話題はダメだ。誰の得にもならない。

「お前は頼りなさそうなところがあるから、引っ張っていつてくれる姐御肌な人がいいと思うぞ」

「う、うん」

痛いところを突かれ、たじたじと返事をしながら、レーデに笑顔が戻っていくのが感じられたので、今日のところは良しとしよう。

第二日 ソトな仕事（約11000字）

今日は朝からクエスト品の配達をしている。依頼人の希望で運搬を委託することはあるけど、本来、品物の運搬はギルドの仕事じゃない。それでも配達をするのは、依頼人がエクスリア東部地域の権力者で、遠い親戚にあたるため。その上、直接配達を頼まれるものだから断れる訳がない。

クラフトマン 技巧士のソルバーによる銀製の壁掛け細工を渡し、ひとしきり細工について語った後、世間話に突入する。かれこれ、二時間は経過していた。話自体もなかなか面白いので、消閑の訪問といえ、それらしくもある。

「そういえば、今日の夕刻には嵐になるという事だ。十分気をつけたまえよ」

とある政治家の裏話も山場を終え、僕がお茶の三杯目を飲み干しかけた辺り、依頼人がすつと立ち上がり窓の外を眺めながら言う。

この人は話はメリハリも効いてて、切り上げるタイミングも心得ているようで、スツキリと話を聞ける。僕でなくても見習いたいと思わせるだろう。

「リキット君、次の配達もお願いするよ」

「はい、またお話を聞かせてください」

そうして別れると、空を見上げる。東の空には重く暗い雲が広がっており、天気荒れる事を予告しているようだった。離れて、頭上よりやや南の空には、燦々と街を照らしている太陽。光の塊には、白い雲が軽く架かっていた。

もうお昼、ほどよくお腹の虫が鳴いたような気がした。レーデには悪いけど、先に昼食を済ませて戻ろう。

リザリアを南北に分断する、東門から西門まで、真っ直ぐ伸びる大通り。そこまで出ると、段違いに騒がしくなる。人通りはもちろ

ん、馬車の往来。通りの端には露店商が至る所に、日除け天幕を垂らしていた。耳に届く以上に、見た目にも喧騒を感じることが出来る。

東門へ近づくと喧騒も薄まり、いつの間にか反対側から歩いてくる赤髪のシルエットを見つめる。昨日の少年だとすぐにわかったが、先に東ギルドへと入って行ってしまふ。それを追うような形で、僕もギルドへ到着する。

木製であつて重厚感を漂わせる扉を開けると、予想していた通り、少年がカウンター前で何か訴えているようだった。クエスト失敗かと思いきや、カウンター奥に見慣れない男女三名と二人掛けのソファほど場所を取る大きな器具や床にも小さな工具が所狭しと並べられたのを目にして、それとは違うことが伺えた。

「リキット！ ちょうどいい所に戻ってきた」

言うや否や駆け寄ってくるレーデ。話によると、僕が配達に出ていった後、黄キューブのメンテナンスにやってきたカウンター奥の三人組。彼らの検査によると、原因らしい原因が見つからないので、本格的な調査と代替え用のキューブの設置をすると決め。キューブとマナを切断したところに少年が来たので、マナの接続を待つか、別のギルドに行くようにと説明していたとの事。

実にタイミングの悪い話だ。僕が知る限り、青キューブの増設の時でも、マナの接続は一〇分そこそこの短い間だったと記憶している。

「すぐ終わるなら、待ってもらえばいいじゃない？」

「それが、何かが良くないらしく。……かれこれ一時間切断したままなんだ」

どういうわけか接続出来ないでいて、黄キューブが使えないって事。それは、青キューブで情報の閲覧する以外の事は何もやれないって事。つまり、少年はいつ終わるとも知れない接続を待つか、別のギルドへ行くかの話がされていく訳で、僕が丁度良く来た。とい

うことは、

「なるほどね。じゃあ、案内してくるよ」

「頼む！」

東ギルドと同じように、西門近く大通り沿いにある西ギルドなら案内する必要もない。けれど、近い方の中央ギルドは入り組んだ場所にあった。別段わざと分かりにくい所に建設したんじゃない、都市機能や要所が変わる毎に、奥まっていったただけだろう。その証拠に、中央ギルドはいい感じに古臭さを漂わせる酒場のような内装に、石造りの建物自体も結構ボロかった。

そんなどうでもいい話を差し込みながら、少年を案内する。……はずが、少年の足が異様に速い。僕はかろうじて歩いていると言え、様な早足を強いられた。案内役が少年の後ろを付いて歩くという、なんとも情けない状況。その中で、普段運動することの少ない僕に、話をしながら行くなんて余裕があるはずも無く。

「は……はあ……ちよ、ちよと待って……」

無言で振り返る少年。

「君、足速いねえ……」

「ああ、追ってくる奴がいるんで、つい。な」

目を細めて、面倒臭そうに答える。

「えっと、僕は案内をしようとしてるだけなんだけど……」

「お前じゃなくて、後ろのフードのガキだ」

言われて、くるりと振り返る。人ごみでハッキリとは見えなかったが、確かに離れた所で小さなフード姿が露店の影に入っていくようにみえた。赤髪の少年より小さかった気がする。

「この植物を盗もうとしてるんだろ」

どうしてかと、質問する前にあっさりとした回答が返ってくる。

確かに僕はクエストアイテムの薬素材が盗難に遭う恐れがあると言った。けど、あまりに安直な思考というか、自意識過剰というか。たまたまフードを被った子供が、後ろを歩いていただけかもしれない。むしろ、それ以外を考える要素が全く無い。

「気のせいだよ」

「……さつさと案内しろ」

無愛想なだけじゃなく、態度も言葉遣いも悪い。それ以上に、年上を敬うことを教えられなかったのかと疑問に思う。早く案内し終えて戻ろう、イライラする。

「じゃあ、このまま真っ直ぐ行って三つ目の角を右へ、その後にある三叉路を左へ……」

言いつつ、歩き出した僕の後ろをゆっくりと付いてくる少年。なんだ、意外と素直なところがあるじゃないか。

僕が歩くペースが遅いと感じるのか、この街が珍しいのか、時折り立ち止まっては、首を回して色々なところをキョロキョロと見回す赤髪の少年。その姿を目にすると、鶏が鶏冠トサカを振っているようで、少し愛らしくさえある。

そんな感じで進んでいるので、息切れのため中止していた、どうでもいい説明を語っていた。少年は全く聞いている様子は無かったけど、この調子で無言のまま進むのは逆に息が詰まりそうだったから。

話も終わって、入り組んだ路地を奥へ奥へと進んでいくけば、人気が無くなっていった。随分と寂しくなってきた。中央ギルドはもう近く、これと行って話す事もなかったので、静かに案内を続ける。この道が一番近かったんだけど、この街に初めて訪れただろっ少年には、大通りをなるべく使う道を通るべきだった。なんて今更ながらに後悔していたりする。元はと言えば、少年の態度の悪さが招いたことと勝手な理屈をこねる。案内した後、大通りへの出かただけ教えればいいと算段をつける。

「もうすぐ中央ギルドに着うわ!!」

「ヒイヒイヒーン!!」

真横に突然、いななく馬が出現した。

正確には小さな十字路。建物が死角になっていて、脇に止められていた馬が、急に現れたように感じたのだ。だけど、そんな事は僕の驚き具合には関係ない。

僕は馬の反対側後方へそのまま後ずさる。というか、コケる。お約束のように、少年にぶつかっ……たりはせず、そのまま地面に尻餅をつく結果となる。

恥ずかしい。正直、恥ずかしい。が、ここは敢て笑顔で、

「は〜ビックリした〜！」

「……」

無視。

やっぱり、そうきますか、恥ずかしさ倍増です。

少年は特に笑うでもなく、馬鹿にするでもなく、ただ僕に手を差し伸べていた。といっても、少年は馬の方を見ていて、片手で馬が暴れ出さないよう押さえていた。そのついで程度に、僕の方に手が伸ばされていただけ。

恥ずかしさは消えないものの、このまま尻で歩いていくわけにもいかない。差し伸べられた手を握ろうと手を出した、瞬間。

フードを被った子供が少年の後ろを走り抜ける。ちょうど目線の高さが腰辺りだったので、少年の腰に軽く巻かれた布袋を、フードの子供が引き抜いて行ったのが見えた。布袋を盗まれたのだ。

「……泥棒！」

「……ふう」

赤髪の少年はため息をつくや否や、脱兎の如く駆け出していた。

小さなフード姿は追いつかれまいと、速度もそのままに角を曲がっていつてしまった。少年も逃すまいと凄いスピードで角を曲がる。僕も慌てて立ち上がり、二人を追う。

少年たちを見失った十字路に差し掛かると途中、ガシャーンと何かぶつかる音が聞こえた。二つ目の曲がり角に出るとその先に、フードを被ったままの掴み上げられた子供と、左手で子供の胸元を握

り上げる少年がいた。野次馬の視線を一身に受ける少年に駆け寄って声を掛ける。

「はあ……はあ……取り返したの？」

「布袋ならそこに転がっている」

「ふう……中にクエストアイテムが……？」

「いや」

布袋は膨らみを持たず、紙切れのように地面にへばり付いていた。今度は、子供の方を向いて。

「えっと、君。盗った物はどこへやったのかな？」

「……そこに落ちてる」

「落ちてるって、薬素材が入ってないじゃない」

「……知らない」

「君ね、嘘はよくないよ？」

「こいつは嘘は吐いてない。最初から布袋には何も入ってない」
赤髪の少年が答えた。

「はい？ 何も入ってない布袋を盗まれて、それを盗り返すためにここまで走ったって事？」

「少し違うが。まあ、そうだ」

「どうして何も入ってないの？ 空だったとしても追うより中央ギルドに急げば良かったんじゃない？ それに、狙われてるってどうして知ったのさ？」

「……質問の多い奴。……黙れ、説明する」

「第一に俺は、夜明けに南の廃墟を出た後、コイツがつけて来ていたのに気付いていた。次に、そんな事をするコイツに聞きたい事があった。で俺は、腰につけていた布袋を空にした。わかったか？」

で、布袋を匣に子供を捕まえた。そういう事はもっと早くに教えてくれてもいいんじゃないかと思うんだ、お兄さんは……っと精神的にだんだん圧倒されてきた気がする。

窓から顔を出していた野次馬以外にも人が集まり出している。入

り組んでいるとは言え、流石に中央区、周りが騒がしくなってきた。
いる。

「誰に盗むように頼まれた？」

そんなことお構い無しに詰問が始まった。ギルド職員が子供に暴
行しているように見えるこの状況は、僕にとっては大問題だ。

「ここじゃ何だし、とりあえず、中央ギルドに場所を移そう」

周りを見渡すよう顎を出して促す。

「答える」

続けられる尋問。相当まずいかもしれない。もしかしたら、放っ
て置いて戻った方がいいかもしれない。

「ほ、ほら、エクセリア軍が来るかもしれないし」

「……ちっ」

流石に思案に至ったようで、一度ゆっくりと目を閉じる。間も無
く、子供の腕を掴み引つ張り歩き出す。

「行くぞ」

助かったと思いつつ見ると、相当な力を込めて掴んでいるのだろ
う。子供は痛そうな顔をしながら、それでも声を出さないよう我慢
しつつ、引きずられるようにして歩いてた。可哀想としか思えな
いが、状況が状況だけに、何も言えずに先頭に立つ。本当にすぐそ
こだからと、早足で案内する。

中央ギルドに着くと、自分が東ギルドの職員である事。キューブ
故障によりソルバーを案内している事。盗難未遂に遭った事を伝え
た。少年の要望により、犯人の尋問をするため、奥の部屋を借りる
ことに成功した。

場所が変わっても異様な状況であることに変わりはない。尋問が
再び始まるうとしていたが、僕はこの子供の言葉を二言しか聞いて
いないのを思い出した。もしかしたら何も言わないんじゃないかと、
少年に耳打ちをしたら、少年は、だろうな。と、さも当たり前前に返

した。なので、再び幼児虐待が始まらないように、僕から別の角度からアプローチすることにした。幸い、話は出来るようだから。しかしなんで僕がこんな目に、と思わずにはいられない。

子供は椅子に座っている。その対面の椅子に僕も腰を落として、質問を始める。

「君、名前はなんていうのかな？」

「……カラス」

「えーっとカラス君？ 偽名かな？」

「……違う」

まあ、いいけど。呼び名があればとりあえず、それでいいと思った。

今まで案内したらそれきりと考えていたために、少年の名前を未だに聞いていなかった。後ろに立っている少年にも尋ねる。

「そつえば、君の名前聞いてなかったね？」

「デュライだ」

「……彼はデュライ。僕はリキットって言うんだ、よろしくね。カラス君」

「……」

この部屋の空気は、外の一〇倍は重いと思った。

「ん〜、カラス君の顔が良く見えないし、この部屋ちょっと暑いから、そのフード取ってもらえないかな？」

フードというよりは、ボロ切れを被っただけのようだが、そのボロ切れは大きく子供の全身をスツポリ覆い隠していた。それを頭の部分を両手で掴み引っ張り上げる様にして、脱ぎ去る。すると、これまたボロ切れで出来たような、元の色がよく分からない半ズボンと半袖のような物を纏っていた。髪はボサボサで、何箇所か変な束が出来ていた。薄い茶色の髪は、切ってはいる様で短い。顔は痩せこけていて、骸骨とまでは感じないが、子供とは思えない衰退感だ。ちなみに、僕の服装はギルドの制服で白を基調としたローブの上に、黄色のケーブ型飾りをつけたもので、青のラインが入っている。

所属や地域なんかで色や装飾に差があるが、ギルド職員の制服は口ブだ。髪型は前髪が短めに左右中の三方向へ流し分け。後ろはミディアムの長さ、癖毛で軽く波打ってる感じ。明るいと暗いとも言えない中間的な茶色の髪。顔は別に悪くないと思ってる。

デュライは昨日と全く同じで汚れた黒い服装、天に向かって伸びる赤髪と、整った顔に白い肌。夜明けに廃墟を出たという言葉からも、昨日そのまま儀式場跡地へ向かって、昼頃に街に戻ったと推察できる。という事はつまり、寝ていないという事だ。

「いいね！そのケープ無いほうがカッコいいよ」

「……ん」

「カラスはどうしてデュライの布袋を取っていったのかな？」

「……売るから」

「取った布袋はどこに持って行くつもりだったのかな？」

「……お金くれる人のとこ」

「お金くれる人はどこにいるかな？」

「……」

「ん〜じゃあ、お金くれる人はデュライの事を知ってる？」

「……」

「じゃあ、布袋に何が入ってると思ってたの？」

「……よく知らない」

「カラスがデュライの持ち物を狙ったのはどうして？」

「……コイツがお金になる物を、持ってるって教えてもらった」

どうも、答えてくれる質問とそうでない質問があるようで、まだはっきりとは言えないが、この子は嘘を吐かなさそうだということある程度口封じをされているんじゃないかということが考えられる。クエスト品を売る相手についての質問に答えないだけではないか。などと考えていると、デュライが割って入ってくる。

「お前がアイテム売る相手と、俺の事を教えた奴は同一人物か？」

確かに、カラスの返答に含まれる情報が少ないせいか、取引相手と狙わせた者を結びつけるような事は何も言っていない。僕も先入観から同一人物と思い込みそうになっていたところだ。

「……」

しかし、カラスはデュライを強く睨むだけで、答えを返そうとはしなかった。

「随分嫌われたな」

それはそうだろう。カラスの右腕には掴まれた後が真っ赤になってまだ残っている。下手したら痕が残るんじゃないだろうか。とは言え、その質問には一理あるので聞いておきたい所だ。

「コイツには教えないから、僕にだけ同じ人だったかどうか教えて欲しいな」

「……違う、別人」

椅子から降り、僕のそばまで来ると、口に両手を添えて小さな声でそう耳打ちした。

「そっか」

子供は僕に心を開いてくれるのか、そうでなく単純に根が素直なだけなのか、今までのところ悪印象を受けなかった。

「このガキ、どうするんだ？」

デュライは答えが早く知りたいのであるうか、カラスの処遇のことへと話を移す。

正直、カラスのこの後については、何も考えてはいなかった。例えば、無罪放免としたとして、カラスにとって何が変わるだろう。そのまま戻れば、いずれ餓死しそうだ。

だからといって、軍に引き渡す事が正しいとも思えない。軍が嫌いな訳でも、信用してない訳でもない。むしろ、好印象すら持っている。それでも、子供の処遇を組織に委ねてそれでお終いというのは、間違っている気がする。

じゃあ、僕に一体何が出来るのか。考えても何も浮かばない。

「よし、乗りかかった船だ。僕の家に来るか？カラス」

僕がこんなにお節焼きな人だったとは知らなかった。

「……………ん？」

「三食昼寝付きの家事手伝いのクエストかな。もっとも、ご飯以外に報酬は出せないんだけどね」

「……………ご飯食べれる？」

「もちろん。ただし、これはクエストだから。ちゃんと働いてもらうけどね」

「……………クエスト？ それ、する」

我ながら、なんて面倒なことかと思っただが。クエストを知らないというカラスの発言に、もしかしたら想像以上に、面倒を見なくても済むかも知れないと、淡い期待を抱くのだった。

カラスが僕にくつついて離れないので、体面的にデュライは耳打ちされた答えをハッキリと聞けずじまいでいた。けれど、僕も猛烈に刺さる視線を受け続ける気はない。中央ギルドの方々に適当な説明を終えると、すでに報酬を受け取っていたデュライと合流した。

中央ギルドを出た後、デュライにだけ分かる様に切り出す。

「デュライ、今回のクエストは、あの商人が目的の情報を持っていないくて、大変だったでしょう？」

「……………ああ」

これで間違いなく伝わったはず。

それ以降は特に話す事も無く、大通りへと差し掛かった。左へ曲がって、東ギルドの方へ向かおうとする。するとカラスにローブの裾を引っ張られる。カラスの方を見ると右を振り向く。それに促されるように、カラスの視線の先を見やると、デュライが反対方向へ歩いていつてるではないか。

まあ、親しくも無ければ、今後何かしらのお付き合いがあるわけでも無い。けど、カラスに教えられなければ、誘拐かと心配する要素もあるでしょうよ。いや、無いにしても、じゃあこれで位の挨拶はあって然るべきだと思う。

「デュライ、さようなら！」

苛立ちと諦めとちよつとした安堵とが、ない交ぜになった声で別れを告げた。少年が振り返ることは無かったが、ただ一度、腰に吊るした剣の柄に手を当てた。

デュライと別れ、東ギルドへ向かう間にカラスの生い立ちというか、過去について聞いてみた。物心ついた時にはもう、浮浪生活のような事をしていたという話だった。唯一、名前を付けた人物が浮浪児集団のリーダー的存在だった子に名付けられたらしい。そのグループは数名で、生死を別にして全員居なくなってしまったという。リザリアは発展した街で、普通に暮らしている分には浮浪児を見かけたりしない。そのように浮浪児というのが少ないとは言っても、繁華街の大きさから望まれない子供が産まれるという事があるのだから。娼婦がその子供を捨ててしまえば、カラスのような子が必然に生まれる。

今まで見ようとしてもしてこなかった世界の話だ。いまさらに心が痛む。

空は、そんな僕の心を表すように重く暗い雲が広がり始めていた。

休業中、他のギルドへお回り下さい。と手書きの紙切れの貼ってある東ギルドの扉を開けると、いつもの声が僕を迎えてくれる。

「遅いぞリキット、何やってたんだ？」

「ごめん、色々あって」

カラスを連れて入ると、当然の質問が飛んでくる。謝るのもそこに、ざっくりと事情を説明する。

「それでこの子を引き取るって言うのか、お前が？」

「うん、軍に引き渡すのは何か違うと思うんだ。それに、フランクハンタークエストである程度稼げるようになるまでの間だけだから」

「本気……なんだな？」

「うん」

「……わかった、俺に出来ることなら協力する」

レーデのそういう所、好きだよ。と言ったら、気持ち悪いこと言うな。と一笑されてしまったが、本当にそう思し、助かる。

「協力するにはするんだが……」

口を濁らせながら悲報を告げ出すレーデ。

「扉の張り紙見たらどう？ ……持ってきた代替キューブが故障してるのか、マナに接続しても全く反応しないんだ。……ってことで完全に修理が終わるまでの間、この東ギルドは休業。そしてリキツトは西ギルドへ、俺は中央ギルドへ一時的な異動になった」

「ええー！」

カウンター奥を見れば、修理をしている職員の一人与目が合い、すまなさそうに頭を下げられた。レーデの言葉を疑うわけではないが、本当らしい。

正直、西ギルドとか遠っ！！としか思わなかった。実際、東西のギルドが東西の門の近くに建てられていて、東ギルド近くに住まいを借りている僕は、ほぼ街を横断する事になる。遅い僕の足で大体一時間かかるかどうか位の距離だ。よし、馬を借りよう。

決まってしまった事は仕方が無い。けれど、やる事がいっぱい有る。明日は休もう、と心に誓うのであった。

「一応言っておくが、明日は休んでいいからな。……修理は原因究明を含めて一週間以上かかるらしいから、西側で部屋を借りるのも有りだ。今日はもう帰っていいぞ、後の段取りとかは俺がやっておくから」

僕の考えが見透かされたようで、ついで、欲しい情報ももたらされる。

「了解であります！」

疲れた時のハイテンションで応え。今日は本当に疲れ果てていたので、その言葉に甘えることにする。とはいえ、子連れで部屋を探すことや仕事中にカラスをどうするかを考えなければいけない。そ

の辺の事は明日に回すとしても、とにかく今日はもう帰ろう。

カラスは大人しく黙ったまま修理作業を見ている。といっても、今のところ大人しく寡黙な様子しかみたことが無い。真剣に見ているそれは、修理作業というよりも、解体作業だった。やたら分解しているので、面白く映るのだろう。僕も興味は有るが、それ以上にもう寝たいという気持ちの方が圧倒的に大きい。

「カラスく、行くよ」

日も落ちかけ、色味を帯びてきた美しい西の空。家に向かう僕の後ろを、ちょこちょこ付いてくるその姿。それと対照に東から上空には黒い雲がどんと居座り、いつ降り始めてもおかしくない。優しい気持ちにどこか不安を抱えていた。

と、空が一瞬輝き、激しい落雷の音。途端に激しい雨が降り出した。

「降り出した。こつちだカラス、急ぐよ」

家についた頃にはビショ濡れで、カラスに至っては外でシャワーを浴びている様に、もう打たれ放題だった。家といっても、今朝会った遠い親戚から借りている一軒家で、一人暮らしで使うにはかなり広く、使っていない部屋の方が多い。

雨に打たれビショ濡れでする事など、決まっている。どうせ、カラスの髪も体も洗ってやろうとも思っていたし、ちようどいい、まずは風呂。

この家には、ガスが供給される仕組みがある。設置されたガスのポンペを交換するという供給方法で、風呂と調理場で火を簡単に起こす事が出来る。ちよつとした仕組みを導入すれば、シャワーも備え付けられるが、僕は風呂に浸かるのが好きなので、特に必要を感じない。

お風呂を沸かしている間、外のシャワーを浴びていても風邪を引くだけ。なので一度、身体を拭いて着替える事にする。風呂が沸く

までの間、簡単な服装でいい。と思えど、子供服など持つておらず、タオルを巻くだけでいいかとカラスを呼ぶ。カラスは大人しく素直に言う事を聞くので、とても楽だ。

そうして、ボロ雑巾のように汚れた服を脱がし、身体を拭き出すと、色々わかつてくる。

細く骨と皮だけでできてくるような細い腕には、デュライに掴まれた跡が赤黒くなり始めていた。全身細身だが、お腹は少し膨らみを帯びていて、餓鬼を連想させる。

餓鬼とは、子供のような背丈で、全身が細く肉付きが感じられないが、お腹だけぽっこりと丸くなった怪物の事だ。飢餓状態が長く続き、不衛生な物しか食べれずいると、餓鬼の姿に似ていくというもっとも、お腹がちよつと出ているというか、丸みがあるというだけで、子供にすれば当然の姿だろう。

それに、はと胸と言うのか、胸も僅かに膨らんでいる。胴体と四肢とのアンバランスさに少し衝撃を受ける。

そして、股間に男の大事な物が……無いと。まあ、薄々とは気付いていたんです。確認が出来たことでよしとしよう。

大まかに身体を拭いた後、タオルを巻きつけピンで留める。僕も同じように雫をポタポタと落とすローブを脱ぎ捨て、身体を拭いて軽く着込む。まだ、風呂が沸くまで時間もあるので、今の時期には全く必要のない、暖炉に薪をくべ火をつける。その後、濡れたカラスの服を洗濯する。そんな事をしていると、風呂のお湯がいい湯加減になっていた。

レーデにも言われたことだけど、この先、この子の名前がカラスというのは、些か問題がある。女の子だとも分かったことだし、余計カラスというのは無い。本人の意思もあるけど、早めに決めた方がいいだろう。綺麗に身体を洗ってやった後、風呂に浸かりながらぼんやりそんなことを考えていた。この子の髪を洗うと蜂蜜のような綺麗な金髪で、それで連想したのか、幼い時分に初恋の金髪の綺麗な女の子の事を思い出していた。

「ミシエル……」

つい、その名を声に出していた。

「ねえ、カラスって言う今の名前だと、これから色々問題があるんだ。……君は人間なんだし、違う名前がいいと思うんだ。……ミシエルって呼んじゃダメかな？」

「……ん」

「ミシエルって名前でもいいって事かな？」

「……パンサーが付けてくれた名前じゃなきゃヤダ！」

パンサーというのは、リーダーだった子の事。きっと他の子も動物の名前だったに違いない。

「じゃあ、クロウかな。……カラスってのはクロウと言われる動物なんだ」

「クロウ？」

「そう、君はクロウ」

「……クロウ！」

どうやら気に入ったらしい。カラスと呼ぶのだけは避けられそうだが、問題はここから。女の子に自分の名前をクロウと名乗らせるのは居た堪れない。

「そうだなあ、パンサーが付けてくれた名前ってことは、家族の名前でしょ？ だったらファミリーネームって言って、普通に名乗る名前とは別の、家族名なんだ。……例えば、僕の名前はリキッド＝インデルミッツって言って、リキッドは僕個人の名前。インデルミッツが家族の名前っていう風に二つあるんだ」

「……それで、君の事をミシエル＝クロウと呼びたいんだけど、ダメかな？ ってこと」

「……クロウ？」

「そう、ミシエル＝クロウ」

「クロウ！ クロウ！」

当分の間は慣れないだろうから、フルネームで呼び続けることに

しよう。ミシエルと呼んでも無視されそうだし。

風呂の温度も下がって、子供のミシエルでも入浴する事が苦ではなかったようだ。しかし騙してしまった後ろめたさと、ファーストネームの方を全く気にしていない悲しさと、一応の体裁を取り繕うことに成功した安堵感。さらには、どうしようもない疲れと眠気が入り混じって、風呂から上がらずに居られなかった。

ミシエルはクロウの身体を拭くと、風呂に入る前と同じように、軽くタオルを巻きつけピンで留める。僕は寝巻きに着替える。

暖炉前に干したローブとボロ布は全く乾いていない。暖まった室温とはちばちと爆ぜる薪の音が居心地を良くする。この部屋で寝ることに決めた。というか、寝室まで行けそうに無い。

ミシエルにソファをあてがい寝るように促した後、肘掛け椅子に座る。ミシエルを眺めて、服も買わないなどと考えてるうちに、いつの間にか眠りについていた。

第三日 トロな休日〜午前〜 (約6000字)

ドサッ!

その日の朝は衝撃と痛みから始まった。床に身体を椅子ごと叩きつけられ、その浮遊感の次に来る衝撃で目を覚ます。椅子の肘掛けと床との間に右手を挟まれ、僕の体重が更に重みを加える。

「いったぁー!」

肘掛け椅子に座ったままだったのをすぐ思い出すと、すぐさま横倒れの姿勢を、四つん這いの体勢へと、文字通り這うように身体を起こし床で蠢く。右の甲の辺りが痛み、ジンジンと響く。どうやら強く打ち付けた以外に、間接を捻ったらしい。

「大丈夫?」

僕の叫び声で起きたのか、タオルを巻いた子供が側まで駆け寄ってきて、腰を落としてそう尋ねてくる。カラス……じゃなくて、ミシエルだ。彼女を見て、やっと名前の事や服を買おうと考えていたことを思い出す。

大丈夫かと尋ねられれば、椅子で寝たせいか身体全身が痛い。変な姿勢で寝て痛みが全身を包んでいるようだ。筋肉痛のように。と思いたいが、少なくとも下半身は筋肉痛なんだろう。

そんな事を頭の中で整理していた。僕が返事を返さないのだから、ミシエルは正面に回って顔を覗き込むように四つん這いになる。どうやら、心配してくれているらしい。

「ちょっと右手を捻っちゃったみたいだ。でも、大丈夫。……心配してくれてありがとう、ミシエル」
「クロウ」
「うん」

フルネームで名前を呼ぶのはわざとらしいと思ったが、こうして何度も繰り返し呼ばないと、いつまで経っても慣れないもの。多少強引でも、フルネームを呼ぶように意識している内に言わないとね。ややして立ち上がり、薬箱を常備していないことに気付く。風邪

ぐらいの病気になるっても、怪我はしないのが僕の普通だ。自分の手の事もあるが、子供は生傷絶えないってどこかのおばちゃんが言っていたっけ。ものはついでと言うが、買い物に行く先が一つ増えたようだ。

グウルルルルウ

起きたたてでお腹の虫が鳴り出すなんて珍しいと思ったが、考えてみれば昨日は夕飯も食べずに倒れるように眠ったのだから、仕方無いかも。

この家にだって保存食くらいはあるが、朝食にそれを食べ。また保存食を買ってくるなんて、邪道な事は僕はしない。僕は朝食は毎朝焼きたてパンを買い食いする派だ。ということ、まずは着替えだ。流石に、寝巻き姿で恥ずかしい思いをしながらパンを買いに行ける。そんな僕でも、タオルを巻いただけの子供を連れては行けない。ポロ布みたいな服装の方が幾分かマシだ。 と思いたい。

当の本人はお腹に手を当てて、僕の方を見上げている。自分の腹の音と勘違いしているのかも。よくよく考えれば、ミシエルは僕以上に何も食べていない可能性がある。……下手をすれば数日間。そう考えたら、焼き立てパンを早く食べさせてやりたくなる。

その彼女は何かを思い出したという顔つきをして、

「リキット＝インデルミッツ！」

「はい！」

思わず名前を呼ばれ、応えてしまった。どうやら僕の名前を思い出したらしい。

「リキット＝インデルミッツ、クエスト！ ……クエストしたらご飯！」

これを訳すと、僕にクエストを出させて、それが終わったらご飯を食べるといふ事かな。仕事をせずに食事を与えられないと考えているのだろう。律儀なことだ。

それにしても、僕がミシエルをフルネームで呼んでいるとは言え、

呼ばれる方となると堪ったものではない。公の場の様な、何とも居心地が悪く感じる。

「よし、わかった。その前に、僕の事を呼ぶときはリキットだけでいいから」

「リキット茸^{ダケ}？」

「どんなキノコでしょうか……」。

「僕、リキット。君、ミシエル」

それぞれの顔を指差して言う、それを2回繰り返す。が、なぜだか顔を膨らませて不満そうな顔をする。

ミシエルは自分の方を指差して言う

「君、ミシエル＝ク로우！」

「……自分のことは君とは言わないの」

「僕、ミシエル＝ク로우？」

そういえば、ミシエルが自分のことを、私とか俺とかと言った事がないことを思い返す。今ここで安易に違うと言って、矯正させる事ができるものなのか。……ここは、自分のことを言えるようになって、随分な成長と考えるべきなんじゃないか。そうして、ミシエルが自分の事を僕と言うのを無理に正すのをやめた。

「そうそう、じゃあ……」

僕自身を指差し、誘導する。

「君、リキット」

「そう正解！」

それがとても嬉しくて、くしゃくしゃと髪を撫でてしまう。ミシエルもどことなく嬉しそうな顔をしている。すると、短い蜂蜜色の髪から溢れ出した柑橘の香りが鼻をくすぐる。

その後、何度か自分と僕を指差しながら呪文を唱えるように呟くミシエル。

ミシエルの身長から考えれば、年は12歳前後。もともと、この年頃の発育は急で、何より個人差が大きすぎる。順当に考えれば12歳、発育が良かったとして10歳。だとしても、言葉の覚えは何

歩分も遅れていて、偏りがあると感じることが出来る。ミシエルの生い立ちを考えれば無理もない話だけど。

「さーて、まずは着替えるぞ。ミシエル「クロウ」

「おう！」

ボロ布を纏ったミシエルに、ギルドの式典に使う冬用の長いケープを重ねて着させ、なんとか体裁を保つ。僕はといえば、いつもの制服のローブを羽織っていた。そうした一番の理由はミシエルが僕のことを見つけ易くしたかったからだ。ミシエルが地理的感覚に優れていれば、落ち合う場所さえ決めておけばそれで済むかもしれない。けれどミシエルの自立力とでもいうのが、は全くの未知数でわからない。

迷子防止に、手を繋いで出掛ける。まずは向かう先はパン屋だ。

表へ出ると昨日の大雨も嘘だったかののように、雲ひとつない快晴。朝早くと思っていたけど、太陽はすでに高く登っていて、懐中時計を見ると一〇時を過ぎた辺りを指している。随分長い時間眠っていたようだ。

早速行き着けのパン屋さんにつくと、その女主人がまず口を開いた。

「あら今日はずいぶん遅いねえ、今日はお休みかい？」

「ええ、機械が故障しちゃったんで、今日はお休みで。明日から西ギルドに異動なんです」

まあ、焼きたて目当てに来るので、休みだからといってこんな時間に来た事は一度もないんだけど。

「本当かい？ それじゃあ今まで贖身してくれた分、今日はサービスしようかね」

「サービスしてくれるのはいいんですが、向こうに引っ越すとは言っていないですよ」

「馬でも借りるってのかい？ 豪勢だねえ」

「ははは。その辺りはまだ決めてません」

「ところで、その子は、アレかい。隠し子かい？」

やはり気になるらしいが、予想してた質問の中では一番かわしやす。それは、僕の子供だとしたら一〇歳頃の子供ということになるからだ、そんなこと本気で言わないだろう。むしろ全く質問されずに、変な噂になる事の方がよっぽど厄介だった。従って、余裕の笑みを付け加えて返せる。

「違いますよ。事情があつて預かっているだけですつて」

「そうかい。しかし、もうちょっと良い服着せてやんなよ？」

それが言いたかつたのか。けどそれは僕も重々承知している。見ればケープの端から破れたズボンの裾が飛び出ている。

「すみません、このあと買いにいくつもりなんですけど。とにかくお腹が減つてて、まずはオバサンのパンを食べさせてやりたかつたんです」

女主人は聞くと、膝をおつてミシエルに話しかける。

「お嬢ちゃん、試作品がもうすぐ焼きあがるところなんだけど、食べしてみるかい？」

……ミシエルを女の子だとすぐに言い当てる。やはり判る人にはわかるものなのだと、自分の見る目のなさを痛感する。

それにしても、試作品とはいえ焼きたてがあるのはラッキーだ。

「……う？」

「言葉がまだ不自由なんです。せつかくなんで頂きます！」

ミシエルに向き直つて、

「試作なんて滅多に食べられないんだぞ？ やつたな！」

「うん、やつた」

ややあつて

「ところでお嬢ちゃん、お名前はなんていうんだい？」

「……ん〜……ミシエル「クロウ！」

その微笑ましいやりとり。それを僕が、どれほど肝を冷やして見ていたか、一体誰が予想できただろう。すこし汗をかいた気がする。「ミシエルちゃんかい。もう焼けた頃だからちょっと待つてな」

「いと、数分もかからず、ぼつてりと膨らんだ茶色の紙袋を持って戻ってくる。その膨らみたるや、到底朝食としては、食べ切れない量であることが開ける前から分かってしまう。」

「気合いが入って作り過ぎちまったよ。まだ半分以上あるから遠慮せずに持って行ってくんない」

「どんだけ試作してるんだこの人は。むしろ、遠慮したい。……けど、明日から会えなくなるかもと思うとそうもできない。焼いたパンは生モノと違って腐るより、カビが生える事が懸念される。できるだけ今日中に食べなければと思いつつ、受け取る。」

「はい、試作のキャラットパイ。できたら感想聞かせておくれよ」
「今なんと仰いました？……キャラットパイって、……キャラットって貴方。僕苦手なんですけど。焼きたて貰ってラッキーどころか、アンラッキーだ。食べられない事はないけど、ハッキリ言って嫌いだ。」

「パン屋には食べるスペースがなく、そのまま紙袋ごとパンを持って行くことになる。」

「ありがとうございます！」

「ミシエルちゃん、またね〜」

手をふって見送ってくれるパン屋の主人に、言葉を発さずにミシエルは拳を高く突き上げて応えていた。

パン屋を出て大通りへ向かう途中の喫茶店へ入る。うらぶれたというより、骨董のような良さを感じさせる落ち着いた内装だ。リザリアにあっては珍しく魔光灯を使っておらず、蝋燭に火を灯した照明が幾つも置かれており、とても大人びた感じの店に仕上がっている。しかし、客の入りはなぜか少ないそんな店。

魔光灯というのは、文字通り魔法で光を発する灯りのこと。一般に売られている物は北の大国から流通している物ばかりで、ある程度の強度がある透明か半透明な容器に、薬品と特定のManaが入った物の事。魔科学の産物である。

魔光灯の多くは、ガラスに付いた摘みを捻る事で、薬品がガラスの中に入り、それがマナと反応して輝く。ガラスが割れたりするとマナが霧散してしまうし、薬品が切れればそれで使えなくなる。なので消耗品のように扱われている。キューブの表示にもこの技術が応用されているが、半永久的に画面の表示が出来るキューブはまた特別な技術が用いられてると思われる。

この落ち着いた店の店主であろう、いい意味でくたびれた姿の初老の男性が、ゆっくりと低いが柔らかさを内包する声を出す。

「いらっしやい」

「薄めの紅茶と何かお勧めのジュースを」

ほかほかの紙袋を見せながら申し訳なさそうにそれだけを注文する。

この店の紅茶は一種しか用意してはいないけど、美味しいブレンドティーを出してくれる。淹り加減を注文しないといつも濃い。もつとも、この店の主流はコーヒーらしく、豆なら陳列棚に数多く揃っている。

空いている丸テーブルに座る、もちろん対面にミシエルを座らせて。

「ミシエル、クロウ、先に食べ始めよう」

「……クエストしないの？」

「今日は、いっぱい買うものがあるから、買い物しかしないかな」とすると途端に、悲しい顔をして俯いてしまうミシエル。そんなにクエストが楽しみなのと思うと、微笑ましく思える。

「大丈夫、明日からはがんがんクエストして貰うから、今日のところはお休みだよ。ミシエル、クロウ」

ミシエルはお腹を押さえて、今にも泣きそうな顔をして僕を真っ直に見据える。

「……クエストない。だから、ご飯食べれない」

僕の考えとは違った。

まだ一日も一緒にいるわけでもないのに、僕は何を分かった風に

接していたんだろうか。クエストがしたかった訳じゃない、食べ物を得るためにそうしろと僕が言ったからだ。その僕が今日はクエストは無いと言え、すなわちそれは、食事抜きという事を意味しているんだ。

考えてみれば、路上生活をしていたミシエル。僕のような見て見ぬふりをする人間に、何かを分け与えて貰っていたと考えるには到底至らない。ミシエルにしてみれば、誰かから何かを無償で与えられる事、それ自体が奇抜なこと、不自然なことなんだ。 思考の至らない、そんな異常事態なんだ。

「ごめん、今の無し！ …… 今日のクエストは買物に付き合う事！ …… で、このパンは先払いだから、わかった？」

そう言っただけでテーブルの上に置いたパンを指さす。すぐにミシエルの顔もパアッと明るくなる。

「うん、わかった！」

そう言っただけで紙袋を抱きしめる。 …… つまり、今日の買物に付き合う事でミシエルは、このパン全部を手に入れたということになる。「ミ、ミシエルさん …… ミシエル！ クロウさん …… 僕に一個だけ欲しいんでパンを分けてください」

ミシエルは渋々といった風にキャロットパイを一つ渡してくれる。「ありがとう」

すると、マスターが紅茶と黄みがかった白い液体を黙って置いて行く。ほんのりと豊かでサッパリとした甘い林檎の香りがする。マスターは話す時には優しい口調なのだが、いつも無口だ。

「これはパンのお返し、飲んでみて」

「 …… あまーい！ うまーい！」

口に合ったようだ。さて、問題はこのキャロットパイ …… 。

「いただきます」

「 …… ？」

「食事を取る時には、食材や食材を育ててくれた人、料理を作ってくれた人たちに感謝の気持ちを込めて、いただきますって言うんだ

よ

「ん、いただきますー」

「いただきます」

キャラロットパイを口に運ぶ、にんじんの香りがやたら強く、そして異様な甘ったるさが口を包む。僕はそれを、苦虫を噛み潰したような顔で食べ切るしかなかった。

ミシエルはというと、よほどお腹が空いていたのか、それとも甘いのが良かったのか美味しそうに、二口、三口と頬張っていく。結局、朝食ながらパン四個という大食漢顔負けの食いつぶりを披露してみせた。

流し込むようにキャラロットパイを食べ。口直しに頼んだサラダが無くなる頃には、ミシエルは目を瞑って幸せそうにパンの入った紙袋を抱いていた。

「ご馳走様でした」

「……さまでした」

もう寝入ってしまいそうなミシエルを見て、つい長居する事になった。

第三日 トロな休日〜昼間〜 (約5000字)

喫茶店を後にして、そのまま衣料品店を目指す。といつても僕には子供服を取り扱ってる店の心当たりが無いので、大通りをぶらつきながら探すことにした。

すでに陽は昇りきっていて、昨晚の雨跡もほとんど残っていない。日陰に小さな水溜り、それすら掻き消そうと陽気を放っている。冬の用のケープだから、暑いのだろう険しい顔をしているミシエルだが、やはり紙袋を大事そうに抱えてついでくる。昼食は必要無さそうだけど、早く服を一新したいところだ。

大通りにあるからか、一面ガラス張りという珍しい衣料品店をすぐに見つけることが出来た。全面ガラス張りやガラス戸の様な厚手のガラスの製錬は、製錬所が限られてくる。その上、需要も少ないのでかなり高価なのだが、それを差し引くほど集客力があるのだ。例えば、今の僕のような客に対して。

ちようつがい
蝶番の具合が良いのか、想像より軽い動きでガラス戸を開け店内へと押し入る。

「いらつしゃあいませー！」

弾むような軽やかで澄んだ声が響く、見回せば、流行のファッションなのか店の制服なのか判別の付かない、給仕の格好を模したような派手で明るい暖色を織り交ぜた服装をした、僕と年代くらいの若い女性店員。それとその格好に負けないくらい明るく、カラフルな壁紙が印象深く映りこむ。

僕がこの店に入ったのはもちろん、外から子供服が見えたからだ。店員に軽くお辞儀をしてみせて、そそくさと子供服の見えた辺りにミシエルを引っ張っていく。

「これから、クエストに必要なミシエル、クロウの服を買いぞ。もちろん、ちゃんと着こなしてもらおうかな？」

「おー、わかった！」

思っていたより種類が多く、無地のポロシャツから装飾や刺繍の凝った革ジャケットまである。ふと横を見れば、上流階級の晩餐会について来る子供が来ていてもおかしくない豪華なドレスが掛けてあった。僕とミシエルだけで、これと決めるには難がありそうだ。

「お子様の服をお探しですかあ〜？」

途方にくれそうだった僕に、救いの手が差し伸べられる。

「ええ、普段着を何着か。まず先に、何でもいいので一着」

「ええ〜つとあ〜、」

「女の子です」

必要以上に間延びしたそれに答えを返すと、あつという間に上下揃えて持ってくる。ミシエルの顔立ちが男の子っぽいからじゃなく、多分服装のせいなんだろうと思う。実際、パン屋のオバサンは当てられたわけだし。

「よし、着替えてくるんだ、ミシエル「クロウ！」

女性店員に案内されて試着室へ向かう。とりあえず、着替え終わったら出ておいで。とだけ言って一人で着替えさせる。

しばらくすると試着室のカーテンを下から持ち上げて這い出てくるミシエル。出かける前に言った、ケープを着ておけという僕の指示を忠実に守っているのだろう、ケープを纏ったままの姿だった。そのケープを剥ぎ取った僕はすっこけそうになった。というのも、タータン柄の青いスカートと白いレースのシャツを着ているのだけ、ど、シャツの向きが前後逆で、どうやって履いたのかスカートは裏地が思いっきり外側だった。

「ユ、ユニークな妹さんですね……」

間延びした口調だったはずの店員がボソツとこぼす。マジ勘弁、と聞こえた気がするのは、忘れてしまおう。

「い、今直すんで！」

なかなか離そうとしないパン入りの紙袋を預かっていたので、これを左で抱え上げ、右手でミシエルを引っこ抜いて持ち上げ、試着室へ入る。捻っているので痛みが走るが、そんなことは後回しだ。

「スカートが裏つ返し、シャツはこつちが前。こうして着るんだぞ」
我ながらよく着せ直させるものと感心する余裕も無く、手早くミシエルの服装を整える。そして今の服の分だけお金を支払って、もう少し見ていきますと告げて、元の場所に戻る。面倒くさい客とも思われたのだろう。それ以降、女性店員が話しかけて来ることは無かったが、結局は普段着四着、下着、軽めのコート、寝巻き、レインコートのお買い上げとなった。締めて六七二オレン（oren）の支払い、一人の客としては上々の支払いだろう。

オレン（oren）というのはオルフィードにおける通貨単位の事で、金銀銅の三種の硬貨を使って取引を行うのが主流だ。地域や流通なんかによっても差はあるが、リザリアでは、手のひら大のただの麦粉パン一個が一オレンに相当する。

金銀銅の順に価値が高い。厳密に言えば、サイズや形状の違いで価値が違い、それぞれ金貨三種、銀貨四種、銅貨四種あつて基本的に円形硬貨で、価値と重量が比例する。そのため、大きい物は直径もそうだが厚みも増す。

円形銅貨は真鍮製だが、銅貨の一番小さな物にベル型の物がある。それだけ銅にアルミニウムを混ぜたもので、特別にピースオブレソと呼ばれる。採算が合わない為と考えられるが、基本的にピースオブレソは滅多に市場には出回らない。従って、一オレン単位で取引するのが売買における暗黙のルールといえる。

価値的に銅貨と銀貨が主に流通している。金貨は価値が非常に高く、特に大きいサイズの物を持ち歩く者はそうそういない。何月分も給料をそっくり持ち歩くようなものだからだ。

「ありがとおございましたあ〜」

女性店員の口調も戻っていたが、それを現金なものと思うのは余りに早計だろう。世話にもなっているので、僕も礼を言つと一際可愛らしい笑顔を見せてくれた。

想像以上の出費に、僕の財布は一瞬でくたびれ果ててしまう。

先の事もあって、ミシエルの金銭感覚が僕らと違うのでは。それがミシエルを悲しませる事にならないか、ちよつと心配していた。支払い台の客側の縁が、台上より出っ張って高く作られており、その構造を利用して見えないようにお金を払った。無論、子供に支払いを見せないようにそうなっている訳ではなく、仕立ての作業台として使っているのだろう。その証拠に生地が傷まないよう出っ張った縁は丸く削られていて、先端には樹脂が固まっている。

もっとも出っ張ったその縁に、痛みの引いてきた右手をぶつけて、激痛に顔を歪める事になった訳だけ。

店を出る際には、女性店員が間延びした口調で同じ事を言った。挨拶自体は特別な事ではないのだけど、驚いたのはそれに対して、ミシエルが、ありがとー。と返したことだった。僕の真似だろうか、それでもいい傾向にあるのは確かだろう。

綺麗に畳まれ収納されているといっても流石に両手が塞がるもので、僕は子供服一式入りの大きい紙袋を、ミシエルはパンの紙袋を抱えて家に戻ってきた。

何度もぶつけている右手はそろそろ限界が来そうだ。普通、薬局の隣には病院があり、併設されている事もしばしば。もはや、それらはセットと考えると間違いが無いほどだ。小さな診療所にも行けば、診察してくれた医師が顔を出すような感覚だ。医療費よりも薬の値段の方が圧倒的に安いいため、薬局の方が繁盛するのだろう。もっとも、医者も薬もピンきりなので、それがどうのこうのとは全く言えない。

何はともあれ、まず医者に行こうと思ったのだけど。財布がすっからかんのまま行くわけにもいかない。銀行に行くのもありだけど、今は家の金庫で補充すれば十分だろう。

ミシエルの部屋も決まっていけないので、子供服の入った紙袋は居間に置きっ放しにしたまま、お金も補充し外へ出ようとするも、ミ

シエルがパンの紙袋を持ったままだった。

「ミシエル「クロウ、パンは置いていこう」

「ヤダ」

「……誰も取ったりしないし、家の中なら持ち歩くよりも安全なんだ。何せ、パンが潰れないから、美味しいままでよ？」

僕はこれっぽっちも美味しいとは思っていないけど。すると、紙袋の中身を覗く

「ん……わかった、置いてく」

あれだけ大事そうに抱えてれば、どう考えても潰れるよね。ミシエルはパンを置いて行く決心したものの、名残惜しそうな顔をして、家が見えなくなるまで振り返ったりしていた。といつても、角をすぐ曲がったのでそれほど長い間じゃない。

風が吹く度に、スカートを気にするミシエル。初めて履いた、かどうかはわからないけど。それはパンツが見えることを気にしているのではなく、妙な涼しさと重量感の変わった感覚、気持ち悪さがあるからだろう。僕も初めてスカートをはいた時にそう感じたから言っておくけど、学院時代のちょっとした馬鹿騒ぎの余興でやっただけで、女装趣味ではない。ともかく、服装には不安は無くなった。ミシエルはおもちゃやら露店の品物に気を取られず、僕に懸命についてくるので、迷子になる心配だけは無さそうだ。けれど、行動自体はまだ心配な所がある。あまり言葉も発しないが、どれくらいの教養があるかも不明なままだ。

どうせフランクハンタークエストなんてコミュニケーションが取れば、ミシエルぐらいの子供にだって難なくこなせる筈だから、その辺りが結局重要になってくる。などと考えていると、東ギルドにも程近い診療所に到着する。

「今日はどうなさいましたか？」

診療所らしく5人位座れそうな待ち合い用の長椅子が一脚置いてあるだけで、小奇麗にされている。調度品と時計にどうしても目が

行く作りは、計画的なものではなくて、単純に何もなく殺風景な所為だろう。受け付けには、若い男性が真っ直ぐに立っており、白衣を羽織っていた。これといった特徴も無い、清潔感を全身から放っているようだった。

「手を痛めてしまったので、診て貰えますか？」

「では、奥の診察室へどうぞ」

診察室へ入ると、誰もおらず受け付けの男が入ってきて、

「では、座って。腕を見せて下さい」

言いながら丸椅子に座る。医者と受付が同一人物ときたか、世の中色んな人がいるものだ。右腕を差し出して、どうして痛めたかの説明を要求された。僕は早く治したいという想いが先行しているので、正直に椅子から落ちて挟んだと話す。医師にちらりと顔を見られ、それが今更に恥ずかしさを誘う。

しばらく、手を捻ったり押ししたりして、痛み状態を聞かれてとを続けていたが、終始ミシェルは僕のローブを掴み続けていた。医師が怖かったからか、僕を心配してくれての行動かは不明だけど。大丈夫。と笑顔で言っても、そのままだった。

「捻挫です。湿布を貼って安静にしておいてください。明日、明後日になったら腫れるかもしれませんが、その時は温めるように心がけてください」

「はい、わかりました。湿布もお願いします」

やっぱり、診察してもらって良かったと思う。確かな診断もそうだが、アドバイスもありがたく思える。ほんの数分、診て貰っただけで五〇オレンと高い出費ではあるが。

その場で診察料と湿布代を払う。処方薬というのはその場で調剤して貰うか、薬局で貰うかだ。今回は湿布なので持って来て貰えばそれで済む。手間をわざわざ増やす必要はないし、薬局に入ったらこの医師が出てきたなら、笑い転げてしまいかねない。いやむしろ、尊敬してしまうかも。

さて、次は何をするんだっけ？

「忘れてた！」

つい口を突いて出てくる言葉。それもそうだ、明日からどうするか決めてすらいない。西の空はまだ明るく、太陽もしっかり見えるけど影はしっかりと伸びており、ずんぶん長くなってきた。

ここから西ギルド周辺まで行って、部屋を探すのはほぼ不可能。ミシエルを連れた状態では片道1時間以上掛かるだろうから。日が落ちる頃から親身に部屋を紹介してくれる場所があるとは到底思えない。

消去法でいけば、馬を探すことになる。厩舎自体はリザリアには多いため、いくつか見たことはあるが、貸し出せる馬がいるかどうかは別問題。けれど、そちらの方がよほど確率が高いと思われる。

食べ物を入れると叫び鳴る腹を制して、覚えのある厩舎へと急ぐのであった。

第三日 トロな休日〜昼間〜 (約5000字) (後書き)

表・硬貨値段

<金貨>

大サイズの金貨 〓 5000 oren
中サイズの金貨 〓 2000 oren
小サイズの金貨 〓 1000 oren

<銀貨>

大サイズの銀貨 〓 200 oren
中サイズの銀貨 〓 100 oren
小サイズの銀貨 〓 50 oren
穴あきの一番小さい銀貨 〓 20 oren

<銅貨>

大サイズの銅貨 〓 100 oren
中サイズの銅貨 〓 50 oren
穴あきの小サイズの銅貨 〓 10 oren
ベル型の小さい銅貨 〓 0.1 oren

第三日 トロな休日〜夕夜〜 (約5000字)

場所に覚えがある厩舎の一つに急ごうと振り返る。すると、十歩と離れないところにレーデがこちらを指して歩いていた。

「よお。制服のまんまで、何やってるんだ？」

「これはミシエルが迷子にならないよう、目印だよ」

「ミシエルって名前になったのか？ って、女の子だったんだな、見違えたぞ」

それはそうだろう、僕の中にはもうカラスだった時のことの方が嘘に感じてしまう。それほどの変化が目の前にある。

「やあ、ミシエル、覚えてるか？ 昨日、ギルドにいたお兄さんだ」

「んー？ 知らない」

覚えてないらしい。というか、ついにミシエルで反応し上に、クロウを主張しなかった事に僕の苦労が少しでも報われた気がする。だけど、僕が呼んだことに対する反応じゃないって事が、なんだか納得いかないというか、悔しいというか。残念でならない。

「そつか。そいつは仕方ない。……お兄さんはレーデっていうんだ、よろしく」

言いながら腰を落として、笑顔でミシエルの頭をぐしゃぐしゃと撫でる。撫でられるのが好きなのか、ミシエルも笑顔になって。

「おう、よろしく！」

おう、は無いだろう……。ってこんな事をしている場合じゃなかった。

「ごめんレーデ、今急いでるんだ。馬を借りない！」

「馬で通うことにしたのか？」

「いやあ、まあ……うん、まあ……そう」

「お前、忘れてたたる……」

「ごめん」

「まあいいか、早く行ってこい……またな？ ミシエル」
「またな」

「ほら、急げ！」

僕の背中を叩くように押してそう言ったレーデは、僕達が見えなくなるまで見送ってくれていた。

そして厩舎に着いたものの、人の姿が見えない。

「ヒイヒイーン！」

脚を上げ、蹄で地面を叩き鳴らして完全な警戒モードの馬たち。

といつても、馬房から出ることは出来ないからこちらは安全なのだが、歓迎はされてない事だけは伝わってきた。ミシエルも怯えて僕の後ろにくっ付いている。

「誰かいませんかー！」

返事はかえってこない。

安全は安全なのだからと、僕は勇気を出して中へ入っていく。するとどうしたことだろうか、馬の腳踏み音はどこかへ消え去り、心なしか、近くにいた馬ほど馬房の奥へと距離を取ろうとしている気がした。馬は臆病な性格と聞いたことがある。けれど、ここまで警戒されたりしたのは初めてだった。

「誰かいませんかー！」

同じ台詞で呼びかけると

「へいへい。御用ですかい？」

出っ歯が特徴的な小柄な中年男が、空の馬房から姿を現す。

「良かった、馬を一頭借りたんですけど」

「えーえー。よろしいですとも……で、馬を借りたことは？」

「借りたことはないんですが、飼ってはいました」

「ほーほー。で、どれくらい借りたんですか？」

「予定は1週間で」

「はいはい。そしたらこっちへ……馬を選んでもらえますか？」

案内された先には、ずんぐりむっくりで脚も太い馬、背が高く脚

の細長い馬、背が低く銅が長い馬と、大小様々な馬が並んでいる。馬ばかりでなく、ラマ、ロバ、牛、羊までいる。

この中から選ぶとしても、街中を走るだけなので、特別スピードは要求しない。荷を大量に乗せるわけでもない。騎乗用動物ならどれでもいいくらいだ。とりあえず、一頭ずつ見るために厩舎内を巡る。

先程まで僕にくっ付いていたミシエルが、とある馬房の前で跳んだりしゃがんだりして中を見ているではないか。戻って見ると、その馬房には早く走るために改良された馬種、サラブレッドがこちらを見つめていた。その馬は白い毛並みに茶色の斑点模様をしていた。ミシエルはおもむろに近付くと、馬房に渡された木柵をバシバシと叩き始める。気に入ったのだろうか、それとも挑発してるのか。白い茶斑点のサラブレッドがそれに反応して、嘶きながら両前足を高々と上げる。まるで二足歩行でもしようとしたみだりだった。危険を感じた僕は咄嗟に、両腕ですくう様にミシエルを抱え上げた。

サラブレッドが落下するように前脚を下げ元の姿勢に戻ると、ゆっくりと頭を下げこちらに近付ける。その頭をミシエルが両手で撫で回す。馬流のお辞儀の仕方だろうか。

「おやおや。お客さんこいつに好かれるとは珍しいですね」

「今のって好かれたって事なんですか？」

「えーえー。いつも客を乗せるどころか、触らせようともしないんでね」

そんな馬貸し出そうとするなという突っ込みは、この際置いておこう。

ミシエルが馬を撫で回している間、馬は動かずに素直に撫で回されている。中年男の話が仮に嘘だとしても、気が合っているのは確かかなようだった。

「じゃあ、この馬を借ります」

「はいはい。それじゃあ保証金四〇〇オレンを含めて、こんなと

「ころですかな」

どこから出したのか算盤を弾いて、見せてくる。算盤の見方は分かるがどうも疎い。やっとの思いでいくら提示してきたかを理解する。

「高っ！」

中年男が提示してきた額は九八二オレンだ、いくら保証金を含んでるとは言え、これなら一頭買った方が安い。どう考えても、足元を見るポツタクリ価格だった。

「おやおや。冗談ですよ旦那、本気にしないでください」

冗談には全く感じられないが、さも当たり前のように流して、算盤をしまう。

「ではでは。二〇〇オレンぽっきりでお貸ししましょう……なんと、今なら貸し出し期間分の飼葉もお付けしますぞ！」

「あーあの、この街に住んでるんで、分かりますけど。……五〇オレンで十分ですよね？」

男はジトツとした眼つきに早変わりすると

「へいへい。そんじゃあ五〇オレンで……」

そう中年男のやり口は典型的だった。まず保証金と法外な貸出し代金を合わせた額を提示して、次から保証金を抜いた額で話をする。それも貸出し代金は半額以下で、飼葉も付ける。これで相手が話を飲めば万々歳。飼葉も譲渡はするが運ばないので、更に運び賃が必要になる。飼葉なんて実際、厩舎では必ず売られている、それもとでも安価。何日分もの飼葉ともなれば相当な量となるので、運搬費としていくらポツタクリられるか知れたものじゃない。

「あと、一〇オレン足すんで飼葉を定期的に家に送って下さい。場所……」

結構近いし、割高かも知れないが、手間賃と考えれば痛くは無い。

「はいはい。わかりましたとも、商売上手ですなあ旦那」

とはいえ、ミシエルを預かることになってからこちら、働いて貯めた給料の他、貯蓄を一気に散財している。当面、次の給料までは

十分持つものの、銀行にはあまり預けておらず、何か入用になった時には危ないだろう。気は進まないけど、金銭面で家族を頼ることを覚悟しておく必要があるようだ。

馬をつれて帰路につく頃には、太陽はすっかり姿を隠し。それでも西空を赤く照らし、その存在をしつかり主張していた。

僕は手綱を引き、ミシエルは嬉しそうに馬の首筋にしがみついている。

「ミシエル、馬に乗るのは楽しい？」

「うん！ 楽しい。……ミシエル「クロウ！」

直されてしまった。ミシエルと呼んでも、もう大丈夫そうだ。

「馬の名前も考えないとね」

「名前？」

「そうそう、こいつの名前」

「パカパカ！」

「そ、そう。いい音……いや、名前だね。……よし、今日からお前はパカパカだ」

まあいいか、結局馬を借りることは出来たし、今日の買い物の首尾は上々だろう。

明日からの事だけど、よくよく考えればミシエルを一人残して置くことは出来ない。ギルドに連れて行くしかないんだ。今更そんな事に気付くなんて考えの足らなさを痛感する。

ギルドに連れて行った後の事に、今から気を揉んでも仕方がない。西ギルドの職員がいい人たちであることを願うしかない。

ミシエルとパカパカを庭に残し、そそくさとキッチンに向かう。お腹を満たすために調理をする、調理といっても肉や野菜を適当に刻んで炒めただけの物と、固形調味料をお湯で溶かしたブイヨンスープだ。料理を食卓に運び、ミシエルを呼んで来る。

「ミシエルのパン二つと、こっちの炒め物とスープを交換しないか

？」

足の着かない椅子に大人しく座って、じつと肉野菜炒めとブイヨンスープを見つめていたので、そう切り出した。

「うん、取引する」

「頂きます」

「いただきます」

最初からそのつもりだったのだけど。やはりキャロットパイを直接口に放り込む気になれなくて、潰れたキャロットパイをブイヨンスープに浸す。スープにパンを浮かべる事が想像の外と言わんばかりに、ミシエルは不思議そうな顔をする。

「こうして食べるのも有りかなって思ってたね。より美味しく食べるために考えて、工夫したりするんだ。まあ、よく失敗するんだけど……うん、美味しくなった！」

中身をよく混ぜて口にすれば、甘さはスープに溶け出し、さながらキャロットスープに大変身。パンのしっとり感が口に残るのも悪くは無い。具には煮立てたような甘さはあるが、僕の中ではパンとして食べるよりは遥かに高評価となった。けれどよく考えれば、流し込んで食べた後、口直しに食べた方が、もっと良かったかも。

「ん〜、うまい！」

真似をするミシエルの評価も良かったようだ。炒め物の評価は無かったものの、残さず食べたので良しとしよう。結局、キャロットパイは当日中に食べ切ってしまった事になる。満腹のお腹を撫でるミシエルを残し、後片付けを済ませてしまふ。

ミシエルの部屋には、僕の部屋の向かいのゲストルームをそのまま使うことにした。寝具やクローゼットがあるからだけど、埃が結構積もっていたので、大掃除をする羽目になった。それでも二人で掃除をしたら予想よりも早く終わった。

埃を被った服を洗濯に。そして、額に流れる汗もそのままにぬるく温まった風呂に一緒に入る。昨日はペットを洗うみたいにもシエ

ルを洗ったけど、今日は手本を見せながら。ミシエル自身の手で身体を洗わせて、それを手伝った。終わり掛けには素早く洗えるようになっていた。ついでに歯の磨き方を手を取って教えた。

買ったばかりのパジャマを着させて、居間でくつろぐ。ミシエルは居間にある小窓に乗り出してパカパカを眺めている。パカパカは脚を折り、身を伏せて眠っている。

思い返すと、ミシエルの事を考える暇が今まで無かった。一先ず、現状を整理しておこうと思う。

ミシエルと出会ったのは一昨日。デュライという少年ソルバーを中央ギルドへ案内する途中、デュライのクエストアイテムの入ったと思っていた空袋を盗んだ後、彼に取り押さえられた。因みにその時抑えられて出来た痕は殆ど治っている。

そして、中央ギルドで僕が質問をすることになった。その時の内容からすると、物品をお金に換えてくれる取引相手がいたこと。取引相手とミシエルの関係は直接関係が有るようだったけど、他の者も相互関係は不明なまま。ミシエルにとって、生きるための行動が盗むという行為だったのだろうか。取引相手にお金を貰っていたと言うことはミシエルは何かを買っていたと考えられる。少なくともお金の使い方はわかるだろう。というか、今まで路上で生きてきたんだから、僕なんかよりミシエルの方がよっぽど詳しいんじゃないだろうか。

結局ミシエルの身柄は、軍に引き渡す事を拒んだ僕が依頼主となつて、ミシエルをソルバーとして雇うという構図で、僕がミシエルを預かることになった。もっとも僕が出任せに言っているだけで、ギルドを通じた仕事ではないので、ソルバーではないけど。

これだけ考えると、僕が心配性なだけで、ミシエルをすぐフランクハンターにして放っておいてもいいのかも知れない。乗りかかった船でもあるし、何よりこのままミシエルの事を投げ出してしま

のはあまりに無責任というものだろう。

経緯としては、ギルド職員である僕が心配症とでもいう病気を起こし、浮浪少女を引き取ったって事かな。

推測ばかりだけど、ミシエルの生活面での現状。まずは性格は控えめで大人しいと思う。特に物覚えは良さそうだという事。言葉については浮浪児が持つような弊害があるのではなくて、無口なだけかも知れない。蜂蜜のような金髪に、^{やっ}奪れてはいるけど特徴の少ない顔立ち、特徴が少ないってことはその分整っているって事、だからきつと美人になるだろう。

そんな事を考えていると、窓の外に見えていた灯りは随分と減ってきており、床ではミシエルがゴロゴロと転がっていた。

「ぐろぐろ」

「あつこら！ パジャマが汚れるじゃないか……もう寝ようか」

「お」

覇気は無く、眠気しか帯びていない返答を聞くと、手を引いてミシエルの部屋へと連れて行く。ベッドに寝かせ、毛布を掛ける。

「僕は向かいの部屋で寝るから、何かあつたら来るんだよ？」

「お」

もう夢の世界へ身体を半分以上突っ込んでいるようだ。何かあつたらと言っても、トイレには一人で行けるし、もう眠りそうなので心配は要らない。そんな訳で、僕も自分の部屋へ戻ってベッドに潜り込むとそのまま意識を失った。

第四日 キイな仕事と事件 (約8000字)

朝の日差しを浴びる前に起きたのはいつ振りだろう。窓の外では、太陽が顔を出そうとしている所だった。それでも太陽との競争に勝った優越感には浸れず、ぼんやりとしていた。悪夢を見て目が覚めたのだったけど、どんな夢だったかは忘れてしまった。レーデとデユライが出てきた気がする。頭を振るえば、視覚だけが覚醒する。けれど頭の中はずっともやもやしたまま、ついついぼうつとしてしまう。

寝癖もそのままに、ミシエルの部屋を覗けば、毛布がベッドの下に落ち、ミシエルは三日月を形取って横になっていた。毛布を拾いふんわり掛けて、そっと部屋を後にした。

パカパカはといえば、いつの間にか運び込まれていた飼葉を美味そうに食べていた。干草と果物だろうか。隣にはワイン貯蔵などに使う小さな木樽が置いてあり、開いた蓋からは水が入っているの見える。気を利かせたサービスだろうか。

いつもより早めに家を出る必要があるので、このままぼやぼやとしていたら時間が無くなってしまう。身支度だけ整えると、そそくさとパン屋を目指す。これが僕の日常だ。

この時間は焼きたてパンの数が違う。食パン、硬パン、バターロールはもちろん、カレーパン、クロワッサン、ベーグル、デニッシュ、パイナップル。うーん、食欲をそそるいい香りだ。

「おや、おはよう、ミシエルちゃんはどうしたんだい？」

「まだぐっすり眠ってますよ」

「そうかい。これから、西ギルドまで通いかい？」

「ええ、馬を借りたのでそれほど急がないですけど」

クロワッサン、砂糖蜜掛けのベーグル、ソーセージパン、アップルパイを取ってオバサンに渡す。

「大変だねえ。ま、頑張んな！」

「はい！」

「ところで、キャロットパイはどうだった？」

「僕はちよつと……。ミシエルは美味しそうに食べてたんですけど、こんな所でおべっかを使っても仕方が無い。」

「甘すぎたし、そうだろうねえ。残して捨てるのも勿体無かったし、ミシエルちゃんが美味そうだったって言うんなら良かったさ」

……。オイ。と心の中で突っ込みを入れて、紙袋を受け取る。

「今度はミシエルちゃんを連れてきなよ？」

「はい」

家の戸を開ければ、すぐさま僕を見つけたミシエルが走って、突っ込んでくる。

「ぐはっ」

腹部に大突撃である。

「どうしたんだ、ミシエル」

「どこ行ってた！」

「朝御飯を買ってきただけだよ」

ミシエルは、うゝゝと唸って頭を僕のお腹に押し付ける。結構痛い。

「心配してくれたんだね、ありがとうミシエル」

そう言って、頭を優しく撫でる。まだ唸って頭をめり込ませているが、弱くなった気がする。

「昨日のパン屋さんのパンだよ、キャロットパイじゃないけどね」

そう言って紙袋を見せる。ミシエルはそれを見上げる。紙袋越しにパンの香りが流れ出す。

「ん、許す」

今日はコーナム産とルーナタウン産のブローケンオレンジペコを七：三でブレンドティーを作る。凝っていると言われるが、僕が気

に入っている種類の物を四つ揃えて、等級も一、二種類しか置いていない。実家に置いてある茶葉はもつと産地、種類と等級が多い。もつともそれは、客人の好みの合わせられる様になってだけで、普段使う茶葉は大体同じだ。

沸かしたお湯と茶葉を淹茶ポットに入れ、そのポットを鍋の湯につける。これが僕の紅茶の淹れ方なのだから、変だと言われようが仕方ない。

一つはそのまま。もう一つは砂糖を多く入れ溶かし、湯煎ならぬ水煎で少し冷やし、ぬるくして。

「さあ食べよう。この中から2つ選んで」

紙袋を開け、パンを並べる。

「ん~~~~~」

それぞれ見比べているが、決めかねているようだ。考えにくい事だけど、もしミシエルがパンを食べたことが無かったとしたら、判断材料はキャロットパイしかないわけだ。選ぶことは、過去の経験や体験から選んだ未来を連想し、予想することに他ならない。

もちろん、例外もあるけど。そう考えたなら、判断材料の多さは選択を容易にし、判断材料の少なさは選択を困難にしてしまう。

「じゃあ、四個とも半分こにするか？」

「おー、半分こ。半分こする」

クロワッサン、砂糖蜜掛けのベーグル、ソーセージパン、アップルパイを包丁で半分にする。クロワッサンは断面が完全に潰れている、ベーグルとソーセージパンもそこそこに潰れた。ちょっと残念だけど、仕方ない。

「いただきます」

「頂きます」

ミシエルの評価によると、第一位はアップルパイ、第二位はソーセージパン、第三位はクロワッサン、第四位は砂糖蜜掛けのベーグル、第五位は紅茶だそう。パンは全部うまい！と言いなながら食べていた。紅茶に関しては、ジュースの方が美味しかったらしい事、

それだけを仰いました。味覚が違うのは当然だけど、このままだと僕は味覚に対する自信を失いそうですよ、ミシエル先生。

「ごちそうさまをして、食器を軽く片付けているとミシエルが今日の事を聞いてくる。」

「リキット、今日のクエストは？」

「えー、今日のクエストは、なんと……！」

何も考えてません。

「西ギルドに行つて……」

「行つて？」

「……大人しくしている事！」

「？」

「じゃなくて、やっぱ、向こうに着いてから、色々決めよう。僕も行くの初めてだし」

「わかった！」

「さあ、着替えて」

「おー！」

ミシエルの着替えを手伝わず、自分で全部やらせる。時々、このボタンはこつちとか言うだけだ。それでも、順調に着替え終えた。ドレスや正装のような特別な着方のあるものでなければ、すぐに憶えてしまうだろう。今日の服装は、白のカッターシャツと、黒を基調としたゴシックパンツでひらひらの装飾が多い。ミシエルの一番のお気に入りらしかった。

ボサボサ髪では勿体無いと思ったので、今日からミシエルの髪を梳く事にした。ボサボサ髪と言ってもショートなので、手間はそれほど無かった。

「おっと、遅刻しちゃうかも。行こう！ 行ってきます」

「行ってきまーす」

ミシエルは相変わらずパカパカの首にしがみ付いているが、今はその方が助かる。とはいえ、遅刻するかもと言っても、サラブレッ

ドに街中を全速力で走らせたりはしない。駆け足で程度で十分だ。それでもかなり早く、二〇分と掛からずに到着するかもと思うほどだ。

「いいぞ、パカパカ！」

「パカパカはいいぞ〜！」

大通りを走るのは初めてで、これほど速度感があるものかと少し驚いている。実際、街中と野外では全く、感覚が違う。全速力で走ったらきつとスリルがあるだろうなんて考えていると、すぐに西ギルドに着いてしまう。

とりあえず、パカパカを近くの厩舎に預けてくる。

「おはようございます、東ギルドから来たリキットです」

「やあ、話は聞いてるよ。俺はネスト。あつちは……」

大工ですと言わんばかりの、肉付きと日焼けをした大柄の男。若くも老いてもいないその男はそう言っつて、奥を指差そうとする。

「おはようございます、私はマルガレットです！ マルガッて呼んでください！ リキットさん！」

奥から指差される前に、眼鏡をかけた女の子があつという間に僕の目の前までやってくる。

「は、はい」

「ところで、こちらのお嬢ちゃんは？ 娘さんですか！」

目をキラキラ輝かせながら聞いてくるマルガ。

「いえ、事情があつて預かつてる子で、ミシエルって言います」

「ミシエル＝クロウ！」

「そっかあ、ミシエルちゃんね〜よろしくね〜！」

そう言っつて、ミシエルの手を握るマルガの表情は恍惚としており、今にも口の端から涎を出しそうな勢いだ。

「マルガはお喋りで、しかも色んな話に首を突っ込むのが好物なんだ。お前さんも運が悪かったと諦めてくれ」

そうネストが耳打ちしてきた。

「まあ、短い付き合いかもしれないが、よろしくな」

「はい。よろしくお願いします」

「よろしくー」

「そんなあ、短いだなんて言わないで下さい。寂しいです。クスン……………」

「……………」とくくろくで……………」
そうして、数時間に及ぶマルガの質問責めが始まった。その責め
苦は、ミシエルが、お前めんどい！ と言つまで続くのであった。

ミシエルはマルガを無視しながらも、懸命に掃除をした。その結
果、西ギルドの中は光り輝きそうなほど綺麗になった。逆に、昼食
のメニューにミートスパゲティを食べた時の汚れも手伝つて、ミシ
エルの服は一日でずいぶん汚れてしまった。

良くやったと撫でて、ご褒美を考えてみたのだけど、これといっ
ていいアイデアも思い浮かばなかった。

別に浮かんだアイデアの中に一緒に料理を作るといふ生産的なも
のがあつて、今日はそれを実行することを決めていた。

帰り道、パカパカに乗つて早足で進む。途中で、芋、人参、玉葱、
豚肉、カレー粉を買つて。そう、今日はミシエルと一緒にカレーを
作るつもりだ。

カレーは元々、サリツサ地方に伝わる伝統料理に使う、何種もの
香辛料の粉末を混ぜ合わせた、粉の事をいう。その粉を使った料理
は痺れるような辛さと、鼻と食欲を刺激する香りが特徴的だ。しか
し、サリツサ地方の人間でない僕たちの言うカレーとは、サリツサ
カレーを基礎にまるやかに仕上げ、旨みを増やしたカレー粉を大量
の水で溶かし煮込んだソースの事をいう。サリツサカレーを使った
赤いソースを本格カレーというのに対し、今日作ろうとしている黄
色のソースは中央風カレーという。

もうすぐ家に着くという所で、レーデが東ギルドに入っていくの
が見えた。僕も東ギルドの様子が気になつていたので、馬を停め、
後を追うことにした。

「ミシエル、ギルドの様子を見てくるから、パカパカと一緒に待ってて」

「わかった、待ってる」

待っていると言いつつも、首に巻きついているわけだけど。

ドアベルが鳴ると、中にいたのは修理に来ていた男二人女一人そしてレーデ。全員こちらを注視していたが、相手が僕だと分かるとレーデが僕に近付きながら言う。

「お前、どうしてここに？」

「レーデが入ってくのが見えたから、僕もギルドの、キューブの調子がどうなってるのか気になって」

「……そうか。キューブはまだまだ、だそうだ。まあ一日目だしな……ギルドの方は、見ての通り、全てのキューブを切って開いてもないさ。職員も居ないしな」

ギルド内を見回すとその通り、キューブは全て明かりを失っていた。

「ところで、西ギルドはどうだった？」

「うん、仕事は暇なんだけど、職員の人達が個性的でね。そっちこそ、中央ギルドはどうだったのさ？」

「ああ、中央も暇さ」

「やっぱりそっか。中央の人達はどんな人だった？」

「良い人達だよ」

「……そうだ、ミシエルと一緒にカレーを作るつもりなんだけど、今日時間ある？」

「カレーか、いいね。もちろん食べさせてもらえるんだろ？」

「うん！じゃあ、行こう」

「ああ。……それじゃあ、後はお願いしますよ」
「修理、頑張ってください！」

修理職員の女性が代表して応えた。

「任せてください！ 美味しいカレー、楽しんできてください」

ギルドを出てパカパカとミシエルの待っている方へ、歩き出す。すると、夕日を反射した何かキラキラと光って、上から落ちてきて、僕の首元で止まる。

「動くな」

本で読むようなお決まりな台詞を聞いても、僕の首の前で止まっているのが剣だと認識するのにはしばらくかかった。

その声には聞き覚えがあり、すぐに赤い髪の少年を思い浮かべる。ギルド側の壁から順に、レーデ、僕と並んで、剣を突き出している者がいる。横目で確認すれば、赤い髪と黒い衣装をしている事だけがわかった。

「……デュライ？」

「隣のお前、逃げるなよ？」

「デュライ、一体何をしてるのさ？」

完全に理解不能だった僕は、質問を投げかけるしかなかった。デュライは剣を僕の首前に置いたまま、押して、剣の刃の付け根を僕に、刃の先をレーデの首元に流れるように付ける。すると、デュライがちょうど僕の目の前に立つ形になる。

「そっちのお前……」

「リキット！」

ミシエルの声だ。デュライの姿越しにミシエルが全力疾走で駆けってくる。そして、そのままデュライ目掛けて飛び込む。

「……チツ」

舌打ちをしながら、僕の真隣へと半回転しながら、するりと剣を引き構えるデュライ。

飛び掛ったミシエルと、僕の間白い3本の痕線が奔る。

着地したミシエルの右腕には見たことの無い、動物の爪の形をなした武器がはめられていた。それは爪クローと言われる武器だろう。黄と茶色の手袋の甲側から伸びた3本の白い凶器が、動物の爪のように内側に曲がっている。クローは相手の四肢を引き裂く武器だ。

睨み合うミシエルとデュライ。

「その武器……あの時のガキか？」

「リキットから離れる！」

「どんな魔法使って出してるか知らないが、それじゃ俺には勝てねえよ」

「……リキットから離れる！」

二度言つて、飛び掛るミシエル。だがデュライは、簡単に爪の間に剣を下向きに差し入れると、そのまま払うように剣を押し込む。地に足が着くや否やミシエルは後方に押しやられる。

「大人しくしてろガキ！」

剣を引き少し間を空けると、力任せに振り上げる。その軌道上にミシエルの武器と頭がある。剣先はまたしても爪の間を捉えて、ミシエルの爪は右手ごと宙に投げ出される。デュライは身体を左回転させて剣を一周させる。

「危ないミシエル！」

僕の叫びは届いたのか、弾き飛ばされた右手と爪を外向きに身体の左側へ置く、左手を爪の真っ直ぐに伸びた部分に添えて、間もなく、下から上へスライドしながら回転するデュライの剣が容赦なく飛んでくる。爪と剣が交差して、ミシエルは剣に掬い上げられるように拾われて、そのままギルドの壁へ叩きつけられる。

「ぐあー！」

ドツツつと鈍い音を立てた後、壁に叩きつけられたミシエルが、壁に弾かれて落ちていく、ミシエルが、倒れる。

「ミシエル！」

すぐに駆け寄り膝を突いて抱き寄せる。

「ミシエル！ 大丈夫か！」

「う？ ……だい……じょーぶ」

僕はミシエルを覆い抱きしめる。

「さあ、待たせたな？」

レーデの方を向き直るデュライ。もう、何が何だか分からない。

ミシエルを一刻も早く医者に見せたいが、レーデを見捨てていくような事はできない。

「……許してくれ」

僕には、そのレーデの言葉の意味が全く分からなかった。

「知っている事を吐いてもらおうか」

「ああ、わかった。……初めは偶然だったんだ。……ついつっかりソルバーの事を話してしまつて、それを聴いていた奴が俺に話を持ちかけてきた。ソルバーの情報を売れと。……どうしても金が必要だったんだ」

レーデの言っているのは多分、失敗報酬0%の薬素材クエストのソルバーの事だとすぐにわかった。ミシエルがデュライのクエストアイテムを狙つた事。デュライを狙うように誰かからの情報を得ていた事。レーデがデュライの情報をその誰かに流したとすれば、全ての流れが合致する。

それは失敗報酬の無いクエストが、ソルバーも依頼人も互いを知らずに進行するクエストで、その最たる例がアイテム收拾という事に尽きる。この場合においては、ソルバーの情報は一切外部に出される事がない。これはソルバー保護という要素が強い。今回はデュライがあのかクエストを受けたことは、僕とレーデしか知らないことになる。

ちなみにその逆、失敗報酬の有るクエストは内容によって、顔合わせというものが出来る。クエストを引き受けるソルバーと依頼人が互いを確認できる制度だ。もっとも相当慎重な人間しかこの制度を使つたりしない。

「フン、お前の事情なんてどうでもいい。……俺が知りたいのは、その情報を買つてる奴の事と、その居場所だ」

デュライが剣を向け、正直に話すレーデに詰め寄る。

「……奴は依頼人じゃないが、居場所なら知っている」

「じゃあ、案内してもらおうか？」

「ああ」

「……すまない、リキット……こんな事に巻き込んで」
「……レーデ」
「早くミシエルを医者の所まで運んでやってくれ……」
「……うん」
レーデはゆっくりと歩き出した。デュライは剣を鞘に収め、何事も無かったかのようにレーデの後ろを追う。

「ミシエル！すぐに医者に診せてやるからな！」
「えー、医者ヤダ！」

言つと、すくつと立ち上がるミシエル。……えーと……全然……元気に見える。

「大丈夫なのか、ミシエル？」
「うん！ 大丈夫」

壁に叩き付けられたのになんで、と困惑している僕の頭の中に声が響き始める。

(リキットとやら、ミシエルを心配してくれるのは有り難いのだが、この子は大丈夫だ。問題無い)
「えっ？」

その低い声ははつきりと響いて聞こえるのだけど、周りを見回しても、離れた所に一連の騒動により出来たと思われる人だかりが残っているだけで、その声とは距離感が全く違った。

(僕はここだ、ミシエルの右手……この武器に宿る精霊だ)
「……せいいい、と言いますと、あの精霊ですか！」

精霊というのは魔法の基礎となる能力を持つ存在の事で、普通には見ることが出来ない。魔法は精霊との契約によって体内外のマナを使用することで発動する能力というのが魔法の通説で、精霊無しに魔法を使う事は出来ないとされている。

因みに、魔科学と魔法はマナを使う事以外は、全く別の分野で共通点が無い。なので、魔法や精霊ついて詳しい事は僕は全く知らない。

(喋らずとも良い。お主とは通じた故、お主が伝えたいと思える事であれば、儂には伝わる。それに精霊云々と口にする事は、お主にとつても良い結果には成り得ぬ)

(……えっと……こ、こうでいいのかな?)

(うむ、宜しい。……申し遅れたのだが、故あって本来の名は教えられぬ。今は器の名を借りてパンサークローと名乗っておる)

「そ、そうだ！ ミシエルは無事なんですか！」

つい喋ってしまったけど。これって、周りの人から見たら、襲われた事で精神が錯乱しているように見えるんだろうな。

(詳しく話すには時と場が適切で無い故、言及せぬが、ミシエルは無事だ。)

デュライに連れて行かれたレーデも多分無事だ、と思いたい。レーデが危険になるとしたら、レーデに対し用の無くなるデュライよりもむしろ、情報を売っていたという相手が逆上した時だろう。

そういえば、さつき精霊はパンサークローと名乗ったっけ。ミシエルがカラスだった時のストリートチルドレンのリーダーと同じ、パンサー。

(……聞いておるか?)

「え？」

(場所を変えぬか、と申しておる。……それに、ミシエルもカレーとやらを、一緒に作るのを楽しみにしておるのだ)

「おお、カレー！ カレー！」

色々あって少し混乱気味だけど、レーデをこのまま放って置いていいのだろうか。レーデは確かに自分の非を認めて、デュライを案内した。ミシエルの身を案じてくれた親友の窮地を見過ごす事が出来るだろうか。ミシエルは無事である以上、その答えは簡単だ、そんなこと出来ない。

「ごめん、ミシエル。レーデが心配なんだ。カレーは後にして、後を追わせて欲しい」

「うん、わかった」

(それは良いのだが……後を、追えるのか?)

レーデとデュライが向かった方向には、もう彼らの姿を確認することは出来なくなっていた。すぐ角で曲がったとも、デュライが急かしたとも考えられる。いずれにしろ向かった先は、東ギルドより西……ほぼりザリア全域だ。心当たりでもなければ探しようが無い。「そうだ! ……ミシエル、デュライが金目の物を持ってるって、教えてくれた人が何処に居るか知ってる?」

「ん、知ってる!」

「ほんと! そこに案内できる?」

「うん!」

(では僕はしばらく消えるでしょう)

聞こえるや否や、ミシエルの右手の爪武器パンサークローは見えなくなる。ミシエルの右手の周辺を慎重に探るが、何かに触れることはなく、本当に消えてしまっていた。

パカパカに乗り、ミシエルにの先導で向かった先は、昨日立ち寄った診療所だった。

第四日 キイな仕事と解決 (約6000字)

街全体が赤く染まり、診療所もオレンジの炎で燃えているようだったけど、火事になっていたりはずせずに、ただ夕日色に染まっていた。

診療所の外から見分には、レーデやデュライの姿も無く物静かだった。日常の風景のようにしか見えなかったけど、ここで無為に過ごしていても仕方が無いので中へ入る。

「すみません、もう休診の時間なんですが……？」

昨日の医師兼受付の男性がそこにいた。何事も無いことはいい事なのだけど、何事も無さ過ぎて焦る。

「え、えっと。僕と同じギルド職員と、赤い髪の少年が来ませんでしたか？」

「さて？ 今日には特に来診が多かったが、昨日の君以来には見なかったと思うね」

「ミシエル……本当にここなのか？」

「うん、南の遺跡？ から出て来た人なら稼ぎになる物持ってるって言ってた！」

「私が？ そんな事言ったかな。……まあ儀式跡地からは、確かに強力な麻酔薬や、興奮剤が作れる素材が手に入るから、医者なら重宝するかもね」

確か、ミシエルはデュライがお金になる物を持ってると教えられたんだっけ。ミシエルがデュライのクエストアイテムを狙っていたのは、ここでそういう話を聞いた事による行動だった。だとすると、レーデと謎の人物、謎の人物とミシエルという繋がりが消えてしまう。

「ところで、湿布が入用だったかな？ 今は急いでいるので診察は困るのだが……」

「あ、いえ。すみません。勘違いだったみたいです」

言って、そそくさと退散する。

（先程の話だが、何処かでその様な話を耳にしたので、薬剤の素材が高額で売れるやもと、儂がミシエルに進言したかと存じる）

パンサークローが姿を見せて、そう言う。

待てよ、つまりこれってもしかして、完全に見当違いだったんじゃないか？

レーデは一体何処に向かったんだろう？ とりあえず、レーデとデュライの事を整理してみよう。

とはいっても、レーデがそんな不正をしていたなんて全く知らなかったし。レーデとはよく一緒に飲んだり、互いの家で遊んだりしてるけど、それ以外でしかも偶発的に知り合ったという相手に辿り着くなんて、はつきり言って不可能だ。

じゃあ、デュライの視点から考えてみよう。

まず、デュライが自分の情報を流してる人間がギルド職員だと至った理由は簡単だ。それ以外に無いから。じゃあ、僕とレーデがあの場に居合わせたのに、僕ではなくレーデだと確信した理由はなんだろう？

レーデとデュライの間に、接点があったかどうかは僕には分からない。逆に、僕とデュライはキューブ修理の開始の日に一緒に行動したという接点がある。その時、ミシエルに質問したのは僕だったし、デュライに対して協力的だったから、僕を選択肢から除外したと考えるのが自然だろうか。

そういえば、ミシエルへの質問でデュライを狙っていたという回答を得た事で、デュライがその事に探りを入れた結果。レーデが連れて行かれ危険に遭っているのだとしたら、完全に僕のせいじゃないか？

さっきの事で、ミシエルがデュライを狙っていた理由がほとんど偶然と判明した以上。レーデはミシエルの件では関与していないのだから。今レーデとデュライが向かってる先の相手は、デュライと

は関係が無いかもしれないけど、デュライに襲われるかも知れない。レーデもそれに巻き込まれるかも。何にせよ止めないと！……でも一体何処へ行けば？

結局、思考は同じ所へ辿り着く。

こうなったら、とにかく探し回るしかない。ヒントはレーデの言った奴は依頼人じゃないという言葉。逆を言えば依頼人以外の全員が容疑者。はつきり言って、果てしない作業になる事受けあいだ。もっとヒントを出してくれればと思う。でも、僕やミシエルが首を突っ込まないようにそうしたと取れなくも無い。歯痒さだけが残る。行き先を推測するのを止めて、物理的な考えで絞込む事にした。

あの時、角を曲がって見えなくなったという高い方の可能性に賭けて、リザリア東側の街をパカパカで己の字のように疾走する。何かがあれば人だけが出て来ると考えて、可能な限り広範囲を探索する。

僕の借り家前を通る道で、見覚えのある人物がちょうど家の前に佇んでいる様が見えた。近寄って行けば、次第にはつきりとそれが探している人物である事がわかった。

「レーデ！」

「……リキット。……ミシエルは？」

「パカパカを降りる。ミシエルはずっと馬首に纏わり付いている」

「うん、大丈夫みたい……レーデの方こそ」

「俺は大丈夫だ。ただ案内しただけだ」

「……その人は襲われなかったの？」

「ああ、彼の探していた人物ではなかったらしい」

「そっか、みんな無事で良かった」

「どこまで心配してるんだお前は。……巻き込んで、本当に悪かった」

「いいんだ。そんなことより、ミシエルがカレーを楽しみにしてるんだ。一緒に食べよう」

「……ああ、そうだな。ありがとう」

僕の笑顔はレーデに少しでも安心を与えられたらどうか。言葉は不安を取り除けたらどうか。わからない。

家灯りが道をぼうつと照らす中、ミシエルを呼べば、パカパカも彼女の後ろからついて来る。

お腹の空いた男2人であだこうだと、ミシエルにカレーの作り方を伝授する。具が僕とレーデの好みの違いで、ちぐはぐな大きさになったり、炒めるのか煮込むのかでミシエルを困惑させたり、カレー粉の量や隠し味なんかでも言い合った。けどそれが今日は特別楽しかった。

そうして出来上がったカレーは、間違いなく僕達の渾身の一品だったが、味見などしていなかった。だから、ミシエルがそれを口に運ぶ様を僕達は固唾を呑んで見守っていた。

「んー！ カレーうまい」

その言葉を聞いた僕達は、笑みを交わし、拳を突き合わせた。

レーデは特に何も言わなかったし、僕も何も聞かなかった。いつでも会えるのだから、落ち着いた時にでも事情を話してくればそれでいいと思った。ただ、一つだけ約束をして欲しくて切り出した。「レーデ、僕は頼り甲斐がないかもしれない。でも、頼ってきて欲しいんだ。……親友だと思ってるから」

「……ああ」

「一つ、一つだけ。……私欲のために誰かを貶めるような事はしないって、約束して欲しい」

「……わかった、約束する。……お前と、ミシエルに誓おう」

レーデは真っ直ぐに僕を見ていた。そして、今後ソルバーの情報を買ったりしないと、ここに誓いを立てた。

朝早い家の灯りがぼつりぼつり消え始めた頃、レーデは大きく手を振って帰っていった。最後に見せた笑顔が、大丈夫だと伝えてい

たのだと僕は思った。このまま眠ってもいいくらいには夜が更けていけど、頭の中がもやもやしている。パンサーの話が聴かない事は、納得がいかなかった。

レーデを見送ってそんな風に考えていたのは、扉を閉めようとするまでだった。家のドアを閉めようとしても、何かにぶつかって閉じ切らないのだ。

「よお？」

扉と玄関の間に足を挟んでいた人物が声を掛ける。

「……デュライ」

来た理由はおおよそ察していたが、このタイミングで現れるという事は、事前に僕の家を知っていたか、レーデが帰るのを待っていたかだ。事を荒立てるようなことをせずに、こうして底知れぬ恐怖を与えてくる。けれど、ミシエルとデュライを会わせたくない僕にとっては、ここで誤解を解いて終わらせられるのは好都合だった。

「来た理由はわかってる。ミシエルが言ってた、君を狙ったって話でしょう？」

「俺は締め上げてやっても構わんが……ガキから直接聞くのは無理そうなんだな」

上位のハンターというのはこういう人種ばかりなのだろうか。だとしたら好きになれそうに無い。考えてみれば厄介事の種はみなデュライだった。それでも、これで終わりだと思えば、我慢も出来るというもの。

「あれは誤解だよ。……薬の素材が高値で取引出来ると聞いたミシエル……カラスが、儀式場跡から出て来た君を、君の持ち物を狙っただけ。……彼女はもう、盗みはしないし」

「……そうか」

少し残念そうに答える。

「ところでお前、浮浪児を愛玩する趣味でもあるのか？」

僕はデュライを強く睨み付けるが、彼は臆する事無く続ける。

「浮浪児ってのは、成り行きや不幸でそうなってるんじゃない。……」

……なるべくしてなってるんだ。浮浪者には浮浪者たる理由があるんだよ。……愛着なんて寄せてると足元掬われるぞ？」

「デュライ！ それ以上の侮辱は許さないぞ！」

「純然たる事実ってヤツだ。……それに侮辱とは何だ。お前も浮浪児だったのか？ とてもそうは見えないが？」

そこへ異変に気付いたミシエルがやってくると、すぐにデュライを見つけて敵を見る目に変わり、右手にパンサークローが現れる。怒鳴ったのがまずかったか。

一方、デュライは玄関の外で壁を背にしたまま、ミシエルの様子を伺っているだけだった。

「よお、ガキ。また凝りずに負けてみるか？」

「何しに来た！」

「……言っておくが、お前の敗因は予測や戦術がどうのって事じゃない。もっと根本的な……力、速度、体格の差だ。……今のお前じや、俺の剣を防ぐことしか選択肢がない。……避ける事も、止めきる事も出来ない」

言って壁から距離を取る。剣を抜くのかと思いきやそのまま遠ざかっていくデュライ。

「せっかく面白い武器を持ってるんだ、余す事無く生かす事を考えるんだな……」

「どこへ行く！」

「……もう二度と会う事も無いだろ」

赤髪の少年は振り返ることも無くそう言った。僕たちは彼を見送るでなく、その姿が見えなくなるまで見ていた。彼の姿を照らしていた家の灯りが消えたのと、視界から彼の姿が消えたのは同じ瞬間だった。

(パンサークロー、話がある)

(宜しい)

(二人きりで話せない?)

（構わぬが、今日はミシエルの精神疲労も激しい。明日では叶わぬか？ お主が魔力を供給すると言うならば別であるが）

精霊に魔力を供給するというのは分かる。ミシエルの精神疲労が関係しているというのはどういふことだろうか。そもそも、二人きりで話そうと思っただけなので、ミシエルは関係ないと思っただけ。けど僕の考えと事情が違うのかもしれない。ともかく、話をしたかったので、魔力を供給すると承諾する。

しばらくするとミシエルがパンサークローを外して僕に渡してくれる。それを手にした途端、眩暈を覚え、吐き気を催す。余裕無くトイレへ駆け込む。

（なにこれ……気持ち悪い）

（儂に魔力を供給する事で、精神的な負荷が掛かっておる……魔力とは精神から捻出する物だ。魔力を供給する事は、即ち精神力を与えるも同じ）

（ミシエルはいつもこんな感じなの？）

（お主は精神力も薄弱であるが、他にも相性が悪いと存ずる。……

対話は出来ぬが儂の存在を消せば、精神力の消費を抑える事は可能）

（大丈夫、魔力ってマナの事ばかりだと思っただけ、実際には違うんだね）

（マナとは魔気の総称、魔力とは人間や精霊の精神を媒介とした純度の高い魔気の事である。従って間違いでは無い）

（この会話をミシエルが話を聞くことは？）

（そつだの、お主からの念であれば伝わる事はない。儂の方からの問い掛けであれば、儂の念次第で一方だけ或いは、両方と話すことが出来る。無論、一定距離内である必要はあるが……一時、慎もう）

（じゃあ、まず君の事を聞かせて欲しい）

（身の上は話せぬ、容赦願いたい。そつだの……）

身の上話以外、自分自身……パンサークローの特徴について話をしてくれた。仮名パンサークローは閻属性の精霊で、姿ではなく、存在の有無を切り替える事が出来るのだと言う。存在を消している

状態の方が安定でき魔力の供給をほとんど受けずに居られるらしいが、念話などのあらゆる行為が出来なくなるとの事。

(ありがとう。……じゃあ、ミシエルとデュライが戦った時の詳しい話だけ)

(先程も言ったが、僕は存在の有無を自在に操れる。契約主の周囲であれば、瞬時の移動も可能。ただそれはミシエルの魔力消費が激しい故、それ以上に危険な時以外には行わない)

つまり、ミシエルが壁にぶつかる前に、ふさふさの手袋部分をクツションにしたということだろうか。

(カラスと名付けたのは……?)

(僕の失敗である。ある時、まるでカラスの様だと申した。それ以後、カラスと名乗る様になってしまったのだ)

(じゃあ、パンサーもミシエルの本名は知らないってこと?)

(残念ながらその通りだ。従ってお主がミシエルという名を付けてくれた事には、非常に感謝しておる)

気持ち悪さが先立ってあまり聞けなかったけど、ミシエルの精神力が強くなってきた事によって、具現化して戦闘や長い会話を出来るようになったのが割と最近らしいという事で、それ以前はここぞという時くらいしか具現化していなかったという事を教えてくれた。つまり、ミシエルがコミュニケーションを取る姿勢が薄いのもおそらくその所為と考えられた。

(くっ……最後に、僕が君と通じたって事は仮契約をしたってとっていいのかな?)

(異なる。お主にも僕にも契約に至るほどの大した利点及び欠点は生まれぬ。ミシエルの事を通じてお主を信じ、会話を望んだという程度。通じたという言葉が合う。仮に、契約に至ったとして、お主は閻属性の精霊と相性が悪い故、僕は存分には使えぬよ)

(えっと、ミシエルの方が僕より子供なのにな? ……うつぷ)

(勘違いしないで貰いたい。心と精神力とは異なる。精神力は体力と似ておる、力の依存する部分が異なるが、心の持ち様で調子に差

があるという共通点がある。……力の枯渇が死に至るというのも共通点である。」

（ぐうっ……もう限界だ）

（では戻るとしよう、このような対話も偶には良いものだ）
手に持った爪型武器が消えていった。

それほど時間は経っていないはずなのに、僕は疲労困憊と違って差し支えないほど、疲れてしまった。魔力を供給する事がこんなに大変なこととは思わなかった。

トイレで用を一つ済ませ扉を開けると、そこにはミシエルがいた。

「大丈夫か、リキット？」

「ちよつと疲れちゃったけど、大丈夫だよ」

「ん」

「僕はもう休むよ。……ミシエル、一人で着替えて寝られるね？」

「おう！」

弱っているのを隠すよう意識して、自分の部屋へと力強く歩く。部屋に入ると足取りも覚束ず、そのままベッドに倒れこむ様に身を投げ出した。ベッドの柔らかい肌心地を感じ、意識が遠くなっていた。

第五日 紳士と淑女？（約7000字）

熱いものが胃を刺激している。まるで胃を自身が消化しようとしているように、息苦しい。たまに、ズキズキと頭痛がする。パンサーに魔力を供給した影響か、体調が良いとは言えない。けれど意識ははっきりしていて風邪のような病気とは違う。

眩しい太陽の光を見て目を細めた。僕を心配してくれたのだろう、隣で眠っているミシエルの頬を一撫でする。

「……ん」

「……おはよう、ミシエル」

「ん~~~~、おはよー」

すつくと立ち上がった、ベッドの上から飛び降りる。ミシエルは今日も元気だ。ミシエルに負けるもんかと、勢い良く立ち上がった僕の腰がコキコキと軽やかな音を奏でる。少し年老いた気分になる。あつという間に着替えて来たミシエルに催促される様に見られながら、僕も着替え始める。今日のミシエルの服装は、茶と黒のスマートなワンピースと、白い丈の短いパンツを穿いている。きつとミシエルにとってスカートというのが感覚的に無いのだろう。僕としてもスカートを無理に着させようとは思わない。

「よし、行くぞ」

「パーン！ パーン！」

嬉々として付いて来るミシエルを見ると、パンサークローの事を忘れてしまいそうだ。凶器に宿った精霊と契約している子供。ただそういう言い方をしてしまうと、関わり合いに成りたくない思いが先立ってしまうのではないだろうか。少なくとも、今後ろから追って来る子供は放って置けないと思わせる、か弱い少女にしか見えない。

「ミシエルちゃん、いらっしやい」

「パン、うま、美味しかった！……です！」

そう言う様に先に教えておいたのだけど、想像以上の無理があったようだ。

「そうかい、今日は何にしようか？ おばちゃん、サービスしちゃうよ」

「僕にはサービスしてくれないの？」

「そりゃ当たり前だろ？」

はははと笑い声が交じり合う。息をするほど焼き立てパンの香りが鼻をくすぐる。

「ミシエル、好きなもの四つ選んでいいぞ？」

「わかった！」

時間が掛かるかと思いきや直ぐに大きい物から順に四個選んだミシエルに、僕は一瞬言葉を失った。

「沢山食べたいのは分かるけど、今朝食べる分だけだよ？ ……」

「しだったら、今日は一つだけになっちゃうぞ？」

「んつと、選び直す」

一つでも朝食だけではとても食べ切れないパンを指差して諭してやれば、ミシエルは残念そうに答えて、陳列されたパンの一つ一つを見比べている。それほど大きくも無いパン屋の客は多く、オバサンは忙しそうに對話をしながらお客さんを捌いていく。僕は手持ち無沙汰にミシエルに付き添っていた。

結局、朝食のメニューはメープルデニッシュ、たまごパン、パイパイ、アップルパイの四つだ。昨日買ったアップルパイがあるのは、僕にとつてのクロワッサンの位置付けなのだろうか。僕はどうしてもクロワッサンともう一点という買い方をしてしまうのだ。

パンを買うと何処から持ってきたのか、店主が飴玉をいくつかミシエルに分け与えた。店内にはまだパン屋のお客さん達が小さな列を作っていたので、紙袋を受け取った僕はそそくさと喫茶店へ向かう。

喫茶店の店内は相も変わらず、蝋燭の火がゆらゆらと揺れていて、特別ゆっくり時が進んでいる気にさせる。

「いらつしゃい」

「薄めの紅茶とお勧めのジュースを」

一昨日前と同じやり取りも、何故だか誇らしく感じる。空いた席に座りながら、人も疎らな店内に、一際目に付く存在がある。

金色の鎧を申し訳程度に付けた、筋肉の塊の様にながしりした肉付きの大男。その対面に座る、白い軍服のような制服を着こなす、清潔で感じの良さそうな少年。風貌から冒険者の印象な二人組みを見つけた。

大男は短めの黒髪を後ろで縛って、こんがりと日に焼けた褐色の身体つきは筋骨隆々を体現している。顔は筋肉で固まっておらず柔らかい表情も出来そうだ。少年はさらさらと柔らかそうな巻き気味の短い金髪で、表情も柔らかい、筋肉の大男と一緒に居る為か華奢な体軀に見える。

間も無く、二人組みは席を立ち、店の出入口へ向かう途中、僕と視線が合うと大男が徐にこちらへ向き直り、真っ直ぐ僕を指して歩いてくる。

「よおアンタ、この街のギルドの人か？」

ギルドの制服を着ているから声を掛けてきたらしい。

「はい、リザリア東ギルド職員です」

「ちょうど良かったぜ。さっき近くのギルドに休業の張り紙がしてあったんで、どうしようかと思ってた所なんだ」

「すみません、キューブの故障で他のギルドに回って頂くしか……」

「それだ！ 他のギルドの場所を知らないんだが？」

「そうですね。……中央ギルドが近いんですが場所が複雑で、遠くなりますけど、大通り沿いにある西ギルドへ向かうのを勧めます」

「そうか、ありがとさん！」

明るく景気の良い野太い声で礼を言って出て行く大男。こちらに

ぺこりとお辞儀をして、付いて行く金髪の少年。

「いまの誰？」

珍しく尋ねてくるミシエル。

「さあ？初対面だったからね。格好からして、多分ハンターじゃないかな」

「ふーん……」

自分から聞いてきた割に興味無さそうに伝えて、紙袋を広げ飲み物の到着を今か今かと待ちかねている。そんなミシエルに、マスターが口を開くこと無く待望のそれを置いていく。今日のジュースは爽やかなオレンジの香るジュースだった。

「リキット、半分こして！」

パンを手で千切るもそうそう上手くはいかず、大小様々なパンの形態が出来上がる。大きい方をミシエルが更に千切って綺麗に半分にしよつとするが、当然包丁で切る様にはならない。形の残つてる方をミシエルに渡して、無残に散ったパンの欠片を頼張る。

「……いただきますは？」

少し尖った口調には、母親のようだった。

「はい、頂きます」

「いただきますーす」

ミシエルと過ごしているとハツとさせられる事が時々ある。しつかりしなくちゃと思う裏で、僕が親になったらこんな感じになるのだろうかと考えたりする。だとしたら、頼りない父親かな、なんてつて、一〇歳位しか変わらないのだから兄妹が正しいのだけだ。

たまごパンを口にすると玉子の香りが広がり、ふんわりした食感がたまらない。噛めば噛むほど、しつこくない甘さと、しつかりとした焼きたてパンの風味が口一杯に広がる。ミシエルが居なければ買わなかっただろうたまごパンに、クロワッサンに変わる趣向の新境地をみた。しかし、ミシエルの評価は次の通りだった。

第一位アップルパイ、第二位メープルデニッシュ、第三位パイナップル、第四位たまごパン、第五位オレンジジュース。つくづく味覚

は合いそうに無いけど、オレンジジュースより紅茶の方が良かったと言ってくれたのは嬉しかった。ただ、砂糖をもっと増やせば、負けると直感した事は内緒にしようと思う。

パカパカの背に乗って出勤するのもまだ二度目なのに、随分前からそうしている気になるのは、昨日長い間、騎乗していたせいだろう。手慣れた仕草でパカパカを厩舎に置いてギルドへ向かう。

西ギルドの中にはネストとマルガが二人組みの冒険者風の男達と話をしていた。つい先程喫茶店で会った大男と少年だった。

「おはようございます!」

「おはよー」

ギルド職員の二人はこちらを一瞥して話を続けていたが、大男だけはこちらを振り返ると大きな声を立てた。

「アンタはさっきの! 助かったぜ、兄ちゃん!」

「どうも」

一礼だけして奥のカウンターへと足を進めると、やはり目を輝かせてマルガが話の隙間を縫って話しかけてくる。

「お知り合いなんですか?」

「今朝、ギルドの場所を教えただけだよ」

「なんだ、詰まんないです」

そうだろうけど、ハッキリと口にするのはどうかと思うよ。

「それではこれで、ハンター登録は完了です。こちらがハンターライセンスです。使い方は先程言った通り。もし失くしてしまった場合、一〇〇オレンで再発行出来ますが、失くさない様に願います」

「はい、ありがとうございます」

ネストは金髪の少年にハンターライセンスを渡す。見比べて初めて分かることだけど、大男と同じ、大柄で肌の焼けた筋肉質なネストも、大男と比較すると小さく感じる。と言っても僕と比較すれば十分大きい。

ギルドのライセンスは拳大の横に太く赤いラインが入った銀製力

ードだ。系統毎に塗装されたラインの色が違い、ハンター系統のライセンスは赤色。銀製であるのは、流通している金属の中で一番マナを帯び易いのが銀だから。マナを帯びさせて置く理由は、当然キユーブに情報を読み込ませるため、もともと登録者の番号くらいしか情報として含ませて置けないわけだけど。

「んっじゃ、引き続きよろしく頼むぜ。……俺は野暮用の方を済ませてくらあ」

「はい、いつてらっしやい」

少年を残し大男は大量の筋肉に似合った大型のハルバートを担いで、その場を後にした。

「それでは、Cランクハンター認定試験ですけど。……まず筆記試験、キユーブによる面接を今日中に済ませ、その結果をもって推奨クラスモンスターの所へ明日以降に行く。って感じでいいですか？」

「ええ、はい。大丈夫です」

「ではでは、こちらへ。さくつと筆記終わらせちゃってください。マルガの対応は非常に気さくで、人によっては反感を買いそうだった。けれど少年は物腰が低く、笑顔で受け応えていたので対応については何も言わないことにした。それより、疑問に感じた事はそこではなくて。

「Cランクハンター試験って？」

「ああ、Bランクハンターの推薦があるから特別試験って事だな」
ネストさんに耳打ちをして尋ねる。

そう、Cランク以上のハンター試験は開催日時と場所が決まっている。本来それ以外で試験をする事が無い、Bランク以上のハンターの推薦無しには。恐らくさつき出て行った大男がネストさんの言う、推薦したBランクハンターなのだろう。あの筋肉量であれば納得がいく。

「そーなんですよお、なのでリキットさん。不束者ですが、よろしくお願いしますね！」

いつの間にか戻ってきたマルガの言葉は意味不明だった。

「はい？」

「あー、試験官なんだが……リキット、お前さんとマルガでやってもらう事にした。っていう意味だ」

頭痛に悩まされている様に片手を額に当てるネストさん。

「ええー！！ 僕、試験官なんてやったこと無いですよ！」

「誰でも最初はー、初・体・験なんですー」

もっともな事を厭らしく言う、口到人差し指を添えた、赤縁眼鏡のマルガ。この人と一緒というのが特に不安だ。

昨日はミシエルに付きっ切りで感じなかったけど、このマルガレットという妙齡の女性は、赤縁眼鏡とそばかすに隠れているが結構美人だ。ギルド制服のローブ越しには伝わり難いが、出ている所はしっかりと出ている、スタイルも良いと思う。髪を二つに分けて束ねているが、その水色の髪束は細く、彼女の感情の起伏で飛び跳ねそう。何よりその触覚の様に伸びた髪が踊る度、花の香りが鼻腔を擽るのだ。

「まあ、試験官は2人必要だ。転任してきたばかりのお前さんを一人残す事は出来んし。マルガはこう見えても、本場の試験官をしていた経験もある。……それに、俺とあの少年の名前が似てて面倒なんだよ」

「そうですねよお、だから二人手に手を取って、そのままゴールインなんです！」

完全にマルガに遊ばれているのは放って置く。資料を見れば確かにその名前の欄には、ネステイと書かれていた。似てるっていうか、気を配っていなければ、言い間違えと聞き間違えの多重事故しか起きない気がする。

「なるほど。……ところでマルガさんって試験官だったんですね？」

「です。……えっと、そうやって私の過去を調べ上げて、私の事を裸にしていくつもりなんですね……リキットさんのエッチ」

「違いますー！」

このくだりをどうして欲しいんだこの人は。僕では到底処理できない難件ですよ。ヘルプミー。困り果て周囲を見回すと、いつの間にか掃除を始めていたミシエルが視界に入る。淡々と掃除をこなすミシエルを見ていると自分も仕事をしなくちゃという気になる。

「よし！ やりましょう！」

「もうリキットさんったら大胆なんだから……」

両手を頬に当て照れるような仕草を見せるマルガ。ミシエルに気を取られていた間に、何かを言っていたようで、それを弁解するのにやたら時間を使うことになった。

「あ、あの。これでいいでしょうか？」

少年がおずおずと、埋め尽くされた解答用紙を持ってくる。

「あ、じゃあ次はこつちを解いてください。……これは僕が採点します！」

ハンター試験の筆記問題はあらゆる部門の問題が出題されている。各ギルド系統の中級問題は勿論、計算問題、モンスター知識問題、地理学、歴史、宗教……とにかくあらゆる種類の問題が出される。現実的には有り得ないが、それが仮に0点だったとしても、失格となるわけでない。この後に行われる面接の方が重要で、ちよつとした交渉術が問われる。そして筆記、面接、実績を考慮して、退治するモンスタークラスが決まり、その等級のモンスターを倒せば、晴れてCランクハンターになる。という訳で、人手が色々必要とされる上、実績の無いFランクからもCランクになれるというのもあって、志願者も多い事から恒例開催型の試験となっている。

昼食を交代して取る様にしていて、最後は僕とミシエルの番。外に出ても食べたい物がなくふらふらと街を歩く。

「そういえば精霊って何を食べるのかな？」

「パンサー？ ……ん、何も食べない」

「そっか、魔力って美味しいのかな？」

「わかんない」

右手を顔の前へ置き、目を瞑るミシエル。

「パンサーは出さなくっていいからね！」

「ん」

「ミシエルは……」

ミシエルは何を食べたいかと聞いたら、きつとパンと答えるだろうと思つて止めた。思えば、パン、肉野菜炒め、コンソメスープ、スパゲティ、カレーしか食べさせて無いんだよね。

「ミシエルが食べ物屋さん選んで。ただし、パン屋とカレー屋はダメ！」

「うん。……ん~~~~？」

雑貨店の中を必死に覗こうとするミシエル。飲食店の看板にはフォークやナイフ、スプーンの絵柄や造形があるとヒントを出すと、直ぐフォークとナイフの描かれた店を見つけ指差す。そこは肉屋に隣接したハンバーグ専門店だった。店内は子供連れの客が多く居たが、僕にもミシエルにも好評で値段も安く、いい店を見つけたと思わせるに十分だった。

ただ一つ、やたらぶらついた所為もあって、ギルドから大分離れた位置にあるという難点があった。

「まあ、リキットさん何やってたんですか？ 面接始まつちやいましてよ、早く採点手伝って下さい！」

マルガの非難を浴びながら、すぐごと採点を手伝う。

この短時間で膨大な出題範囲を誇るハンター試験の解答用紙を埋め尽くすというのは、点数はまだわからないが、かなりの博学の持ち主なのだろう。当の本人は今、魔法通信で面接官と話している。

一方、やる事の無くなったミシエルは、ネストさんに昼休憩中に買った絵本の読み聞かせをして貰っている。文字が読めなければ、何屋かも分からない様な店も少なくはない。今後、ハンターになつても文字が読めないとキューブの操作も危うい。文字の書きは出来なくとも、せめて読めるようになる必要があるのだ。

しばらくして、別室から出て来た少年は深い一礼とともに。

「面接終わりました。ありがとうございます」

「お疲れ様です！……筆記、面接、と実績。といっても、産まれ立てホカホカのハンターなんで無いんですけどお。が加味されて倒すべきモンスタークラスが決まりますのでえ……採点もまだ終わって無いので、また明日以降に来てくださいね」

「はい、ではまた明日お願いします」

礼儀正しくまた一礼するとゆっくりと出口に向かう。細身の剣を腰に置いて、以前に会った同い年位の赤髪の少年をふと思わせるが、彼と違い、既に僕の中での金髪の少年の位置付けは紳士になっていた。僕も席を立って一礼して見送る。

「リキットさんがそんなじゃ、これからの私達の夫婦生活が心配になっちゃいます」

仲裁してくれるネストさんや、一蹴するミシエルが絵本の読み聞かせに夢中になっている。今この場はマルガの独壇場と化すのであった。

「それにしても……凄い」

解答用紙を埋め尽くしていた時点で博学とは思ったけど。実際の正解数は六割に及び、正答と呼べないまでの回答にもある程度の考察が書かれていた。これがどれ程凄い事を正しく解説するには数時間掛かるのではない。けど全受験者の平均正解率が二割強、合格者の平均正解率が五割弱なのだ。

「ですねえ……」

「採点報告上げたら、一緒に飲みに行かないか？」

感嘆の声を上げる僕達に、ネストが空気のグラスに口を付け呑んで合図する。

「でも、ミシエルが……」

「ミシエルちゃんも満足な、美味しい料理のお店知ってます！」

マジです！　そう言う彼女の熱意と剣幕に押されて、行った店は本当に料理の美味しい酒場。ではなく、各種アルコール飲料が置かれた庶民的なレストランだった。

ネストさんは飲みに誘った張本人だったけど、それほど飲まず、食べてばかりいた。反面、顔も真っ赤にしながら声高らかに笑うマルガは、既にワインを二本空けていたが、止まる気配を一向に感じなかった。ミシエルはネストの横に座り、色んな種類の料理を分け与えられていた。僕はと言えば、完全にマルガの話し相手にさせられ、細々と飲み食いした。それでも数時間も長居すれば相当な量飲める訳で、特にマルガの酒豪ぶりには驚かせられた。

帰る頃には酔いも回っていて、パカパカの背から何度か落ちそうになった。ミシエルも眠そうにパカパカの首を抱き枕にしている様にしがみ付いていた。

酔って風呂に入っても良い事は何も無い。風呂に浸かりながら眠って、死にそうになったのを憶えている。そんな僕は、ミシエルを伴ってさっとシャワーを済ませ、着替えてベッドに潜り込んだ。今日はマルガに振り回されたような、そんな一日だったと振り返る間も無く、意識は地の底へ落ちていく。

第六日 夢見る者と職務怠慢？ (約7000字)

夢……寝て見る夢。

白い肌の女性に抱かれるレーデ、その女性は炎を纏い燃えている。焦げる様な匂いも、火の明かりも、帯びる熱気も感じない。ただ、白い肌の女性が炎に曝されてレーデを抱いている。そんな夢の一瞬、映像。

そして腹部を襲う強烈な打撃。声に成らない声で悲鳴を上げると、頭を浮かせてお腹を見る。子供の腕が弧を描くように腹部に掛かっている。その腕の持ち主は足の裏をこちらに向けてぐっすりと眠り込んでいる。どうやら、ミシエルの寝返りで肘打ちを貰った様だ。

昨日は……あれ、昨日の夜はどうしたんだっけ。ミシエルは自分の部屋で寝かせなかったか。全然憶えてない。変な夢も見てしまったし、打たれた腹部も痛む。腹癒せにミシエルを撥って起こせと悪魔の囁きが聞こえた気がした。僕は悦んで受け入れ、口元をにんまりと歪ませる。

「……やはあひやはういはは、あはやひはは！」

ミシエルは笑いながら、くねくねごろごろと転げ回る。しばらく撥り続けて、想像以上の威力を誇ったゴールドフィンガーに敬意を払って窓から射す陽光に向かって手を広げる。ナイス、僕の手。気分が一気に晴れていく。

「おっはよう！ ミシエル」

「ん〜！」

ミシエルは当然ご機嫌斜めである。口を膨らませ、非難の視線を僕に浴びせていたかと思えば、軽い体当たりと共に小さな手の平を僕の脇にぴたりと付ける。その後の僕の顛末はもう。情けなくて語りたくも無い。ただ、そんなやり取りが面白かったのは確かだった。

いつもの様に朝食も済ませ、ミシエルを連れて西ギルドへ到着す

る。ミシエルの服装は一昨日前と同じ、お気に入りのお白カッターシャツと黒のゴシックパンツだ。そんなに替えが何着もある訳じゃないからいいんだけどね。

扉を開いても、ドアベルに反応したのはネストさんだけだった。

マルガはと言えば、奥にあるテーブルに突っ伏していた。瞳はこちらを捉えてはいるがどこか虚ろで、片手を枕に、もう片手で頭を押さえ、時折り胃から何かを吐き出そうとしている。二日酔い……それも重症だ。

「あの、彼女お酒強いんじゃない？」

「それ程じゃないみたいだな。俺がからつきしダメなもんで、お前さんがいてつい酒が進んだんだろ。……あそこまで飲んだのは初めて見たし……な」

そう言っ二人でマルガの方を見やると、マルガが何かを喋っているようだった。近付いてようやく微かに聞こえる声。

「……トさん……ずっと……看病……下さいね」

これに口の動きと想像を合わせて考えると、リキットさん今日はずっと私の事を看病していて下さいね。となる。と言うか、どうしてこの状態で出勤して来たのだろうかこの人は……。考えても仕方ない、とりあえず、グラス一杯の水を汲んで来る。

「……飲ませて」

「マルガ、甘えるんじゃない。二日酔いは病気や怪我じゃないんだから、リキットも放って置け。それより、仕事だ。……よく分からんのだが、お前さんが配達をするようにって荷物を中央ギルドから預かってるんだが？」

掌に収まるほど小さな箱をカウンターの引き出しから取り出すネスト。マルガは覇気なくぶう垂れていた。

箱を開けると、鳩や鷺など様々な鳥の形を模した立体的な装飾の付いたクリップが、やんわりとした寝床で寛いでいた。それに覚えのあった僕はすぐに届け先を理解した。技巧士クラフトマンクエストをよく依頼する僕の遠い親戚の屋敷までの道程といつもの世間話の時間などを

考えると、どうしても昼を余裕で過ぎてしまう。

ミシエルを連れて行くには、少し不安がある。何より、まず何と紹介すれば良いか分からない。借りている貴方の家に泊めている素性不明の子供です、なんて言える訳が無い。かといって、マルガが倒れ伏して、ネスト一人で切り盛りしている状態のギルドにミシエルを残していくのも、気が引ける。二人でやって暇だ暇だと言えるけど、一人だと大変になる瞬間が稀にある。しかも、東ギルドが使えない所為で西ギルドへの出入りは単純に倍増していた。

マルガが働ければミシエルを置いて行けるのと思うが、彼女は足元も定まらずふらふらと奥の部屋へ入っていくではないか。どうやら限界を迎えたらしい。

元々、ミシエルを連れ回すには無理があつた。レーデも、マルガも、ネストさんも、みないいい人だったから、ミシエルを置いて来いなどは言われず、受け入れられただけなのだ。ならばいつその事これを良い機会だと考えて、ミシエルに家の事を任せるというのも有りだろう。掃除に関しては随分成長した事だし。暇つぶしの道具も幾つかあるので、何とかなると思う。勿論、付き添って文字や計算の勉強なんかをした方が今後の為になるのは分かり切っている事だけだ。

「それでは、いってきます」

「いってきます」

「いってらっしゃい。しつかり機嫌取ってこいよ」

箱を受け取り、クエスト品を配達する経緯とそれに時間が掛かる事だけ話して、ミシエルを連れて一先ず我が家を目指す。

戻る途中に買った、牛一枚肉にパン粉を付けて油で焼き上げたコトレッタとロールパンを昼食用にと食卓に置いて、家の掃除をする様に言った。ミシエルは好奇心と呼ぶ物には恵まれていない様に感じるけど。その分、落ち着いた行動を取る。今では出会った当初から持っていた不安感は小さくなっていた。

「じゃあ、行って来るね。……お留守番クエストよろしくね」

「……いつてらっしゃい」

浮かない顔をするミシエルに、ふわりと優しく、それでいてハツキリした意思を込めて、大丈夫すぐに戻ってくるから。と言葉を掛けた。

見えなくなるまで手を振ってくれているミシエルに、馬乗り後ろ向きになりつつ手を振り返すのだった。

時刻も昼を迎えようとしていた。例の依頼人が会食などを予定してるならば、クエスト品を渡してそれまで、という事もあつたらう。しかし、僕は座ってその御仁と食卓を囲んでいた。

食後、全ての皿を下げたグラスだけが立つ食卓。それまで談笑を絶やさなかった権柄を持つ依頼人は、少し間を置き、険しい顔をする。それはこの人物が血筋や口八丁だけで今いる階位に座しているのではないと思わせる威厳、凄味を感じさせた。

「……リキット君、最近ギルドで変わった事は無かったかね？」

「え、ええ……キューブが故障しましたけど」

「そうかね」

暫く品定めをする様な強い視線を受け、渋い顔のままの依頼人が再び口を開く。

「内々の話なのだが……近くリザリアにギルド直属の聴問委員が訪れるそうだ」

「あの……聴問委員会が一体何をしに？」

聴問委員会とは、ギルド発足当初にクエスト成否に係わる制度が出来る以前、その裁決を担っていた内部の外的部門で、その後、不正を取り締まる査問委員会との統合後も外的機関の役割を一手に担う組織の事だ。

「理由までは明かさず、義を通すためだけの知らせだった……君に話すか今の今まで迷っていたのだがね」

「何故、僕にこの話を？」

「……恩を売られたと、受け止めてくれたまえ。仮にこの話が何かの役に立ったのなら、リキット君が出世した時にでも何か返して貰おうと思ったのだよ。私は欲深いのでね」

一度目を閉じ開ければ、いつもの人の良い依頼人の笑顔が戻っていた。

「ところで、今回のこの鳥模型クリップなのだが……」

そうして、装飾細部に至るこだわりを聞かされる恒例の儀式が始まる。

リザリアの中心から北寄りに位置する邸宅地を後にした僕は、程近くにある中央ギルドに寄る事にした。聴聞委員の来訪がソルバー情報の漏洩によるものと見当をつけたからだ。

「東ギルドから転属のレーデ？ ……病気だとかでここには一度も来て無いな」

中央ギルド、過日見知った顔の職員の手で完全に面を食らい、その言葉の意味が理解の域に到達することを困難にしたようだ。驚きから困惑へ。理解に達すれば溢れ出る疑問と、実体験と話のそぐわない気持ち悪さが胸を押し潰し始める。

疑問符を多量に垂れ流し狼狽する僕を、首を傾げて覗き見る職員は更に続けた。

「とにかく、転属の前日だったかな。代理の男がそう伝えに来たきり、彼の事は何も知らないよ」

「……そうですか、ありがとうございます」

足が勝手に動き、向く先がレーデの家の方角を見据える。病気とこのは聞いていないし、異動の通達があった後日にもレーデには会っている。僕に対して仕事の話で隠し事しているのは明らかだった。それでも一昨日にそれを言う機会は有った筈と、怒りに近い苛立ちと行き場の無い不快感を胸にパカパカに跨る。

結局、レーデの住む家まで行って不在を確認しただけだった。近

隣住民の話から以前と同じように夜にしか戻らないという事で、我が家で一人留守番しているミシエルを拾う。擦り寄ってくるミシエルに頭を撫でてやる事位しか出来ず、西ギルドへと舞い戻ってきた。「何かあつたんですか？」

朝見たほど不調では無いが、本調子には程遠いだろうマルガが、僕の苛立ちを察してかそう尋ねてきた。確かに口を閉ざす事が多かったため、不機嫌だと伝わってしまったのかも知れない。

「うっん、何でも無いよ」

「……機嫌取りに失敗でもしたか？」

「そっちは大丈夫です」

我ながら淡白な返答だけど、今の僕にはそれが精一杯だったし、話して良い内容かも判断がつかなかった。

「そうか？ ……とここで、クラルク試験の事なんだが、また明日出直して貰う事になったからな。マルガが使い物にならなかった所為で」

「う……さつきから謝ってるじゃないですかあ！」

そして僕は取り立てて会話に参加せず、不快感を抱えたまま淡々と仕事をこなした。結果的にネステイ少年には悪い事をしてしまったかも知れない。けれどマルガがあの状態では試験どころではなかったし、僕一人だけでは役不足に違いなかっただろう。やむを得なかったと開き直れば、職務怠慢と罵倒されても仕方の無い話だ。

帰りの足を延ばし辿り着いた、レーデの部屋からは既に灯りが漏れていた。ミシエルとパカパカを表に残し、家屋へ入っていく。四戸ある部屋を外付きの廊下は、隣の家陰になって暗かった。ある一室の戸を叩く、出て来た人物は当然の事ながらレーデ本人だった。四年振りに再会した時と同じ様に、髪の色に違和感を感じた。再会した当初は、黒に近い強い青色だった髪が全て白に染まり上がっていた事に戸惑っていたものだ。当人はイメージチェンジだと笑って答えていたっけ。それが、室内からの逆光で昔の紺色の髪に戻った

かのように錯覚したのだ。

「よお、リキットどうした？」

金なら貸さないぞと、いつもの様に笑う親友がそこには居た。

「聞いたよ、中央ギルドに行つて無いんだって？」

玄関口で詰め寄る僕に、ややあつて神妙な面持ちでレーデは答える。

「そのことか。……実は、ギルドを辞めようと思つてるんだ」

「辞めるつて……まさか、この前の事で？」

「それもある。……それに、また旅をしようかと計画してる所だ」

「どうしてそんな大事な事を話してくれなかったのさ」

「すまない。話そうとは思っていたんだが、色々とタイミングが合わなかつてな……」

「……ギルドを辞めなくても済む様に」

手の平を突き出し、続く言葉を制するレーデ。

「気持ちは有り難いが、けじめだ。ギルドは辞める」

「でも」

「決めた事だ。……それに旅に出たら、どうしてもやり遂げたい事があつてな……」

どうしてか旅をするというレーデの答えは、気持ちが良かった。

きっと学徒として別れたその時の台詞と想い出がそうさせるのだろう。他の街、他の国の話を聞く度にどれ程レーデの事を連想したろう、僕の中では旅人レーデが自然な姿だった。

それに、したい事をすると言つ友を応援しないなんて友達じゃない。

「わかつたよ、もう言わない。旅に出るなら君の無事を祈る事にするよ」

「ああ、ありがとう」

「そうだ……聴聞委員がリザリアに来るらしいって」

「……俺の事だろうな」

「多分」

減俸や解雇に罰せられる事はあるだろうけど、自主的に辞職するのだから咎められる事は特に無いと思う。

すこし間を置いて、負の感情を吹き飛ばすように覇気のある声色が響く。

「……よし、明日にも発つとするかな！」

「明日とか、急過ぎるし！」

悪戯小僧のように歯を見せて笑顔になるレーデに釣られて僕も顔が綻ぶ。

少し話して、またミシエルとレーデと三人で夕食にしようと話を持ち掛ければ、快く承諾してくれて、僕の家へ行く事になった。

あつという間に辺りは暗くなりつつあつたけど、近所の魔光灯の部屋明かりが道を照らし出していた。

「お前の家こんなに綺麗だったっけ？」

部屋に入ったレーデの最初の台詞だ。綺麗にしている実感は無いけど、汚さず使う事を心掛けているのと、時々の掃除でなんとかやっていた筈だ。室内には埃の後も屑も残っておらず、家具も光っている様にすら見えた。それは間違い無くミシエルの功績で、西ギルドへ戻る時には気にもしていなかった事だった。

「ミシエル、ピッカピカじゃないか凄いぞ！」

「ん〜」

髪をくしゃくしゃにして撫で回す。ミシエルは口をへの字に曲げて、不平を唱えてるのか誇り顔か。どちらとも取れない変な顔をしているので、思わず笑ってしまう。

「お前はミシエルを侍女にするつもりなのか？」

「まさか！」

「チジヨ？」

違う！と男二人でハーモニーを奏でる。

「侍女っていうのは、身の回りの世話を仕事にする女性の事だよ」

「これだけ綺麗にしてくれたんだから、ミシエルに特別なご褒美を

上げないとな？」

「そうだね、ミシエル何か欲しい物無い？」

「カレー！」

僕とレーデの顔を見比べて答えるミシエルに、カレーを所望と聞いてどうしようか悩んでいたら。

「中央風カレーは旨いけどな。本場のカレーは辛いつていうより口の中が痛くなるんだぞ。知ってるか？ そんなカレーを今から作るか！」

痛いほど強い辛味を経験した事があるのだろうか、ミシエルは眉を顰めてカレー要求を取り下げる。

「ははははっ……リキットにアクセサリーでも買って貰うといい。

……な？」

「そうだね、装飾品の一つも持ってておかしく無いもんね」

ミシエルは首を傾げていた。

結局、野菜と茸たっぷりのリゾット、コーンスープ、ザワークラウトという酸味あるキャベツの漬物に乗せた、こんがり焼き目が付いた骨付きソーセージを三人でわいわい料理した。

楽しければ時間もあっという間に過ぎるもので、昔話に花を添え、ふとミシエルの武器。パンサークローの話になった。

「あの時の武器はどこから持って来たんだ？」

「ん〜、この辺？」

両手で前方の空間を何度も掴もうとして、ミシエルが何か搾っている様に見える。

「あれは精霊が宿った武器で……なんというか、出し入れが自由らしいんだ」

「精霊が宿ったって……そんな能力があるのか？」

「出すのにミシエルに凄く負担が掛かるみたい。だから、あんまり出さないで居てくれればと思ってるよ」

「そうだな。……そんな武器、悪用しようとする奴もいるかも知れ

ないし。見付からないに越した事は無いだろう」

「パンサー見える？」

唐突にミシエルがレーデに尋ねる。

「いや、武器にしないと見えないな……だから、他の人が居るところで無闇にパンサーを武器にしたら駄目だからな？」

極めて真面目な顔でレーデが答える。

「うん、わかった！」

今までデュライと対峙した三回しかパンサーを出してはいない筈なので、大丈夫だろうと思う。戦う必要が無ければ、パンサー側から話をしようとする場合以外には、パンサーを具現化させないんじゃないかな。

「リキット、お前がちゃんと見るんだぞ、わかってるのか？」

「わかってるよ」

「頼むぞ、本当に」

レーデも僕に負けなくらいの心配性なんじゃないかと時々思う。いや、僕が頼り無さそうだからかも知れないけど。

その後、酒も入って、話は西ギルドの仲間の事やCランク試験の事、まだ出発してもいない旅の話にまで及んだ。ミシエルはその間ずっと、レーデから貰ったスライド型のブロックパズルを難しい顔をしながらあちらへこちらへと動かし解いていた。

レーデが帰った後。ほろ酔い気分で風呂に浸かっていたら、ミシエルは一人で髪と身体をしっかりと洗っていた。あつと言つ間に自立してしまった気がして、嬉しくも寂しくもある複雑な気分になる。風呂上り、二人並んで腰に手を当て牛乳を飲む。何度か読んでいる絵本を寝るまで読み聞かせる。良い夢が見れますように。穏やかに、目蓋を閉じた。

第七日 合格と失格？（前編）（約6000字）

今朝はパンを買い込んで、ミシエルを家に置いてギルドへ向かった。ネステイのクラंकハンター認定試験の現地での戦闘試験に僕とマルガが付き添う事が決まっている。そのため、ネストさんが西ギルドを今日も一人で切り盛りするしかないと分かっていたからだ。ミシエルの学習能力が高いのか、僕がミシエルの事を見^み縊^びっていたのか、ミシエルはもう絵本もパズルの解き方も完全に憶えてしまっていて、暇つぶしの玩具としては使い物にならなくなっていた。なので、ミシエルには自分で考えて何でもしていいと言ってみた。勿論、火を使わない事を約束させてだ。心配もあるが、ミシエルが一体何をするのかちよつと興味がある。

ともかく今日は、パカパカに一人で跨る。新たな玩具の獲得と、レーデが勝手にしたアクセサリーをプレゼントするという約束を守るため、金庫から銀行券を持ち出して家を出た。

このリザリアでは街近くの河流から水を引いて、浄水した後各所に配水している。もちろん排水路も用意されている。その排水路には雨水や生活排水、清潔を保つために削ぎ落とした物が流れてくる所為で、悪い魔気が自然と集まりやすい。

地を通して自然な魔気に戻るのもあるが、そのまま溜まって魔物を呼び寄せたり、生み出す場合もある。リザリアではそうしたモンスターを倒すのは軍の仕事の一部だけど、今回は認定試験という事で特別に許可を貰って地下排水路に進入している。

ところで、悪い魔気が魔物を呼び寄せたり、生み出すと言っただけ。悪いマナの集まる所には、知らず知らずの内にモンスターが沸いている。その魔気が魔物を生み出すという説があるが、実際の所は定かではない。しかし、モンスターは魔気の強い所を棲家にする傾向が強いというのは確かなようだ。マナの薄い所や、聖なる魔気

とでも言うのだろうか、の強い場所ではモンスターは活動していないというのは、逆の意味で精霊にも当てはまる事らしい。

もつとも、見る事の出来ない精霊と、普通に見える魔物とを比較する事に意味なんて無いし、パンサーに聞いた方がよっぽど真実に近い話が聞けると思う。

とにかく、僕達はこの臭い地下水路を慎重に進んでいる。人工的に掘られた水路の片脇には、石積みの簡易な歩道が出来上がっている。これが水位の変化に対応できるよう、腰辺りまで高さのある段差が何段かあって、今は水位より上の三段が歩ける状態になっている。そんな歩道と水路があるため、洞内の空間はそれなりに広く歩きやすいけど、臭いはなかなか強烈だ。

先頭をネスティ少年が歩調に気を使いながら進む、僕とマルガがそれに続く。それぞれ魔光灯を持っているので、日の当たらない地下水路もくつきり見えるほど明るい。

「何も居ませんねえ〜」

「ここじゃなかったのかも知れません……」

駐在軍が魔物の処理をしているとはいえ、本当に何も居ない。討伐モンスターリストの中でリザリアから一番近いモンスターが棲家として居る筈の場所がここだ。と言っても、実務的にクエストを受ける要領でモンスターを選び、その場所を調べ、向かったネスティに、僕達は付き添っているだけ。一連の行動に何か問題が無い限り、出しゃばってまで注意や誘導は出来ない。今の所、ネスティの行動には何も問題は無く、対象のモンスターが見付からないという可能性が一番危惧している。

「モンスターが見付からない場合どうなるんでしょうか？」

ネスティの顔には心なしに焦りと汗が浮かんでいるようだった。「そうですねえ。推薦での試験ですと、規定ではもう一度モンスターの選択から出来ます。それも失敗すると、同一推薦人による特別試験は受けられなくなります」

赤縁の眼鏡の腹を押さえて答えるマルガ。

「そうですか。……頑張らないといけませんね」

探しているモンスターはレッドリザードという。人と同じ位長さがある爬虫類型の青い肌地に数多くの大きな赤い斑点が特徴的なモンスター。見た目の毒々しさの通り毒を持つが、毒性は低く局部の筋肉麻痺を引き起こす程度。わざと摂取しない限り、死に至る事はない。棲息場所は魔気の集まる水辺全域。毒攻撃への対処と躊躇無く攻撃出来る行動力さえあれば、倒す事ができる下級のモンスターだ。と言っても、もちろんキューブ情報の受け売り。僕はそんなものと関わり合いになつた事はないので、強弱の基準などはわからない。

「もしかすると、火唐草の所為かも知れないので……ネステイ君は先に進んで下さい。僕達は少し離れて付いて行きますね」

マルガに目配せをして止まると、大げさに軍人張りのピシッと決まつた敬礼を見せた。

火唐草というのは、年中赤い色をした巻き蔓の特徴的な草だ。水辺を好むモンスターが嫌う香り成分が出るらしく、モンスター除けとして重宝されている。その草を僕とマルガは持っている。

距離を置いて同行するも、目立つた変化が訪れない。レッドリザードだけならともかく、モンスターが全く見当たらない。何度目かのネズミが魔光灯の明りに晒されては逃げていく。

「……いました！」

待ちに待つたと言わんばかりのネステイからの報告だ。僕達は素早く、ある程度の距離を保つ所まで駆け寄つた。大型蜥蜴のように四足を地面にぴたりと付け、口先から尻尾まで大人一人が横たわつたほどの長さがあり、柄も毒々しい赤斑点をしているモンスターだった。

「間違いなくレッドリザードです！頑張ってください！」

いつの間にか審査用書類を取り出して、いつでも書き出せる態勢にいるマルガを流石だと思う。書類を戦闘中に書く必要性は全く無

いんだけど。

「倒せばネスティ君もランクハンターだから、頑張つて！」

「はい！ 行きます！」

細身の剣を正面に構えるネスティ、その姿はまるで剣の型稽古をしているようだった。一方、レッドリザードも一歩も動かない。毒々しい風貌と、目をぱちくりとさせているのを合わせて見るとかなり気色が悪い。

ゆっくりとネスティはレッドリザードに摺り足で近寄っていく。振るえば剣の切っ先が当たるかどうかの距離になると、先に動いたのはレッドリザードの方だった。レッドリザードは爬虫類と同じく、短足と思わせない素早さで、体で円を描く様に反転して駆け出す。ネスティは攻撃を警戒して一歩下がっていたが、それが致命的だった。遅れて振るった剣の跡には、レッドリザードの尻尾の先が僅かに転がっていた。

「っ！……追います！」

レッドリザードを先頭にして、離れた位置でネスティが少しづつ追い上げる。更に離れてマルガがレッドリザードとの距離を保ったままそれを追う。更にマルガに段々と引き離されつつ走る僕。マルガの走力に驚いている暇なんて無く、追いかけるだけで精一杯だ。

間も無く、息を切らせて片膝に手を置いて呼吸を整え始める。しながら皆が走って行った方を見る。水路の先は曲がっていて、姿が小さくなり壁に遮られ見えなくなる。

背筋を伸ばして歩き出そうとすると、頭がくらつとして足元が崩れたように前のめりに膝を突いてしまう。そのまま落ち着くまで呼吸を繰り返していると、目の端に青白っぽい何かを見つける。それに焦点を合わせても、僕には首を傾げるしか出来なかった。

視線の先には、僕の靴ほどの長さの小さな蛇がぴくぴくと細かく動いていた。よく見ると青白い蛇はちよろちよろと漏れ出す汚水に打たれているのではないか。蛇自体をあまり見た事は無いのだけど、

汚水とは言え、水に打たれて弱る蛇っていうのは有り得るのだろうか。小さく可愛らしい蛇の姿に思わず笑い出しそうになったけど、あまりに可哀想なのでその場から摘んで救い出す。

この大きさだと蛇でもまん丸の目が可愛いく感じる、大きいと不気味でしかないのに不思議だ。青白い蛇は礼のつもりか準備運動か自分の尾を追って何週か回った後スルスルとどこかへ消えていった。水路の先では魔光灯の明りがぼんやりと見えていた。どうやらそこで止まっている様だ。

僕が二人に追いついたら、ネスティはレッドリザードとその残骸の群れに囲まれていた。マルガは書類を完全に仕舞って応援と言うより観戦している状態だった。

「遅くなつたみたいだね？」

「もう合格確實ですよ」

動いているレッドリザードはあと三体。その内の一体の額に剣が突き刺さり下腹から伸びた切っ先が光る、剣が抜かれると程なく体重を支えた四本の腕があっさりと力を失う。

残った二体のレッドリザードが同時に飛び出す。一体はネスティに向かつて、もう一体は真っ直ぐ僕に向かつて長い身をくねらせ走る。

「え……？」

不意を突かれレッドリザードが目の前まで来ているのに、一步も動かずまた逃げ出そうとしているのかという考えが一瞬過ぎる。レッドリザードは既に狙いを定めて、口を開いて跳び掛かってくる。その裂け口に鈍く光る牙を見て初めて、襲われると理解するも、尻餅をつく様に地面に倒れるしか出来なかった。

レッドリザードの開かれた喉の奥から硬質な鋭い舌がグイッと飛び出す。食べられると思った。しかし、レッドリザードは舌を引っ込めて僕に覆いかぶさるように身を預けた後、ピクリとも動かなくなった。レッドリザードから視線を外すと、すぐ近くにはネスティ

が周囲を見渡しながらゆっくり近付いてきて、僕に手を差し伸べる。
「大丈夫ですか？」

「ネステイ君てば、ズバッ抜きながら剣をそのままシュパツと真つ二つにして、最後の一体にザザツて飛び掛ったんです！ 凄かったんですよ」

マルガの解説を受けると。つまり、僕がレッドリザードの舌だと思っただのは、ネステイの持つ細身の剣だったらしい。僕はネステイの手を借り立ち上がる。

「でも何でリキットさんが襲われたんでしょうか？」

「うん、火唐草は持っているはずだし……」

そう言いつつ、自分の身を、ポケットというポケットを漁る。しかし火唐草を入れていた場所はおろか、どこにもそれは無かった。

「ごめん……無くしたみたいだ」

「んゝもう、何やってるんですか」

マルガは口を窄めて、僕を咎めた。

「もう用は済みましたし、早く外へ出しましょう」

「ネステイ君は大人ねえ」

苦笑いを浮かべるネステイ。

「……すみません」

うな垂れる僕。

僕達は駐在軍の詰め所へ挨拶に寄っただけで、西ギルドへそのまま戻ってきた。僕のローブだけが一際、汚れによって目立っている。

「お帰り。……泥だらけじゃないか、どうしたんだリキット？」

「色々とありまして……」

「そうか、怪我が無ければいいが。……結果は上々の様だな」

「そうなんですよ、聞いてください。ネステイ君凄いですよ」。

あっちからくるレッドリザードをズバッバシュツと……」

身振り手振りを加えて、語りだすマルガ。そう簡単に止まりそうにない彼女はネストさんに任せて。

「じゃあ、ネスティ君こつちへ」

僕はネスティをカウンターの奥のテーブルへ座らせ、黄キューブで操作を始める。審査書に書き込まれた内容をそのまま入力する。と言っても今日の戦闘が優・良・可・不可の段階評価と備考くらいしか入力する所は残っていないので、あつと言う間に入力し終え、ネスティの対面に座る。

「本部での承認を受けCランクハンターに変わるまで、一日ほどかかります」

「ありがとうございます。………これでやっとCランク、デュライと同じ」

最後にぼそりと呟いた独り言に、予想だにしなかった名前が拳がった。

「もしかして、君と同じ年くらいで赤髪の、デュライと友達なのかい？」

「………友達かどうかで言うと、多分違います。リキットさんはデュライとはどういう？」

「どういう関係という物でもないけど、ネスティ君が来る四日前だったかな？ ……にギルドに来て、その後色々あつてね」

「本当ですか！」

どちらかと言えば嬉しさが先立っている驚きを見せるネスティ。

今にも立ち上がらんばかりだ。

「本当だよ、嘘を付く理由が無いもの」

「生きてたんだ、良かった」

安堵して目を閉じ、椅子の背凭れに沈む。すぐに跳ねる様に前へ重心が移動し、質問が繰り出される。

「デュライはこの街にいます？ どこへ行きました？ ……僕らの事何か言ってますでしたか？ ……もしかして何か伝言ないですか？ ……あつ、すみません」

まるで慌てふためいてるみたいなネスティ。

「ごめんね。行き先も知らないし、君達の事も伝言も何も聞いてな

いんだ。……ただ、この街にはもう居ないと思う」

「そう……ですか。……でも、生きてるのは確かなんですね？」

「足も有ったし、幽霊じゃないと思うよ」

「そうだ！ 怪我はしてなかったんでしょか？」

「怪我か……最初に来た時の服装は汚れていたけど、怪我をしている様子は無かったかな。……そのままランククエストに出て行っ
たし」

ネステイは良かったと相槌を打って、その後の言葉の方が気にな
ったのか、更に質問が飛んできた。

「そのランククエストというのは？」

ネステイに質問責めにされると流せず、正直に答えざるを得ない。
排水路では命までとは言わないでも、少なくとも怪我をせずに済ん
だのはこの少年のお陰である。

薬素材を収集するクエストで、今は魔窟と化した儀式跡地に行く
必要があると答えると、ネステイはそれを受けたいと言い出した。
紳士的な彼に珍しく、僕を困らせる。友達とは違うという言葉と、
その行動から察すると、デュライに対して一種のライバル心がある
のだろう。

デュライとクエストの話がしたいという事で食事に誘われた。の
で、ミシエルが待っているのが家でも良ければと言えば、それ
をあっさりと快諾される。彼にとってはデュライという存在は相当
に大きいのだろう。

仕事を終えるまで、まだ幾ばくかの時間が残されている。ネステ
イ少年は、旅に同行している先日の筋肉大男、マセルというらしい、
に諸々の事情を伝える為、一旦宿へ戻った。

今日の仕事を終えると、丁度いいタイミングでネステイが戻って
来た。ネストさんとマルガは先に帰っている。マルガだけはついて
来ようとしていたけど、話す内容的にもマルガが居ると面倒くさそ
うだったので、断固として拒否させてもらった。

「すみません、お待たせしました」

「ちょうど今終わった所だよ。……それより、渡しそびれていたんだけど、これ」

色彩鮮やかな、鳥が翼を広げた形をしたバッジを渡す。細かい装飾の他、この字が背景に見えるように彫りこまれている。

「ストレリチアという花を象ったCランクハンターに贈られる徽章だよ。試験合格おめでとう」

「ありがとうございます！……でもまだCランククエストを受けられないのでは？」

「そう、手続き上の理由でね。その間にソルバーは別の街へって事はよくある事だから、先に渡す事になってるんだよ」

「そうですか、でもデュライは付けてなかった様な……？」

「まあ、徽章は記念品だからね。付けていても、分かる人が見れば分かるって程度の物だからね。……彼の場合は、捨ててそうだけど」

ハンター系統の徽章は上位三ランクになった者に贈られるが、特別な価値もメリットもないので、記念品というのは確か。

なるほどと言って、白い制服の胸ポケットの上に徽章を付けるネステイ。

第七日 合格と失格？（後編）（約10000字）

ギルドの戸締りをしてパカパカを迎えに行き、大通りを西から東へ歩いて横断する。長く伸びた影も徐々に他の影に埋もれていく。大通りならではの魔光灯の明りで集客を狙う看板や文字。それらの明りで影が幾つも生み出されては消える。

ネスティの話はデュライとの出会いから始まったが、長い付き合いではないらしく、言えない部分もあったのか断片的な部分もあって、すぐに終わった。

話を要約すると、ある切っ掛けで出会って、ごたごたに巻き込まれつつマセルと知り合い、廃墟へ行きそこで離れ離れになったという事だった。本当に要約するとこれだけなのだから仕方が無い。もつとも、ネスティが一番多く語ったのは、デュライとマセルとの戦いや、デュライとモンスターとの戦いで一挙手一投足すら喋る勢いだったので、相槌で話を進ませるのに苦労した。マセルとモンスターの戦いにも触れたが、ハルバート一振りで豪快に叩き割るように倒したという説明だった。それは、ネスティ少年がデュライ少年に抱いている感情が、強さへのライバル心と身近な憧れの内在した物だという事を更に際立たせたただけだった。

僕とネスティはようやく噴水広場に差し掛かる。

東西に伸びる大通りは唯一、南北を縦断する大通りによって道が曲げられていた。両者の通りが交わる交差点には中央にとても大きな噴水があり、その人工池には神話を彫刻された石像が立ち並んでいた。その巨大な池があるために、どちらの道からも真っ直ぐに進む事ができない。代りに時計回りに回るよう矢印を刻んだ表示が街灯や石台についていて、その円形地帯を回らせる工夫をしていた。この成果によってかこの街では自然と、馬車などは道の左寄りを行っている事が多い。大通りより幅のとられたあまりにも大きい口

タリーの道は、露店スペースや馬の休憩処として主に利用されていて噴水もあり、広場という方が似つかわしかった。街を上空から見れば、十字を描く大通りにの中心地が円形に大きく開けていて、ど真ん中に石像が浮かび上がっている事だろう。

「お金を下ろしに銀行に寄るね」

そう断ってロータリーの南側にあるエクセリア王国銀行リザリア中央支店へ向かう。パカパカの手綱を引いているとは言え、道の端を歩いているので時計回りにぐるぐると回る必要も無い。

金銀銅貨であるが故に、大陸全土に流通する事ができた共通の貨幣価値としてのオレンだけだ。それを仕掛けたのがエクセリア王国銀行だという説もある。少なくとも、設立から数百年経った今でも銀行としての機能を維持している事からも信頼性は高い。

しかし、ギルドのキューブの利便性を知っている僕にとって、銀行は使い勝手が良いとまでは言えなかった。現にシステム上、銀行券なんて物を持って訪れ書類冊子で照会をされなくても、キューブのようにライセンスによる照会をした方が圧倒的に早く確実だと考えているからだ。もちろん、ギルドがキューブのシステムを提供するのも、それを銀行が導入するかも、それぞれの経営陣の判断だろう。そんな考え自体が夢幻なのかもしれない。ギルドが独占している技術を、他の事に置き換えて考えても仕方の無いのだけれど。

とにかく、お金を下ろす為に銀行の中へ入った。

銀行内は広く、高い天井からは魔光灯の光を反射して輝くシャンデリアが吊られている。見る限り敷地の半分ほど使った待ち合い側には、対向する窓口に合わせて、ソファの色で分けられていて黒と赤に二分されている。赤が硬貨の預金の預け入れと払い戻し、黒が融資や借入れなどの相談や両替といったその他の雑事に対応する様に、三人掛けのソファ五列が綺麗に並んでいた。

そんな訳で、当然赤いソファ側の番号札を取って、待ち合い席を見る。優に二百席を超えるだろう赤いソファ群には空きがあるもの

の、一脚に一人は座っていて三割ほど埋まっていた。その中に見覚えのある人物が居たので、そちらへ向かう。

「やあレーデ。昨日振り」

「おお、リキット。今日はやんちゃでもしたのか？」

僕の服装を見て最初にそう言う辺りが、レーデっぼさ、良い所とでも言うのだろうか。一方のレーデは私服で、茶のカッターシャツと黒のスーツで大人っぽく感じる。

「認定試験の時に泥が付いちゃっただけだよ」

「へえ、認定試験。……ちゃんと仕事してるんだな」

「してるよ！ 失敬な」

軽く笑いあつて、レーデが先に話題を変えた。

「ところで、そちらは？」

「その試験の受験者の、ネスティ君」

「ネスティと言います。よろしくお願いします」

「リキットの友達の、レーデだ。よろしく」

レーデが立つて握手を求め、ネスティがそれに応じる。

「ところで、レーデもお金を下ろしに？」

「ああ。昨日の冗談じゃないが、旅仲間も目的地も決まったし、明日は旅の準備をして……それで、発とうと思つてな」

「また急だね？」

本当に急な話だけど、それが怒りに変質する事は無く。今ならむしろ、頑張ってきて欲しいと素直に思う事ができる。

「思い立ったが吉日つてな。まあ、仲間を無為に待たせる訳にもいかないし、ここで使わない分は路銀も増える事だしな」

旅をして得たものがこうした判断の早さや、僕とは違う行動力にも影響しているのだろうと思うと、レーデが服装だけでなく内面も大人びて見える。

「旅と言うと、巡礼されているんですか？」

「いや、俺の場合ただの旅行趣味さ」

「素敵な趣味ですね。何処に行かれるんですか？」

ネステイの事を冒険者だと思っていて、旅人なんて珍しくないというか、彼自身もそうだろうと一瞬思ったけど、どうも違うようで興味津々に聞いている。

「南の方を目指すのさ」

「またサリツサへ行くの？」

レーデが学業を終えて、旅に出た時に聞いた目的地がサリツサだった。

「ん？ ……そうか、そうだった。 ……お前が顔を真っ赤にさせて食べた事も無い本場カレーの辛さを必死に説明する姿が滅茶苦茶おかしくて ……それで、最初の目的地をサリツサに決めたんだったけ」

「その理由、初耳なんですけど？」

僕はわざと不貞腐れた声色にかえる。

「ははは、今でこそ言える真実つてやつだ。気にするな。 ……おつと、俺の番みたいだ」

いつの間にか、レーデの番号が呼ばれていたみたいだ。番号札を持って窓口へ向かうレーデ。

銀行機関というのはエクセリア王国銀行以外にオルフィード大陸には無い。お金の貸し借りとしての商いならあるけれど。そのためレーデに限らず、旅人は路銀を持ち歩く必要性があるのだ。

いくら貨幣価値が同一でも国家間を跨いでの銀行経営なんて、一般人である僕からしても難しか存在しない事くらい分かる。そんな訳でエクセリアにしかない、唯一の銀行。その質なんてものは比べようが無い。けれど銀行は独特で堅牢な空気を持っていて、言い換えることが出来るなら金の牢獄という印象だ。待ち合い側と職場側の間にそびえる、窓口のついた格子の壁が理由だろう。その印象すらも信頼を勝ち得ている要因なのかも知れない。

しばらくして、レーデが戻ってくる。

「じゃあ、俺はこれで準備をしてくるぜ」

表情からも生き生きしているのが見て取れる。

「また会えると信じているから、さよならは言わないよ」

「次会う時までには、幹部職になってるよ？」

ギルドの幹部職というのは、平の職員、管理職の上にある等級職で、各部門毎に一名から二名しかいない様な実質経営陣の事。どれ程先の事は分からないけど、高いハードルである事は間違いない。僕からは、頑張るよとしか言えなかった。

番号札から待ち時間に余裕があるのは分かっていたので、銀行の外まで見送りに出る。

じゃあ、また。そう言っつて、互いに手を振って別れた。

「レーデ！ 君にワイトフラウの導きがあらん事を！」

神話の時代。神々の中に、ワイトフラウという女神がいて、迷いや旅人に道を示し救う女神として崇められていた。ワイトフラウの導きの道を進む者には成功や無事が約束されると言う逸話だ。旅人との別れの際にこう言っつて送る。

神話は宗教とは違って、生き方や救いを説くものでも無ければ、教えを別にする者に対しても平等。……というよりお伽話のような物だ。レーデは無宗教だと言っつてたと思うけど。

「おう！ お前こそ、アルプルドには気をつけろよ！」

同じく神話には、アルプルドという女神が出てくる。アルプルドは悪魔を誘惑したり、悪魔の居る地を荒らしたりする女神で、決して悪い存在ではない。しかしそれが転じて、悪い誘惑を断つ事や家内安全を願う時に、言う言葉が、アルプルドに気をつけて。となった。

どちらの女神も噴水に飾られた石像として彫刻されている。この別れを彩るように、噴射される水の勢いがいつもより強くなった気がした。

「買い物にまで付き合わせちゃっつてごめんね」

いつもの最後の目当て、装飾品を扱う店を残すのみだった。露店のアクセサリを幾つか見たけれど、これといった物が無かった

からだ。プレゼントするからには、単純な細工過ぎず豪華感の無い物がいい。その上で、思い出になるような印象的な物。ちよつと考えすぎだろつかと思うけど、ミシエルの頑張りに対するご褒美なので、僕が妥協するのはおかしいという考えの方が強い。選び出すとちよつと面白くなってきたというのが本音かも。

「僕は全然構いません。プレゼントはじっくり決めた方が良いと思います」

そう答えるネスティに買った食材の半分を持たせているのが、なんと気まずい。もちろん断ったのだけど、ご馳走になるし筋力も付くしと色々理由をつけて持った。彼は案外頑固なのかもしれないと思う。

最後に入った店の壁は白地に塗った壁に黒のラインで大きな菱形をいくつも描いていた。端に桃色の大きな花が青と白の花瓶に生けられていて飾り気の少ない印象を受ける。代りに、ガラスケースの被された陳列台の中には様々な彩りで輝く宝石や貴金属が存在を主張していた。

「いらつしゃあいませー！」

弾むような軽やかで澄んだ声が響く。腰の部分が引き締まった赤いデザインベストと黒のタイトスカートで、体のラインを強調した女性従業員がショーケースの奥に立っていた。以前に衣服店で見た顔だった。

「以前、衣料品店で働いてませんでしたっけ？」

「はい、働いてました。私に会いに来るなら、今度からこちらへ来て下さいね？」

スタイルも良く看板娘というのに申し分無いからこそ、そう言うのも有りなのかもしれない。歩合制で給料が良くなるなら、より一層だろう。

「どつしてこちらに？」

つい、聞いてしまう。

「こつちの方がお給金がいいからですともー！」

キツパリと答える。予想通りの回答がなぜか僕に安堵感を与える。さて、接客で付き添ってくれるのはありがたいのだけど、今回においてはどうしても自分で選んで決めたくて断った。

店内を一巡して気になった物が一つ、人差し指と親指で作った輪の大きさほどの銀のコイン型ペンダントだ。ペンダントの中には鳥が立体に彫られていて、足でハート型にカットされた赤い宝石を掴んでいた。中古らしく銀はひどく黒ずんでいて、見ようによってはカラスに見える。ただし、銀製品であるのと赤い宝石が鮮やかなルビーであるために、中古なのに異様に高額。銀行で下ろした額を足すとギリギリ足りるほど、明日が給料日でなかったら買えない。聞けば、つい先日値下げしたばかりだという。運命的な巡り合わせ。このペンダントもミシエルの下へ行きたいと言っているように感じた。

「ありがとうございますましたあ〜」

女性店員の好意で小さなハートリングを連続させたネックレスをおまけして貰った。

「ただいま！」

惨事になっている可能性を考え、ネスティを外に待たせている。

ミシエルはどうしていただろう。ぱつと見、今朝より綺麗になっているので掃除をしたようだけど。居間からミシエルが走ってくる。

「リキットおかえりー！ ……元気してるか？ リキットの娼婦するぞー！」

「……はい??？」

ミシエルの発想は僕の想像の遙か彼方を行っていた。しばらく唸って考える。

「もしかして、僕の居ない間に誰か来た？」

「うん。ゴザシヨウが来た！」

ゴザシヨウって誰。……ッ全くわかんない。誰かは来たのは確かだよっただけど。

「じゃあ、パンサーと何か話した？」

「うん。ゴザシヨウの言ってる事分かんなかったから。……パンサーに聞いたらダメ？」

悲しそうに顔を歪めるミシエル。

「そうじゃなくて、パンサーの事を見られなかったか心配なんだよ」

「ゴザシヨウ帰ってから出したよ！」

「偉かったね、ミシエル」

そう言っって頭を撫で回す。懸命な主張過ぎて僕が罪悪感を感じる。

「パンサーと話をさせてくれる？」

「うん！」

この間の失敗を繰り返すつもりはないから、パンサーを持つつもりは毛頭無い。ミシエルの話から考えれば、魔力が残っているはずだし。

何も無いミシエルの右手周辺が歪んで、ゆっくりとその形を成していく。

（パンサー、どういう事だい？）

パンサークローは具現化しなくてもミシエルの周囲で起こった事は周知しており、僕の言いたい事も分かっているはずだ。

（申し開きの余地も無い。お主を訪ねて来た不遜極まりない女が、ミシエルの事を性的奴隷と罵ったのだが……その意に程よい言葉を知らぬ故）

そんな都合のいい言葉、僕も知らない。

（誤魔化すとか、嘘を吐くとかあったでしょう？）

（僕の性質に合わぬ上、ミシエルに対して嘘は吐けぬ）

契約を結ぶと魔力の供給を受ける代わりに、精霊側にも制約があるわけだろうか。

（……というか何で娼婦？）

（立場が多少違えど、する事は同じであろう……娼婦の意には、男を慰めて元気にすると伝えた。お主の力で何とか誤魔化して貰えぬだろうか？）

(……そりやまあ、何とかするけどさ。………ところで、ゴザシヨウって何者なの?)

(ふむ。数度しか話さなかったが、語尾に、御座いましょう。と言
う不快な女だ)

御座いましょう……ゴザイマシヨウ……ゴザシヨウ……なるほど。

しかし、ミシエルに毒突いたのは、家主の僕を含めて侮辱したも
同然だ。許すまじ、ゴザシヨウ!

(ところで、外に妙な気配があるのだが?)

(ああ忘れてしまう所だった……ネステイと言って、クラクハン
ターになったばかりの少年で、とても良い子だよ)

(僕の感じるのとは異なると存ずるが……)

(他に何か居るって事?)

(敵意は感じぬ故、気に留める事も無かる)

気になるって……。というか、気配や敵意まで分かるっていうの
は、パンサークローは結構便利なんじゃないかと僕は思う。

とりあえず、ミシエルに娼婦と言わすのを止めさせたい。

「ミシエル、パンサーしまっいいいよ」

すーっとミシエルの右手から消えるパンサークロー。

「ミシエル、いいかい。娼婦って言うのは、お金を貰って身体を売
る人なんだ。……ミシエルは僕にお金を貰ってないし、身体を売っ
てはいないだろう?」

人差し指を立ててゆっくり力説する。

「ん〜、クエストしてる!」

「そう! ミシエルは僕のソルバーだ。……それに娼婦とかってい
う言葉は、人を悲しくさせるんだ。……例えば、僕はミシエルの事
なんて嫌いだ! ……ってい」

「リキット、嫌い……?」

ミシエルは目を潤ませて口をへの字に曲げた。今にも泣き出しそ
うだ。

「違う、違うよ。僕はミシエルの事好きだよ」

時すでに遅く、ミシエルの目から涙がこぼれ落ちる。

「んっ……うっ……ほん……と？」

「うん本当。ミシエルが大好きだよ」

膝について抱き寄せ、背を撫ぜながら。ミシエルが落ち着くまで、ずっど。

……しばらくして、ミシエルが泣き止む。ローブの肩口は涙と鼻水を吸ってぐっしょりだ。

プレゼント用に包装していない物をポケットから取り出して、ミシエルに見せる。

「これはミシエルの事を好きな証、僕からのプレゼント」

ペンダントには既にネックレスを通してある。

「……何これ？」

「ミシエルに似合うと思って、選んだんだ。……これをすればミシエルはきつともっと可愛くなるよ」

首に掛けてやると、ミシエルはそれを眺めたり、揉んだり、顔に当てたり、噛んだりした。

横道に逸れてしまったけど、ちゃんと納得してもらわないといけない事がある。

「……娼婦とかがって言葉はさっきみたいに人を悲しくさせるから、絶対に使っちゃダメだよ？」

「うん。わかった。……じゃあ、ゴザシヨウは嫌なヤツ？」

「そうだね、デュライよりも嫌な奴だね」

「お待たせ、さあ中へ入って」

「お邪魔します」

手持ち無沙汰になって、パカパカを撫でていたらしいネステイを招き入れる。僕のローブの異常に気が付いて怪訝な顔をするも、何も聞かない。

パンサーの言っていた気配というのが気になって見回ったけど、

何も居ない。仕方が無いので、玄関の戸を閉めようとすると、向かい隣の一軒家の端から水色の束ねられた髪がひらりと舞い踊る。慌てた手つきでそれを回収する手、その袖は僕と同じ物。……十中八九、マルガだ。

「マルガー！ もう仲間はずれにしないから出ておいでー！」

聞こえるように叫ぶと、少し躊躇した振りをしてマルガが出てくる。ミシエルの事もあって、マルガが着く前に、彼女を理由にしてネステイにデュライの話を禁止と伝える。お互いに元々それ程話す種も無かったため、デュライの件は一通り話し終えている。ネステイが不愉快になる様な点を除いて。

「えへへ、ばれちゃいました？ ……自信有ったんですけどお」
舌を出して笑うマルガ。

マルガは料理が不得手という事で、ネステイの話し相手になる。ミシエルは料理を手伝うのにこなれてきた感じがある。そんな訳で今日は本気で僕の腕を存分に振るって、我ながら素敵と思う料理の数々を作り上げた。

野菜や肉と溶いた米粉を混ぜ合わせた物を軽く薄焼きにして、その裏を焼く時に二枚重ねて間に卵を落として焼いた、お好み焼き。珍しく豚の小腸が手に入ったので、これを刻んでしつかり湯でて、彩り豊かな野菜類と一緒にピリ辛に炒め卵黄を乗せた、ピリ辛もつ野菜炒め。余った卵白と牛乳を合わせて蒸しあげて、その上にトマトとパセリをあしらった、白卵蒸し。自慢したくなるような見事な霜降り模様一枚肉を塩胡椒だけで焼き上げ、皿にワインを使った甘めのとろみのあるソースと、茹でたコーンにグロッコリーを添えた、ステーキ。余った野菜でサラダも作った。

品数多く振舞おうと思って買った食材たちも、一人増えれば適当な量になるものである。

辛口審査員のミシエルにも受けが良く、当然といえば当然の結果として、高評価を得た。これが僕の実力ですよ。料理の腕は、学生

時代に僕の料理をけちよんけちよんに言われて以来、その人物を見返したくて、ずっと磨き続けてきた。今では料理にはかなりの自信がある。

クエストの話題より、料理の話題の方が多かったのが非常に気持ち良かった。

マルガにアルコールをあまり飲ませない様に気を付けていたのだが、陽気に振舞っていた。もっとも、いつも陽気なのだが。

「私は決めましたあ。リキットさんを嫁に貰っちゃいます！」

「本日は話し相手どころかご馳走にまでなり、本当にありがとうございます御座いました。マルガさんの家と泊まってる宿は西側にあるんで、責任を持って送って行きますので。ではまた明日、お会いしましょう」
爽やかな笑顔で酔っ払いを引き連れていくネスティ。

「こちらこそ、楽しかったよ。また明日」

明日、例のクエストを受けにネスティがまたギルドを訪れる。どうも同行者の筋肉大男のマセルの用事がまだ掛かるらしく、短期的なクエストを受けて暇を潰すという事らしい。

別れを告げて、手を振ってそれぞれの帰路につく。

見えなくなったら、ミシエルに家に入ろうと促す。

（先程の気配がまだあるのだが）

そうパンサーの方から声を掛けてきたのには驚いた。ミシエルの右手には具現化したパンサークローが装着されていた。

（気配って、マルガじゃなくて？）

（人間ではない。魔物が精霊かそういった類のものだ……徐々に弱まっておる。このままでは消滅しかねない）

敵意は感じないらしいし、消滅っていうのは穏やかじゃない。仕方無く、パンサーに気配のする場所を教えてもらってそこを探す。ミシエルも一緒になって探してくれる。

（居ないじゃないか、パンサー）

（動いてはおらぬ、よく搜索せよ。……まさか僕がお主にこんな嘘

を吐いておるとでも？ それに何の利点があるのか)

確かに。でも、何もいない。

(……すまぬ、失念しておった。精霊であるならば、お主には見えなんだ)

思い出したように非を認めるパンサーだったが、虫を探すように態勢を落としていた僕は、それを見つけた。

それは排水路で見つけた小さな青白い蛇だったが、昼間とは打って変わってピクリとも動かず横たわっていた。

(動かないんですけど。もしかして死んでる?)

(それは無い。精霊のようだが……どこか部屋へ持って行ってはくれぬか?)

動かない蛇を拾って、庭から居間へ戻る。

テーブルの上に蛇を置くと、椅子に座ったミシエルがパンサークローを小蛇に触れさせる。どれくらいそうしていただろうか。軽く片付けておいた食器や調理器具を全部洗い終わってしまった。僕も座ってそれを見ていると、小蛇がピクリと動き、何事も無かったように身を起こした。

(何をしたの?)

(同じ精霊同士、見殺しにするのは目覚めが悪い故、魔力を分け与えたまでの事。しかし根本的な解決にはならぬ……リキット、お主はこの精霊と契約するか否かを決めねばならん)

パンサーの言うには、小蛇精霊はその小さな姿に相応する脆弱さながら、僕に助けられた恩義だけで中央広場からずっと追って来てマナの枯渇によって瀕死になったらしい。それも、僕と契約したがっているという事だ。

(契約については、僕は全然構わないんだけど。色々分からない事だらけで聞きたい事だらけだ。先にそつちを聞きたいんだけど?)

(良からう。儂に答えられる事なら何でも聞くがよい)

僕が気になったこととその回答を整理する。

第一に僕が小蛇精霊を見れる事については、正確には分からないという。推測なら相性がとても良いとか、何か因果関係があるとか、分からない以上考えるだけ無駄だそうだ。

第二に契約といのは、精霊に生存できる以上の魔力を与える代わりに使役できるという、ミシエルとパンサーの関係で分かっていた事と同じような回答で肩透かしを食らった。新たに分かった事といえば、使役と言っても強制的なものではなく共生関係の様なもので、契約はどちらからでも解除できるという事。精霊の成長によっては、必要な魔力も増減するという事。

第三に小蛇精霊とは、パンサーと僕の様に通じていない訳ではなく、小蛇精霊が言葉を覚えていないだけという事らしい。契約が成立すれば、互いに伝えたい事が分かるという。

重複した質問を何度かしたけど、まとめるとこんな感じだろう。

他にパンサーが補足的に説明してくれた事も少しある。例えば、前に僕の持つ魔力は少ないと言っていたけど、小蛇精霊の必要とする魔力は今の僕でも十分補えるという事。そして、魔力を与える生活を続ければ自然と、僕の持つ魔力の量は基本的には増えるらしいという事。

話を経た僕の感想は、契約というのは一緒に暮らそう的な話だった事だ。そう考えると家族が増えるという感覚で、僕とミシエルとパンサーと小蛇の一家。……妙な取り合わせだけど、とても楽しそうだと思った。そんな訳で、契約に対して乗り気になる僕。

(それで、契約って具体的にどうすればいいの。武器に宿すの?)
(精霊としての性質が不明な以上、道具に宿すかは後で考えるべきだ。道具に宿すと難点が生じる……例えば、離れると魔力供給が出来なくなり、そのまま契約が解除される事もある)

迂闊に道具に宿して、どこかに忘れただけで終わっちゃうのは嫌だな。

(そやつには名が無い、まずは名を付ける事だ。次に、誓いを立て、お主の胸……心の臓に押し込むがよい)

名前……名前か。ミシエルの時といい、こう立て続けに名付け親になるとはね。改めて、名付けると言われても何も思い浮かばないものだ。ミシエルは恥ずかしながら、僕の初恋の人の名前だ。蛇の、しかも精霊の名前なんて何にすればいいか分かる訳無い。ここは縁起のいい名前を。

「よし、お前の名前は……ラッキーだ！」

青白い蛇は真つ赤な舌をチロチロと出す。続けて契約をしようと掬うように両手を出す。小蛇はそれから勢いよく逃げるのだった。

(その名は嫌だとの事、真剣に名を考えるべきだ)

「う……ごめんなさい」

確かに、今のは酷かった。反省。

(名が決まるまで、そやつを肌身離さず側に置く事だ。契約者として与えるよりは、消費する魔力は数倍は多かるうが、今のお主なら何とか成るう。……儂は戻る)

そう言い残して消えるパンサークロー。……ん、ちょっと待った。今変なこと言わなかったか。契約者はそれ以外の者より消費する魔力が数倍も多い。……逆を言えば、契約者じゃない方が魔力を使うって事だ。以前に味わったあの気持ち悪さも酷い疲労も、それが原因なんじゃないのか。仕方が無かったとは言え、何とか背筋にひたすら寒気を感じる。

その後も小蛇精霊の名前を色々考えては言ってみたが、逃げられるばかりで合格点を得ることが出来なかった。

ラッキー、ハッピー、ナイス、グッデイ、ソフトブルー、スネー君。……精霊の感覚なんて分からないけど、これで良い筈もないよね。

今日はミシエルがやたらと引つ付いてきたので、それ以上考えることは出来なかった。風呂も一緒に入ったし、何処に行くにも付いて来た。当然そのまま一緒にベッドで寝る事になった。

第八日 給料日の真実（先）（約4000字）

いつものようにパンを買いに出ようとしたら、玄関扉の隙間に手紙が差し込んであった。

封のされたその手紙にはこうあった。

『我が友リキット・インデルミッツへ

聴聞委員の連中がすぐそこまで来ている。

俺は今後お前の身に起こるだろう事を分かった上でリザリアを発つ。

これは俺の我侭だ。許して欲しいとは言わない――生俺を恨んでくれて構わない。

最後にお前という男を見込んで頼みがある。ミシエルとあの子の精霊を守って欲しい。

レーデ・ファジア』

相変わらずミシエルの事を心配してくれている。何度も念を押さねなくてもミシエルの事はちゃんとみているつもりだ。あとは尋問を受けるといふ意味であつたとしても、大袈裟な書き方だと思つ程度だつた。仮に、占いとかで僕の身に何かが起こると予言されても、言い知れない不安感しか得るものは無い訳だし。ともかく、手紙の内容からレーデがこの街にはもう居ないという事だけを知る。軽くではあつたけど別れは既に告げてあつたからこそ、その手紙は酷く後味が悪いものとなつた。だからと言つて今からどうすることも出来ないのです、仕方なくその手紙をローブの中にしまつ。

「今日も仲良しさんだねえ？」

ミシエルの手を引いて、パン屋につくなりオバサンに言われる。

「うん。リキットはミシエルのこと大好き！」

そう言つただけ。昨日の今日と言つこともあつて、気恥ずかしい。

まあ、ミシエルが嬉しそうにしているだけで十分だ。

今日もまたミシエルに選ばせると、僕に何が食べたいかと聞いてくるのだ。僕がミシエルに聞くのを真似ているだけとも取れる。けど僕に気を使ってくれていると考えると、何だか心にじーんとくるものがある。勿論、僕の食べたいのはクロワッサンだけだね。

一日振りにミシエルを連れて西ギルドにやってきた。頭の上には青白い小さな蛇の精霊を乗せている。勿論それを不振がって凝視する人も、振り返る人も居ない。精霊は普通には見えない存在だからだ。当然ネストさんもマルガも全く見えていない様子。

挨拶を交わすと昨夜のマルガの奇行を責め立てる。ネストさんはやれやれと首を振って、仕方が無いと言い切ってしまう。マルガも昨日と同じように悪びれる事も無く、お喋りを始める。まだ知り合ってた日は浅いけど、いつも通りと思えるだけの居心地の良さがそこにはあった。

「みんな、今日は給料日だ。……マルガ、リキット。中をちゃんと確認してサインしろよ?」

そう言うネストさんに、蠟で封のされた封筒を渡される。

「ありがとうございます!」

「ありがとうございます!実は懐がすーすーしてた所だったんです。事実だ。昼までに貰えなかったら昼ご飯抜きになつていた所だった。中には小さな金貨が二枚と受取確認書という書き出し書類が入っていて、早速サインして書類をネストさんに渡す。ネストさんに雇われている訳ではないけど、西ギルドの責任者はネストさんなのでそういう形になる。」

「リキットさんて、貯蓄してないんですか?」

「してたけど、色々入用だったからね。……マルガは貯蓄してるの?」

「してて欲しいですか?」

人差し指を口に付けて答えるマルガ。

「意外とちゃっかりしてそうだから、してるかと思っただけど…」

…」

「今は色々調べたり、後学のために本をいっぱい買ってるので、リキットさんと同じお財布空っぽですよ。私達、気が合いますね!」
貯蓄の有り無しは、別に気が合うとかではないと思う。

「ネストさんは豪快に使ってそう……」

「俺は貯金がどれくらいあるか知らんよ。……そういうのは全部嫁に任せてあるから」

「え。ネストさん結婚してるんですか!」

「言ってなかったっけ?」

「初耳ですよ」

「ふっふっふ、こう見えてネストさんの奥さん……」

「おい、マルガ!」

なんて他愛ない話をしていると、あつと言う間に昼時になるのだった。ミシエルに何が食べたいかと聞けば、美味しいものと答えたので、今日は自分へのご褒美のつもりで昼食を取る事に決めた。

程よくお腹も空いて、何を食べようかと考えながら、給料も貰ったことで上機嫌に銀行へ向かう。金貨を持ち歩くのはばつが悪い事になると思うので、両替と預金をしに行くところだ。

しばらく歩くと、高級食材である魚のマークを掲げた店看板を見つける。そういえば、リザリアに来て以来、魚料理を食べていなかったなんて事を思い出したりして、今日は豪華に魚を食べることにした。

銀行で用事を済ませて舞い戻ってきた魚料理専門店は、高級食材を扱うに相応しく全個室だった。室内は明るく綺麗で調度品や絵画が飾られていて、落ち着いた色彩を使ったゆったりと長居できる空間を演出していた。まるで、高級宿泊施設の一室をそのまま運んで来たみたいだ。

メニューを開けば、魚貝類や甲殻類の名前を織り込んだ料理名がずらりと並んでいた。しかし、値段は書かれていない。魚料理は基

本的に時価でしか売られない。それもこれも海に生息する魔甲烏賊の所為だ。

遙か昔、神話が生まれた時代からずっとオルフィード大陸を囲む海には、魔甲烏賊という魔物が大量に生息している。魔甲烏賊は海へ出る船や人を襲い食べる習性があつて、海へ出ることを許さない。海外には、他の大陸や島があるなどと記された古典などは、もはや伝説だ。そんな魔甲烏賊も何故か湖川には姿を現さない。その巨体の所為か、水質が合わないのかは定かではないが。そのお陰で川魚や海際で釣れる魚を食べることが出来る。とはいえ、その漁獲量たるや家畜の生産量に比べれば、雀の涙なのだ。

僕は川海老の団子揚げ、赤鯛の炙り焼き、貝とキノコのホワイトソースパスタを注文する。

「コチヨコチヨ〜！」

手を叩いてミシエルは僕の頭にいる蛇の精霊を呼ぶ。パンサーと契約しているからかミシエルには蛇の精霊が見える。舌をペロペロと出す行動を見て、こちょこちょしているみたいという事で付けたらしい。ただ、小蛇はその名前も気に入ってないらしく、基本的に呼ばれても無視する。

そういえば、今日はこれと言って何かをした訳でもないのに、すでに疲労感があつた。これも精霊に魔力を供給している影響だろうか。そろそろ真剣に名前を考えた方がいいかもしれない。

呼ばれても無視するものの、ミシエルと遊ぶのは楽しいらしく、結局料理が運ばれてくるまでじゃれ合っている。青白くちっちゃい体に真ん丸の目が印象的な蛇。こいつには何だか可愛らしい名前が言いたいと思っている。

「チツコメ……じゃ、名前じゃないし」

と言うと、不思議と小蛇精霊がこちらに寄ってくる。どうやら良い所を突いているようだ。

「チコメコ……チコメコはどうだ？」

分かんないだろうけど、コチヨコチヨの感じを少し被せてみた。

すると、足も無いのにぴよんぴよんと跳ね上がり嬉しそうにその場でくるくると回りだす。

「よしチコモコで決まりだ」

チコモコの頭を人差し指で撫でると、その指を伝ってスルスルと頭の上に戻ってくる。

「ん〜、契約はまた後でね？」

正直言つて、契約には躊躇いが生まれていた。魔力の供給にもパンサーの時ほど苦痛を感じないし。パンサーとの話で僕にもチコモコにも利点があるのは分かったけど、本当にそこまでする必要があるのかと思ってしまう。どうしても踏み切れない。いや、契約をすることで得られる力……チコモコの力をどうしていいのかわからないというのと、それで力を得た僕が変わってしまうのが怖いというのが本心かもしれない。

誰かに習ったつけ。力と言うものはちゃんとした覚悟を持って受け入れなければならぬと。父さん、いや、兄さんだったかな。だけど本当に今の僕にその覚悟が出来るのかと言ったら疑問だ。メリットだけを追い求めたら何か大切な物を失ってしまうかもしれないし。ともかく今はもう少し様子を見て、自分自身の気持ちをしつかりと確かめた方がいいと思う。

薄い青と茶のエプロンドレスを着た女性が料理を運んできた。

ほどよく揚げられた団子は、赤と緑と白の三色が透けて見える。

口に含めばぷりぷりと海老の身が踊りだし、加え色に応じて辛味、野菜の甘み、ふっくら感を味わえる川海老の団子揚げ。

網の焼き目のついた赤鯛の炙り焼きは、塩だけの味付けでじつくりと魚本来の味を堪能できる。淡白な味わいだけど、塩味で鯛の脂……旨みが口いっぱい広がる。食欲をそそる、赤というのがまた艶やかだ。

貝とキノコのホワイトソースパスタは本当に旨い。貝からでた出汁が全体に広がり、ホワイトソースがそれを包み込む優しい味だ。

無駄な飾り気や味の無い、洗練し調和されたシンプルであるが故の深みを感じる。

ミシエルも今までに無いほど、目をキラッキラさせて頬張っていた。僕の選択は大正解だったようだ。ただ一つを除いて。

「ええ！ 四九〇オレン！」

はつきり言おう。お金足りない。

以前、食べた時は確か四人でこれくらいの値段じゃなかったか。

ここ一年でまた価格が倍増している。漁獲制限や水辺のモンスターが無くなったりでもしたら、あつと言う間に幻の食材になるんじゃないだろうか。

「すみません。銀行でお金下ろしてくるのでちょっと待っててください」

そう店員に言い四〇〇オレンしか手持ちの無かった僕は、ミシエルと手持ちのお金を残して、また銀行に向かうのだった。こういう時、ギルド職員のローブを着ていると信用されやすいので便利だ。もちろん、こんなこと初めてだけど。むしろ、ミシエルを説得する方が骨が折れた。

箱型の中が見えない車両を牽引する馬車がゆっくりとこちらに近付いて来る。すれ違うことが出来る程には距離があり、馬車も歩くほどこしか速度を出していないので、さほど気にせず進む。馬車は僕の目前まで来ると静に停車する。

不審に思うが銀行へ急いでいる僕は、真横を通り過ぎようとする。と、勢いよく扉が開く。出てきたのは体躯のしっかりした男で、止まった馬車に乱暴に引っ張られ、押し入れられる。そのまま滑る様に馬車の床に転がって、引っ張った男に馬乗りにされ、目隠しをされた。状況を理解する暇も無く、太い布のような物を口にきつく巻かれる。

「んー！ んー！！！」

叫ぼうとしても声が出ない。体を羽交い絞めにされたまま、どう

しよつもない不安と恐怖で心臓の鼓動が早まり、呼吸がうまく出来ず息が苦しい。馬車が走る音と外の喧騒だけが通り過ぎていくのが聞こえるだけで、男は一言も喋らなかつた。誘拐されるのか、これから殺されてしまうのか、最悪な状況に陥つた事だけは確かだつた。

第八日 給料日の真実（中）（約5000字）

「んー」

きつく太い布を噛まされているため、声が消されてしまう。こうなつた理由を知りたい。

手足すら縛られ、もはや身動き一つするのも困難になつた。その代わり、男の羽交い絞めから開放され、馬車の座席に座らされている。男は相変わらず一言も発することは無かつたが、喧騒から離れ静かになっていく。しばらくすると、馬車がゆっくりと止まるのがわかつた。くの字に曲がつて男に担がれる。

足音が徐々に乾いた音に変わり、はつきりとした響きから狭まつた空間を感じる。どうやら屋内へ連れて行かれていているらしい。

馬車の座席の時と同じように座らされると、口に噛まされた布と目隠しを外される。

暗い室内には何も飾り気が無く、無造作に床に置かれたカンテラの火だけが室内を照らしていた。僕をさらつた男が近くに、唯一ある扉の近くにもう一人居る。近くの男は黒と灰の横縞模様のシャツと、灰色のズボンを履いているが、一番特徴的なのは頭だ。髪の毛が一本も無く、前頭部がぼこりと大きく腫れ上がっている。

「何の、御用ですか？」

精一杯の強がりで発した一言だ。心臓は既に荒れ狂っている。

扉の近くにいる人影がこちらに近付いてくる。カンテラの火が映し出す人物は、僕と同じギルドの制服であるローブを纏っていたが、ラインの色や装飾が違っていた。ローブの上から腰にベルトを巻いており、胸と尻の膨らみが強調されている。妙齢と言つには憚れるけど、年増というには肢体に帯びる弾力感に遮られる。成熟した女性というのがしっくりとくる。伸ばせば長そうな薄い紫の髪を、頂点後ろでぐるりと巻いている。巻かれた髪の膨らみに、高級感のあ

る髪留めと髪装飾を挿している。側頭部からも伸びる薄い紫の髪は波打っていた。

「あら、てつきりご存知かと思っていましたけれど。……リザリア東ギルドのリキットさん、で御座いますしょう?」

明らかに僕の事を知っている。きっとこの人がミシエルの言っていたゴザシヨウだろう。

「申し遅れました。私はギルド聴聞委員のエクシス。これは、私の雑用奴隷のケツペンですわ」

奴隷と言いついてしまう辺りが、僕に確証を与える。

奴隷制度は、百年以上も前の荒れていた時代にあつたものだ。奴隷制度が原因で有史以来の最大の戦争が起こつたのは、今ではただの歴史でしかない。従って、実質はどうか知らないけど、奴隷は存在しないと云うのが世の理だ。

「貴方が昨日、僕の家に来た人か?」

「ええ、色々と聞きたい事が御座います」

その答えを聞けば、僕はエクシスを睨み付けてしまう。もちろん、ミシエルを侮辱した事への怒りからだ。

「……ご自分の立場と云うものを理解して頂けてないのですね?」

……ケツペン!」

いつの間にか視界から消えていたケツペンが、エクシスに黒く長い棒を持つてくる。エクシスがそれを空で軽く振ると、振るった力の分棒の先端までがしなって湾曲を繰り返す。乗馬鞭に近いと思えば、自分が何をされるか連想できてしまう。

「痛い目に遭いたく御座いませんでしょう? ……東ギルドで何を調べていたか。話したくなりましたかしら?」

「……何の事ですか」

ピシッ!

エクシスが棒で床をはたくと、軽快に破裂したような音が室内に響く。

「では、レーデという男を何処に隠したのか……正直に話しては頂

けません？」

「わかりました、正直に言います。……一体何の事を言っているのか、さっぱりわかりません」

ヒュンツ！

エクシスの振るったしなった棒の先端が、僕の縛られ前に出した腕を掠める。掠っただけのため音こそ出なかった。一瞬痺れた様に感じた後、ひりひりと痛みが僕を襲う。はっきり言って痛いけど、痛みには負けたくは無かった。

ピシッ！

返す棒が僕の右肩を強く撫せて行く。当たった時の痛みと、少し経って現れるじわじわとした痛み。歯を食いしほるのに躊躇う必要があるだろうか。それでも僕は睨む目をやめない、むしろ、歯を食いしほるほど睨むのが強くなっていくようだ。

「恍けるのは、貴方のためにならない。それで御座いましょう？

……ケツペン、四つん這いに」

後ろに回ったケツペンに椅子を持ち上げられ、前へ倒れこむ。床と顔面直撃を避けるため、縛られた腕で庇う。その体勢からケツペンに腰を持ち上げられれば、肘を着いた四つん這いになる。

ケツペンに探らせて出てきたレーデの手紙を読んで、僕とレーデが親密な間柄だと確信したエクシスは執拗に棒を振るい続けた。

背を、尻を、横腹を何度も何度も何度も往復する、しなる事を忘れない棒の発する鈍い打ち音。どれほどの痛みにも耐えたのだから、どれだけの時間が経ったのだろう。僕の呻き声よりも、エクシスの息遣いの方が大きくなっていった。

エクシスが問い掛けた言葉は、ソルバーの情報漏洩に対する詰問などではなかった。キューブで何を調べていたのか、相棒のレーデはどこかというものだった。レーデはキューブで何かを調べていた。それで、僕にも聴聞委員が接触してくるのを分かっていたという事だ。レーデが何をしていたか、何をしようとしているのか知りたい

というのは、僕も同じだ。だけど、聴聞委員には協力する気にはなれない。僕を巻き込むと分かった上で、レーデが事情を話さなかったのには必ず理由があるはずだ。何より、打たれ叩かれようが、友達を売るような事は出来ない。とにかく、ここをなんとかやり過ごして、僕も独自に調べたい。

凶暴にのたまう棒が体中を焼く。じりじりと焼かれるように痛む。いい加減、腕が痺れてきた。手首が縛られているため手を広げてもなかなか踏ん張りが利かない。それでも姿勢を崩さなかったのは、知らなかったという理由で僕だけが逃げたくなかった。勿論、そうする事に意味なんて無いだろう。ただの意地だ。ここで倒れ伏したら僕だけが仲間外れに、関われなくなってしまおうと思ったからだ。

一際、力強い大きな軌道を描いて、しなった棒が背中を打ち抜けていく。乾いた音が響く。

「おいエクシス、調査員が目を覚ましたぞ」

そこにはエクシスと同じ聴聞委員のローブを着た中年の男が扉を開いていた。

「……あら、何か分かりました？ ハイブマン」

息遣いを整えて振り返るエクシス。

「厄介な事になったかも知れん」

ハイブマンと呼ばれた男は、腰ベルトから短剣と思われる剣差しを下げていた。濃い茶の髪は短くさっぱりとした印象を与えるが、右目の下から頬にかけて切り傷があり、まるで軍人が転向してきたようだ。

ハイブマンがエクシスを部屋の外へ誘導して、部屋には僕とケツペンだけが残る。僕の後ろ側に控えるケツペンは僕の視界に入らない。

途端に、我先にと押し出る背の痛み、手の痺れ。芯に残るしなった棒の感触と、鈍く響いた肉打つ音、その余韻が噴出す様に体と心を駆け巡る。痛い。堪らず、手を伸ばし顔を地面につける。

それでも、まだ終わっていない。少しでも回復を図るため、呼吸を整える。縛られた手を伸ばし、耳を地に着けるのが一番楽な姿勢でそれが出来た。

ふと、自分の耳に室外へ出て行った二人の声が聞こえてきた。床に耳をつけているにしては、いやにはつきりと聞き取れる。本来、耳に届くはずの無い声だ。鼓膜でも破れたかと心配になるけど、今はそんな事はどうでもいい。僕もレーデの事を知りたい、情報が欲しい。

「どうやら薬を含まされていたらしい。命に別状は無いから、恐らく時間稼ぎだろう」

「それで厄介事とは何ですか？」

「奴らが調べていたのは……魔動力炉だ」

「まさか。……ギルドのシステムを魔動力炉から絶とうって言うんですの？」

「そこまでは分らん。……ただ、そうなったら依頼人やソルバーは言うに及ばず、大陸全土で混乱が起きるのは必至。至る所で不測の事態が現れる」

「ソルバーは貧困、罪人は実質野放しになる、悪循環。与える経済へのダメージも計り知れないですわね。混沌とした時代に逆戻り、という事で御座いましょう？ ……けれど、魔力抽出所の警備は万全なはずですよ」

「それがそうとも言いきれん。……この街の近くに強力な麻酔の材料になる植物が生息する魔窟がある。そいつは焚くだけで十分な効果を発揮する。奴ら結構な量を揃えていたらしい。つまり、侵入自体は容易」

「通信で知らせれば良いだけでは御座いませんか？」

「もうやったさ。魔力抽出所だけ通信が途絶している。応援も頼んだが、間に合うかどうか。……エクシス、お前の方は何か分かったか？」

「何も知らなさそうという事が……わかりましたわ」

「おい、インデルミッツだと……ったく、こんな時に……」

「お知り合いですの？」

「多分な。弟がギルドに入ったと聞いたことがある。……お前はマセル」ルイラフに知らせて準備を済まさせておけ」

会話を聞いていたから、部屋に戻ってくるタイミングが分かった。姿勢を元に戻す。

エクシスがケツペンを呼んですぐに出て行く。ハイブマンがこちらへ近付いてくる。扉が閉まる寸前、小さな青白い蛇がスルスルと入ってくる、チコモコだ。

ずっと一緒に居たはずのチコモコが、いつの間にか僕から離れていたらしい。驚きが先に立ったんだけど、僕が彼らの会話を聞くことが出来たのが精霊チコモコの力だとしたら、僕はチコモコに感謝する。

「申し訳ない。どうやら君は今回の事には関係が無かったらしい。

……我々も切羽詰っているのだよ。許してくれ」

手足の縄を短剣で丁寧に切りながらハイブマンが謝る。

「リキット」インデルミッツ君だね？ 私は聴聞委員のハイブマン

「ロスコーという。君の兄上にはいつも世話になっているよ」

ハイブマンが手を差し伸べる。

いつもこの手だ。僕じゃなく、インデルミッツの名に差し出される手。この手を出す人の家名を見る瞳には、僕がどれほどこの手に瞳に苦しめられたか、孤独に陥れられたかが全く映らないだろう。見えるのは、利権や家督への繋がり、体裁だけだ。

インデルミッツ家は代々エクセリア王国の王族への教鞭を取っている。教育事業の分野においても絶大な権威がある。王家に直接繋がるその影響力故に、一家の落ちこぼれである僕にでさえ、色んな人物が近付いて来る。

いつからそうと気付いただろうか、忘れてしまうほど昔から、僕

の周りには友達と自信を持って呼べる友達が居なかった。僕の周囲に人が絶えることはなかったが、一人ぼっちだった。真に心を許せる人が居なかった。母さんは物心がつく前に亡くなった。父さんは僕と積極的に関わろうとはしなかったし、僕もいつも厳しい顔をしている父さんが怖くて近寄らなかつた。唯一、兄さんだけが僕の味方でいてくれたけど、兄さんが過保護だというのは僕にも理解できた。それでも兄さんに甘えて、誰も信じられない様な生き方をしていたのは事実だったんだ。それをレーデが変えてくれた。レーデがそれとは別の生き方を教えてくれたじゃないか。あれから六年、信じられる友も、嫌な奴だつて増えた。だけどそれは、僕をリキットとして見てくれるから。僕がそう変わったからじゃないのか。

レーデが何をしようとしているのかはわからない。それでも僕に出来ることがあるはず、レーデを助ける事が何かあるはず。決意を胸に僕はハイブマンの手を借りて立つ。そしてレーデの手紙を受け取る。

「レーデが何をしたんですか？」

「何をしたというより、これからするというのが正しいかな。……ともかく、病院に送ろう」

当然の事だけど、僕にわざわざ事情を話す気は無さそうだ。だけど、チコメコのお陰でそれを知れた。

動く痛い、服がすれるだけでひりひりするけど、

「大丈夫。僕は一人で大丈夫です。西ギルドへ戻ります」

正確には、ミシエルの待つてる魚料理専門店へだ。

「そうか。では今は急いでいるので、また後日お詫びに伺うと約束しよう」

僕の傷が浅いと勘違いしたか、手間を取られないと考えたか。あくまで僕に気を使っているように装っているけど、内心嬉々としているのが見え透いている。でも僕にとっても好都合、一刻も早く魔力抽出所に急ぎたい。

ハイブマンは本当に急いで行ってしまった。功労者のチコメコを

頭に乗せて、結果的に置き去りにしてしまったミシエルの下へと、
痛みを堪えて走るのだった。

第八日 給料日の真実（後）（約4000字）

まず大通りを目指すと、南北の通りに出た。噴水広場が近くに見えるほど、中心部に居たらしい。

ミシエルを迎えにいくのに財布が空では何の為に待たせているのか分からない。都合よく銀行は近く、待ち時間も少なく引き出すことが出来た。痛みが走る所為で、座ることが出来なかったけど。

魚料理専門店の店員に返されたのは、西ギルドにミシエルを届け、そこで残りの代金を受け取った、という事だった。

物凄く迷惑を掛けているのは分かったけど、全身を揺さぶらない様に歩く。足が思うように進まないのは、痛みだけじゃなかった。呼吸は乱れ目が回り、神経を蝕むこの感じは一度経験している。パンスーに魔力を供給した時と同じだったけど、あの時ほど苦しくは無かった。ただ一直線に伸びる西ギルドまで道程が果てしなく遠く感じた。

曇り空に夕の太陽が彩りを加えて、紅と黒、紫に見える雲もある。夕闇が迫っていた。

西ギルドの前まで何とか辿り着くと、ネスティが出て来た。ネスティはこちらに気付いて話しかけてくる。

「リキットさん、すみません。急用が出来たので、クエストはまた今度お願いしようと思って、キャンセルしに着ました」

ネスティはまだクエストを受けては居ないのでキャンセルというのは不自然だったけど、彼の礼儀と考えれば納得がいった。

ネスティが組んでいるマセルという人物と急用。僕の勘が外れたとしても万が一だ。

「これから魔力抽出所へ？」

「すみません、何処へ行くかは知らないんです」

「もしも、魔力抽出所へ行くのなら……レーデを、僕の親友を助け

て欲しい！」

完全に甘えている。赤の他人、それも自分より若い少年に。行く場所も知らないネスティにしてみれば荒唐無稽な相談だ。

レーデが何故そこに居るのか、あらゆる事に穴の開いた願いだ。それでも懇願した。

「もしレーデさんに会えたなら、助けられるよう努力しますとも」

ネスティはそう笑顔で答えるのだった。

「ネスティ準備はいいか？」

マセルが背の低く足の太い馬を二頭引いてやってくる。

「はい。もう大丈夫です」

「よし！ ここから南西へ三日、目指すは魔力抽出所だ！」

大声を出すマセルの言葉でも、内実を知らない者には印象にすら残らないだろう。反対に驚いてこちらを見るネスティに対して、僕は腰を折り深く頭を下げた。

「急げ時間が無い！」

二人は馬に跨りその場を去った。

一日早くリザリアを発ったレーデがどれ程の速度で進んでいるかはわからないけど、睡眠時間も惜しめば、追いつけるかもしれない。それは今の僕にとっても同じ事が言えた。

力の抜けた体の重みだけで、西ギルドの扉を開ける。

「リキットさん！ 心配してたんですよ！ 何があっただんですか？

大丈夫ですか？！」

視界に僕の姿を確認したマルガが矢継ぎ早に口を開く。

「ミシエル、置いてけぼりにしちゃってごめん！」

「ん〜！」

謝罪する僕に対して、ミシエルはローブの裾を引っ張って、どこかへ連れて行くこうとしているみたいだ。それにちょっと待ってと答えてマルガとネストの方へ向き直る。

マルガ達に何処から何処まで話していいのやら、全く見当が付か

ない。信じて貰えなくていいと割り切って順序立てて話す事にした。でなければ、ミシエルを一週間以上も預かって貰う事など出来るはずも無いからだ。

結局のところ、昼の出来事を語ることになった。勿論、精霊の話抜きにしてだ。

「という訳で、僕に何ができるか分からないけど、レーデを追いたいんです。……その間、ミシエルを預かって欲しくて、お願いします！」

「もうフラフラじゃないか。追うにしても、今は休んだ方がいい」
ネストさんの言う事は客観的に正しいのだろう。それでも僕にとっては、休んでいる暇なんて無い。一刻も早く出発しなければ。全てが終わった後に到着したらと考えてしまふ。

「馬上で休めますから。……もしもレーデに何かあつたら、僕は自分が許せなくなる！ 後で何でもします、お願いです！」

「……あ、あのお。私でよければミシエルちゃん預かりますよ」
おずおずと進み出て応えてくれるマルガ。

「全く……わかったよ。俺だって協力しないって訳じゃないさ。ただそんな身体で街外れへ行くななんて自殺行為だつて言いたかつただけだ」

ため息を一つ吐いて、ネストが応えた。

ネストの言うことには一理ある。主要な街道を通らないというのは、誰にも遭遇しないか、身包み一切を奪われるかだ。命の危険もあるし、賊が怖く無いと言えは嘘になる。とはいえ、今から護衛を雇うには時間が掛かりすぎる。レーデに追いつく為には、襲われないう事を祈って一か八かで行くしか選択肢が残されていない。

「大丈夫です。考えがありますから」

考えなんて無い。この場をやり過ごすための方便だ。

僕は意を含んだ言い回しで煙に巻こうとする。笑顔を添え、人差し指を口の前に立てれば効果絶大のはず。

(リキット、お主に話がある)

パンサーの念話が脳に響く。ミシエルが僕のローブ裾を引きながら、ネストとマルガから見えない様にパンサークローを具現させていた。

(もうちよつと待って)

(先程から十分待っており。お主、チコモコを死なせるつもりか?)
唐突にそんな事を言われるものだから、疲労した脳は更に呆然となってしまう。

気がすつと抜けたのを見計らって、ミシエルが僕を奥の部屋へと引っぱり誘導する。錠を掛け、パンサークローを装着したまま、椅子に飛び乗るように座るミシエル。対面が入り口から近い椅子という事から、僕に座るよう暗示しているのだろう。

僕が座ると、ミシエルがパンサーと右手を机の上に置くのは同時だった。

(どういう事?)

パンサーの言葉を待つ。

(……お主、チコモコの力を使ったであろう? お主の魔力が著しく弱まっている)

使ったつもりは全く無いけど、チコモコが僕に力を貸してくれたのだと思っている。

(チコモコが生存する為の魔力を、今のお主は欠いておる。……このまま中途半端な状態を続けるのは、お互いのためにならん。一刻も早く契約をするか、離別すべきだ)

パンサーは僕の魔力の減退を感じ取って、チコモコに供給するべき魔力に足らないと判断したのだろう。昼間に感じた疲労感、今自分に襲い掛かってくる圧倒的な虚脱感、分かりきっていた事だ。考えないようにはしていた。これからの人生を一変するだろう、決定的な選択から逃げていただけかも知れない。今、決めるしかない。そうしなければチコモコは僕を諦めるか、消滅する。

僕の自分勝手な思いだけなら決まっていた。それをチコモコに強

要する度胸が無かっただけ。僕がレーデを助けるのに力を貸せと。その手にした力で僕は僕の友達を助けると。そう考えると僕の独善さが滑稽で、あまりに腹立たしい。それでも、契約することを選ぶ（……契約するよ。どうすればいい？）

（以前言った通り。名を呼び誓いを立て、胸に押し込むのだ）
頭の上で舌をペロペロだしてじっとしているチコモコを掌に乗せる。ふと手が止まる。

誓い。一体何を誓えばいいのか。神様に捧げる誓いや祈りと違うのは分かる。

（誓いって、何を誓えばいいの？）

（お主がチコモコに対して何をするか。或いは、チコモコの力を用いてする事か。契約においては、深く考えた具体性よりも、チコモコが認めるお主の真摯さの方が重要であろう）

（……わかった）

「チコモコ、僕は僕の傲慢で君の力を手にするよ。僕はどうしても友達を助けたいんだ。この契約がチコモコにとって良い事だと思える様に努力するよ」

掌でチコモコが初めて会った時のようにクルクルと回った。

しばらくして、チコモコが寝そべる様に倒れる。そのままチコモコを胸に押し込んだ。

そして僕の意識は途切れた。

夢の中。果たしてそうなのだろうか。現実味を感じないまどろみの中、虚実曖昧で歪んでいるのか整っているのか分からない空間。

そこで僕はチコモコという精霊の存在をはっきりと把握する。契約というものの本当の意味を理解した。僕の決断はチコモコの命を弄ぶ様なものと、僕は考えていたけれど、少し違った。

チコモコは水属性の精霊で、吹き上げる水と活気で脈動する魔気を背景に生まれた。リザリアの象徴的な精霊と知る。楽しそうに行

き交う行商人や馬車、噴水の傍らに憩う人々を見るのが好きだった。水の流れに身を任せ辿り着いた地下の下水路で、自分の存在が虚ろになっていくのを感じていた。魔物に追われ、悪い魔気に身を削りながら、やっとの思いで噴水と水質と同じ気配の排水路を見つける。けれど近くから急に流れ出した汚水に小さな身体が飲み込まれてしまふ。とつくに意識が薄くなり、消えると思ったその瞬間だった。そこにリキットが来て、助けてくれた。

喜び勇んで噴水に戻ったものの、いつもの風景がどこか寂しく儂く感じる。命の危険とは裏腹に、そこには僕の期待した冒険があった。ひたすら苦しさと悲しみの先にあつた興奮と歓喜を忘れられない。でも、夢物語はそこまで諦めるはずだった。僕を見付けなければ。リキットがレーデを送る姿は、まさに求めている冒険の一齣で、かつこよく感じた。だからこそ彼を追う。家に辿り着くまでもがすでに、楽しくて仕方が無い。

ただ眺めるだけはもう嫌だ。存在の危機だつてもう懲り懲り。そこに都合よく現れたのが僕だった。

チコモコの能力を理解する。自分の手足を動かすのと同じように、それと意識している訳でもないのに自然にわかる。チコモコの能力は、僕という意識とは別に精霊チコモコが見聞きした経験を後で、若しくは自意識の一部を外す事で同時に、追体験できるというもの。

何故こんなに色々な事が分かるのか。簡単だ。契約というものの性質に由縁している。

パンサーは前に言った。契約をすれば魔力の消費を抑えることが出来ると、精霊にとつても魔力を安定して受けることが出来ると。

その意味する所が、これだ。僕とチコモコは一つになった。…完全一個の存在という訳ではなく、二人で一人という感覚だ。お互いに無くてはならない存在。けれど別個の存在として互いを支え合う。それが契約。

契約が解除されるというのが、今までの状態に戻るだけの事だとしても。痛みを伴わなくても、今の感覚を失う事が、自分を見失う事と同じ意味に感じてしまう。まさに精霊と人間が一体となった力
夕子。

だからこそ、見失うことは出来ない。

レーデを助けるといふ目標を。決意を。覚悟を。契約を。

契約を機に、残り僅かな僕の魔力とチコモコの魔力が、僕とチコモコを往復し、血の流れのように循環する。その過程で僕の精神が覚醒している事を拒んだ。魔力の流動が負荷となって、僕を眠りの世界へと誘ったと分かっていた。

僕は……いつ目を覚ますのだろう。

僕！ 起きろ！！ 今すぐに！！！！

第九日 ギルド職員の約束 (約4000字)

赤い陽の光が差す部屋の中。

チコモコとの契約後すぐに目が覚めたと願いたかったけど、自分の置かれた状況がそれと一致しない事が明らかだった。清潔感と引き換えにした、殺風景な室内と簡易作りのベッド。消毒アルコールの香りが鼻につく。

「気が付いたかね？」

ベッド隣の椅子に座っている声の主を見ると、靄のかかった様な精霊契約の続きなんじゃないかと思う。現実と分かっているのに、脳が覚醒を躊躇っているみたいだ。それもその筈、そこに居たのはクラフトマン技工士クエストをよく利用するお得意様にして、リザリア地域の有権者で、僕の遠戚にあたる人物だった。

「あ、の。……どうしてここに？」

「君が倒れたとマルガレットに聞いてね。友人の診療所に運ばさせて貰った」

「マルガが……？」

「アレは私の娘だよ。もつとも、私の言う事も聞かず自分勝手にやっているみたいだが……」

少し悲しさを含んだ複雑な表情が見えた。

「ところで、私の情報は役に立たなかったのかな？」

「あ、いえ、そんなことは」

役に立ったかどうかで言えば正直、何の役にも立ってはいない。

「冗談だ。あの程度の情報でどうこうする方に無理がある。……しかし酷くやられた様だね、すまなかった。もう少し早く探りを入れるべきだった」

マルガの親と名乗る有権者は、一度深く目蓋を落とし、キツと力強い眼つきに変える。

「さてこの件、君は何処まで知っている？」

沈黙が流れる。

「……友達が魔力抽出所に行っただんです。レーデを止めないと」
僕は強く目を閉じ、拳を握った。悔しい。止められなかった事が、事情を知らないことが、それともそれ以外の何か……わからない。ただ、後悔を感じる。

「そうか。……奴らのやり方は気に入らないが、事態が事態だけに彼らへの協力も吝かではない。……君の友人には、生きて裁きを受けて貰う事になりそうだが」

いつもの柔らかい表情に戻して、続ける。

「後は我々に任せて、君は療養に専念したまえ。リキット君」
そう言っ僕を叩き、席を立つ。

確かに、気を失って倒れた。けどそれは契約によるもので、体調はすこぶる……ではないにしろ、背中の痛みを除けば良好だ。

「僕は……魔力抽出所に行きます。……間に合わなくても、何も出来なくても、邪魔だと言われても、構いません。僕は行きます！」
焦りが先立つ。どうせここで嘘を吐いても、マルガを通して知られる。それならば正直に言っ、認めてもらう方がいい。それにミシエルの事で、助力を得られるかも知れないと思っただからだ。こんなに信頼できる後盾は、僕の知る限り他に無いだろう。
立ち上がるうとする僕は手で制される。

「無理をするのは止めたまえ」

「……友のため、家族のためと。散々、無茶してきた貴方が言っ台詞ですか？」

扉の無い室内に見覚えのある男が入っってくる。僕が世話になっ診療所の医師が入り口の壁に背をもたれていた。

「そうだな、そう言っ資格が私には無い。……私と同じか。わかつた、協力しよう」

そう言っ、少し離れた場所にぼつりと置かれた白い戸棚に向かい。胸ポケットから取り出した筆を使っ、手紙をしたため始める。

「オスリーさんが協力を惜しまないらしいから、これを持って行くといい」

医師から布袋を渡される。中には三叉矛の形をした小さな葉っぱが数枚入っていた。

「これは？」

「トライスピード。神経が過敏になる反面、麻酔効果を無効化、若しくは軽減する。覚醒薬の一種だ。……麻酔香を持っているという話だから、その時は葉を噛めばいい。中毒性があるため多用は勧めないが」

「……ありがとうございます！」

僕はベッドから飛び出して、深々と一礼する。

「残り物だ。礼には及ばない」

改めて認識させられる。僕は考えが全然足りていなかった。本当に魔力抽出所へ、ただ行くだけになってしまおう所だった。

そうこうしていると、手紙を書き終えて来て、

「間に合ったならば、マセル・ルイラフという男を頼るといい。筋肉の塊の様な大男だ、会えばすぐ分かる」

「ギルドで見かけたので分かります」

「彼を聴聞委員に紹介したのは私だ。きっと力を貸してくれるだろう」

そう言っつて、先程書き上げられた手紙を差し出す。僕は指輪で封蝋印された二通の手紙を受け取った。

一通はマセル宛、もう一通は先行している軍隊宛だ。軍宛の手紙には、馬を一頭手配するよう嘆願書が入っている。軍には出兵を要請したけど、監理外という事で、協力されない可能性もあると説明された。

長距離を人に乗せて、尚且つ、それなりの速度で長時間走るには、パカパカのようなサラブレッド種には厳しい。脚の太く安定感と持久力に優れた馬が必要になるけれど、最初から同じ条件で進むには

僕は出遅れすぎている。軍に追いつくまでパカパカで走り、そこから馬を乗り換えるのが妥当だ。

「マルガは子どもと一緒に君の家で、預かり支度ついでに待っているぞうだ。元気な顔を見せてから出発する事、それが私が君に協力する条件だ」

既に協力を受けているけど、そう言ったのはやっぱり親心なのだろう。マルガにもミシエルにも心配を掛けているに違いない。ミシエルが居るならパカパカも一緒だろうし、どちらにしても家に戻る事になる。

仮住まいの家屋の玄関口に近付くと、ドタバタという物音が中から聞こえてくる。

「ただいま」

「リキットー！ おかえりー！」

まず飛び込んできたのがミシエルだった。

「おかえりなさあい。えへへ」

どこか照れくさそうに笑うマルガの服にはあちこちに埃がついている。

「リキット、コイツが誘拐しようとする！」

何があったのか聞こうと、口を開きかけたけど、その前になんともなく状況が掴めた。ミシエルには何も言い含めてはいなかった。

「コイツじゃなくてマルガ、ね。……それに僕は少しの間、街を出るから」

「うん！ 一緒にレーデ助けに行く」

全く何も聞いていない訳ではなかったみたいだ。

「ミシエルにはね。マルガたちと一緒にいて貰いたいんだ」

「一緒に行く！」

「駄目だつて。ミシエルが危険な目に遭うのは見ていられないよ」

「リキットの方が弱いもん！ 一緒に行くの！」

うーん、どうなんだろう。ミシエルには負けた相手に向かって行

く勇敢さと、武器として精霊としてパンサーという秀でた力を持っている。反対に僕には運動神経はまるで無いし、チコモコの力だつて戦闘向きじゃない。だけどミシエルぐらいの子供に劣るものだろうか。

いやいや、そういう事じゃなくて。

「ミシエルを危ないと分かっている場所に連れて行くわけに行かないだろ？」

「リキットが危ないから守ってあげる！」

駄目だ。完全に強弱で見ているミシエルに、危険だとか言っても逆効果だと感じた僕は、味方を一人増やす事にした。

困ったのと同じくらい微笑ましい視線を送って、黙しているマルガに話しかける。

「ごめんマルガ。説得するから少し二人きりにさせてくれない？」

「はいー！ ミシエルちゃんの衣服はもう支度してあるので、表で待ってますねえ」

束ねられた二本の水色の髪をゆさゆさとなびかせて、ミシエルの服が入っているだろう鞆を抱えて出て行く。

「ミシエル、パンサーを出せる？」

ん。と軽く返事をして目を閉じ祈るように手を前に据えて、パンサーを具現化する。パンサーこそがミシエルを説得する一番の味方だ。

今まで何度か見てきたそれを不自然に思ったのは、パンサークローが見え始めてからだだった。爪状の武器が見え始めると、それと同じに武器の真横に黒くてもやもやとした物体が濃くなっていく。まるで視界に墨がこぼれ出したみたいだ。

わざとらしいほどに、何度も目をぱちくりと開閉させても、それは消えることが無かった。より黒くより大きく、最初は虫かと思っただけど、僕のごぶし大ほどになる。

(話は聴いておったが、どうした。何を呆けておる?)

(何かパンサーの横に丸くて黒い何かが……)

(見える様になったか。それは儂だ)

精霊としてのパンサーということだろう。チコメコと契約したことによつて見える様になったみたいだ。

(これが、パンサー？ …… ずいぶんと可愛いんだね)

すすの塊が浮き上がつてただけのようなそれを見て、パンサーの今までの言動が滑稽に思えてしまう。

(む?)

(そうだ、そんな事よりミシエルの説得に協力してよ)

(良からう……… ミシエルよ。リキットはお主が居ると本気が出せぬのだ)

ミシエルと僕へ併せて念話を送っているのだろう、そのまま念話が脳に響く。

(リキットの天地を震わせ山河を裂くその本気のカモ、お主が隣に居ては使えぬのだ)

「そ、そう。その通り!」

胡散臭い説得が始まったけど、今のミシエルには一番効果的なのかもしれない。筋肉を盛り上げるポーズとでも言うのだろうか、これでもかと間接を曲げる。勿論、盛り上がる筋肉なんて全然無い。けどローブがそれを隠していた。

ミシエルはこちらを眉をひそめてこちらを見ている。完全に疑っているようだ。

「僕が嘘を吐いてるように見える? …… ミシエルを騙したことがあった?」

大人つて汚いよね。誤魔化したり、嘘吐いたりしていない訳でもないのに、知った上でこんな風に詰め寄るんだ。でも今回はミシエルのためつて事でどうか許して欲しい。

(所詮、リキットの事だ。……ただ街を出て ただ戻つて来る、それだけの話。……そう、所詮はリキットだ)

二度も言うのか。さっきの引つ掛かったものをここで吐き出そう

としているパンサー。精霊にも自尊心というものがあるみたいだ。

「いやいや、僕は必ずレーデを助けて帰ってくるからね」

ミシエルは口をつぐんで、じつとこちらを窺っていた。

「……絶対、レーデを助ける？」

しばらくして開かれた口からはそんな言葉が零れ落ちた。

ミシエルもレーデを助けたいと心底思っている事に気が付いた。だからこそ真剣に応えた。

「絶対にレーデを助けて連れて帰ってくる。約束だ！」

「ん〜……ん、待ってる」

急ぐという理由で、家を出て同時にそれぞれの目的地を目指す。追い縋る様な形でミシエルたちは、いつてらっしやいと叫んだ。そう、行って来る。僕はレーデを連れて戻って来なければならぬ。そういう約束を交わした。例え何が待ち受けようとも、僕の目的はそれだけだ。

魔力抽出所を目指す。レーデは恐らく二日前に夕方以降に発った。それを追う形で、聴聞委員とマセルそしてネスティ一行が一日前の夕方に。軍が今朝の未明に。僕は日の出後によやくリザリアを出発した。

行程だけで言えば既に一日と半分遅れている。間に合うだろうか、それだけが心配だ。

第一一日 ギルド職員の真実〜白い暗闇の先〜 (約4000字)

例の植物を燻されて、白く薄い煙が幕となった渦の中を、パカパカの背に乗ってひた走る。トライスピードを強く噛みつけてスピードを上げる。煙の渦を一つを抜け切ると、またスピードを落とす。さつきからこればかりを繰り返している。

前にも後ろにも視界は白く濁っていて、煙の迷路に迷い込んだよっだ。

「プーカポカ、パカパカの脚は大丈夫？」

「ん？ おいらを馬鹿にしてるのか？ 大丈夫に決まってるぞ。…

…それにしても、臭くて煙たいぞ」

プーカポカが片手で鼻を摘まんで、片手で目の前を扇ぐ。

プーカポカはパカパカと契約した地属性の精霊で、大きな頭をしている。全身合わせても僕の顔と同じか小さい位の小さな人型精霊。全身緑の衣服を着ている。勿論、着ているのか服自体も精霊の一部なのかは、よく分からない。そして半分ほどもある頭にも緑色の三角の頭巾を被っている。

「折角いっぱい走れたのに、気分悪いぞ。戻って別の道行こう！」

地の精霊なのに走るといっつか、風を感じるのが好きらしく、走る動物と契約を交わしながら生きてきたらしい。

「もう少しいだよ。もう少しいだけ我慢して」

「んー。しょうがないなあ。まーあんたがああ既舎から出してくれた訳だし。こんなに走ったの久しぶりだし。でも、臭いんだぞ」

「ごめんね」

プーカポカは不満そうに締めくくったが、それ以上文句を続けることはなかった。

言葉で話し掛けてくるプーカポカだけど、それはパンサーの言うところの、通じていないからだと思う。チコモコと違って話すことが出来るのは、相応に生きてきた証なのだろうか。言葉を理解し念

話すパンサーと、普通に話すプーカポカの違いを考える。やっぱり、精霊の形状に関係が有るのんじゃないかと思に至る。

（契約は人間にだけ許された特権などではない。儂のように武器に宿る精霊がいるのと同じく、動物に宿る精霊とている。……なれば馬と契約する精霊がいてもおかしくはなからう）

パンサーにそう説教されたのは、もう二日も前の話だ。

チコメコと契約以後、始めてパカパカを見て驚いたのは、緑の小人がパカパカの頭にちょこんと乗っかっているからだ。飲食料を確保している最中、ふいに窓から外を見るとそれを見つけた。パンサーを見た時と同じように呆けていたらしく、パンサーに声を掛けられた。

（どうした。また呆けているのか？）

（あ、あそこに小人が……）

僕が指差す先はパカパカの頭上、緑の小人。

（プーカポカの事か。地属性の精霊だが、詳しい事は本人に聞くが良からう）

その濁すような言葉は、パンサーが自身の事を話そうとしないのと結びついた。けれどそれを聞いている暇はなく。それよりも、プーカポカに関してある期待を感じていた。

パンサーが言うには、僕が精霊を見ることが出来るようになったのは、チコメコの影響によるものだという事。それは精霊の中でも非常に若く力の弱いチコメコが、感知する能力に長けている証。契約をしても全員が精霊を見えるようになる訳ではないらしい。反対に、精霊契約をしていない人間の中にも、稀に精霊を見る事が出来る人間がいるという。

荷造りを早々に済ませて、プーカポカの下へ向う。

「おはよう、プーカポカ」

「おう。おはようだぞ！……今日は走れるのか？」

僕に見られている事に関して、全く違和感を持たなかったようで、平然と話してくる。今までミシエルがパカパカの首に巻き付いたりしていたのは、プーカポカと話をしていたのかも知れないと思った。「う、うん。南西へ三日程走った距離にある魔力抽出所へ行くんだ」

「ほんとか！三日も走れるのか？やったぞー」

一瞬、走るのはパカパカだろうと思っただけど、チコメコと知覚を共有できる僕には、なんとなく理解できた。

「それで、パカパカの事なんだけど。……三日間も駆足。いや、速足で走り続けられるものなの？」

「駆足だって、出来るぞ。……ん？まさか寝ないわけじゃないよな？」

「まさか。……そんなに走って、パカパカの脚は大丈夫なの？」

「おいらの事を舐めてるのか？出来るったら出来るし、相棒に無理なんてさせないぞ。おいらの力は衝撃を強くしたり弱くしたりする事なんだぞ！……そんな事より行くなら早く行こう！」

願ってもない事だった。僕は運が良いのかも知れない。情報を手に入れたのも、プーカポカの事を知れたのも、チコメコのお陰だ。

僕の相棒はそこが自分の席であるかのように、僕の頭の上で舌をちろちろと出している。この煙の中でも、それは変わらない。

街を出てからというもの、出来るだけ平坦な道を選んで走ってきた。その所為か、軍隊の影を遠目にしか見る事ができなかったのと、もう一つ。盗賊に襲われかけた。

チコメコの目と自分の目を交互に見やれば、飛んでくる矢も楽に見つけられた。その上、飛んで来る矢も緩急をつけて走るパカパカ

を的確に射止める事など出来なかった。長距離も荷を引くような馬とは最高速度が全然違うから、盗賊も勝手が違ったのだらう。何より荷をほとんど積んでいないからか、すぐに諦めたみたいだったけど。振り返る事無くチコモコの目を通して、後ろから飛んで来る矢がどれだけ止まっている様に見えたことか。小気味良かったのは確かだった。

ぼつりと白い煙の中に建物の影が見える。そこが確かめるまでもなく魔力抽出所だと分かった。

白い煙が立ち込める中、灰色の外観全部を見通すことは出来なかった。けれど、入り口はすぐに見つかった。誰かの影がそこへ入っていったのが見えたからだ。

「レーデー！」

僕は叫んだ。パカパカが想像以上の長時間を走り続けてくれた事。それで僕は追いついたと思ったからだ。

影は一回り小さくなって以降、こちらを向いて構えて動かない。距離を取って、警戒している。レーデー本人では無さそうだ。流石にそんな都合よく進むとは思ってない。相手を確かめるためにゆつくりと近寄る。

「リキット……さん？」

煙を纏っている様な白い服装のネスティがそこに居た。それを聞いて、僕とネスティの間にある入り口から、次々と出てくる。マセル、ハイブマン、エクシス、ケツペン。

「リキット君、どうしてここがわかった？」

ハイブマンが短剣を鞘に収めながらそう尋ねてくる。

「オスリーさんから聞きました」

勿論、嘘だけど今はそう言うのが最善だと感じた。

「あの、マセルさん。これを」

オスリーさんから預かった手紙をマセルに渡す。マセルは不思議そうにその手紙を読む。

「……なるほどな。同行人が一人増えるぜ？ 問題ないよな、ハイブマン」

「いいだろう。その代わり仕事は、より迅速にやってもらおう」

「じゃあ、くつちゃべってないで行くとするか！」

マセルが先頭を歩き、ハイブマンが続く。エクシスがこちらを一瞥して後を追う、それにケツペンが従うようついでに行く。僕とネステイが並んでそれに続く。

設置された魔光灯の明りで中はくつきりと見えた。魔力抽出所の入り口から部屋までは大人二人が並んで歩く事ができる通路だった。マセルが一人だけ窮屈そうに進む。土壁の所々に金属の柱が立っていて、不自然さと不気味さを醸し出している。

入口通路から少し開けた空間には、真正面に扉がある部屋。他に出入り口は無い。叩いてもまるで音を反射しない重厚な扉は、全員で押しても動く気配がない。

「やっぱりこの盤が鍵になっているんでしょうか？」

ネステイが示す盤は、扉の隣にあった。

盤には上下左右の四箇所に鐘形の穴が開いていた。

「どうやって開けるんだ？」

マセルはしばらく盤を見て、聴聞委員の面々を見渡しながらそう言った。

「知っている訳が無い。……通信も遮断されているし、気を失った奴からは聞く事も出来ん」

代表して答えるハイブマンは、気を失った抽出所の警備員を外で見たと説明を足した。僕に気を使ったのだろうか。

ともあれ始まって早々、行き止まりに当たった様なものだった。

僕はその盤にある穴に何故か見覚えがあった。

「この穴。……ちょうどピースオブオレンと同じ大きさですよね？」
そうピースオブオレンだ。鐘形の銅貨。

「なるほど。だとしたら警備員がピースオブオレンを持っている可

能性が高いな」

俺が見て来よう。そう言ってハイブマン独り入口へ向かって走り出す。

戻って来たハイブマンは六枚のピースオブレンを手にしていた。三人の警備員が各二枚のピースオブレンを持っていたという話だ。「入口である事を考えると、四つの穴のどこかにピースオブレンを二枚を差し込む事で開く仕掛け。……という事で御座いましょう？」エクシスの問いに頷いて納得する。

扉盤の仕掛けを間違えると、何処からともなく毒の塗られた矢が飛ぶ。けれどマセルとハイブマンがそれをことごとく叩き落した。四度目にして扉が左右に開く。

その後も罠の出迎えがいくつもあった。それらは急ごしらえの罠ではなく、設備と一体化していて、以前から機能していた物だと物語っていた。正直うんざりしてきたけれど、警備員や所員を全然見かけない理由がなんとなく分かってきたところだ。

進むべき道筋をようやく発見して、抜ける床のある部屋を進んでいたところだった。この部屋だけ魔光灯がなく、少し薄暗い。これも罠の一部なんだろう。

突然、地面が揺れ動く。地震だ！

僕とエクシスが地震の影響を直に受けてよろける。僕の身体をマセルが難なく支えた。エクシスは抜けない床から、抜ける床へと足を踏み外す。床が落ちるより先にエクシスに手を差し出し、思いっきり引張るケツペン。エクシスを救うのと引き換えに、一言も発せずに落ちていく、ケツペンの後姿。誰もがどうする事も出来なかった。

ケツペンがエクシスの雑用奴隷と聞いていた僕は、その忠誠心に感服する。それと同時にケツペンを助けられなかったという事が、レーデを助けられない事と重なって、恐怖と悔しさに襲われ始めていた。

ケツペンに助けられ、ハイブマンに身体を支えられていたエクシスだったが、すぐに姿勢を直す。そうだ、いくら奴隷と言いつてもはいえ、彼女の方が辛いに決まっている。

エクシスが、ケツペンの落ちて行ったその先を見つめる。僕の居る場所から見ても、その先は深く真つ暗だ。　　彼女はその暗闇の中へ飛び込んだ。

一同が唾然となつて消えた姿を追っていた。どう声を掛けようと考えていただろう。生きていると安心させる言葉だとかを考えていた筈だ。だけど彼女はそんな言葉を聞く事は無かった。

第一一日 ギルド職員の真実く吹き抜ける風く (約3000字)

「……くっ！ 先を急ぐぞ」

何度がエクシスとケツペンの名を叫んでも返答が無かった。過去の勇姿を思わせる目の下切り傷とともに、ヘイブマンの顔が悲しげに歪む。

ケツペンとエクシスの落ちていった場所を除けば、薄暗くも広く見える室内。けれど、正解の道筋を除けば、殆どが落ちていく部分が占めている。ヘイブマンは唯一、彼女を助けられる位置に居た。

「それだけなんですか！ 人が落ちたのに!？」

「どう助けると言うんだ！」

きつと彼が睨みつけているのは僕であって僕ではない。重大な使命に支えられていなければ、そう言う事も無かったかもしれない。

「おい、兄ちゃん落ち着きな。状況を、今すべき事を考えろ。……遠足で来たんじゃないんだぜ。先に進む気が無いなら、アンタの勝手にすりゃあいい。……俺らは進むぜ？」

マセルの声色が下がったように感じた。

確かに遊びできた訳じゃない。彼らには彼らの、僕には僕の、ここに来た理由がある。暗闇の深さを考えれば、現実的ではない。けれど、音も悲鳴も聞こえはしなかった。ならば生きていると、無事だと信じる他は無い。

ネステイは目を閉じ唇を噛んで、所作もなく祈っているように見えた。彼の性格を考えれば、僕のように助けると食い下がっても可笑しくはなかった。それでも、佇んでいた。経験がそうさせるのか、覚悟がそうさせるのか、黙禱を捧げている。

行きましよう。誰にでなくそう発した言葉を聞くまで、僕も祈りを捧げた。

薄暗い部屋から伸びる通路を抜けると、また開けた部屋の一つに

出る。部屋に入って間も無く先頭を進むマセルが歩みを止める。今度はどんな罠が待ち受けているのだろう。

部屋だと思つたそこは、天井がなく緑がそこかしこに華やいでいた。間隔を空けて整列する木々、地面は芝生。中庭のようだ。息の詰まる思いで罠を掻い潜つてきて、汗ばんだ肌を涼しい風が撫でていく。

「これは!？」

部屋の隅に並ぶ緑の影……それらは全て人間だった。おそらく所員と警備員なのだろう。緑の制服を着た者がほとんどだった。手足を縛られて身動き一つしない所員達の生存と意識を、マセルとヘイブマンがそれぞれに確認している。互いに首を縦に振って合図をする。どうやら、外周で確認した警備員と同じように意識を失っているようだった。

「追つ手が来るのはまだ一日は先だと踏んでいたんだが、流石に優秀らしいな」

声のする方、中庭の奥から七人の男女。全員が黒のスーツを着込んでおり、同志という関係を思わせる。その中にはキューブの修理に来ていた三人組みと……レーデが居た。

「レーデ!？」

レーデと視線が合う。視線の間に強い風が吹き抜ける。

「その言葉。お前らがここを爆破をする前に止める事で、賛辞として受け取る」

ヘイブマンが短剣を抜き腰を落とし、臨戦態勢を取る。それに合わせて、マセルもハルバートを振るい落とし、切っ先を向ける。

一番屈強そうな男が口を開く。

「ここは自分たちが。レーデさん達は計画通り先に行ってください。……では、聴聞委員さまには、ここで取り逃がして間抜けを晒して頂きましょう」

レーデは頷くと、修理作業員だった他の二人を引き連れて、奥の通路へ歩みだす。

「待つて！ レーデ！！」

「これはお前が関わるべき事じゃない。……邪魔だ帰れ！」
振り返るレーデの横顔、

「帰るとも。君と一緒に！ ……帰ろう！」

「……俺はもう戻らない。これ以上、俺に関わるな！ お前にはお前の人生があるだろう」

その目には強い意志が宿っていた。

向き直ったレーデは更に奥へ、中庭を抜けて行ってしまった。

レーデは今も昔も変わっていない。僕を巻き込むまいとしている。

……僕の言葉が届かなかったわけじゃない。彼らの目的がレーデにとって、それ以上に重要なんだ。

彼らの目的が何なのかを知り得ない限り、説得も空回りしてしまう。それにしても不思議だ。ハイブマンの言う様に魔力抽出所を爆破するとして、彼らに一体何の利点があるのか。爆破する施設の中庭に所員や警備員を集めた意図。爆破とともに巻き込むなら、そこまでする必要はないし、何より最初から殺傷行動を取るはずだ。人を殺す事無く爆破するためだろうか。

チコモコにレーデの後を追うように、スルスル地を這い始める。見えないチコモコなら邪魔されずに追えるからだ。

「行かせるか！」

人数が同じになろうとしていたけれど、ハイブマンがそれを良しとはしなかった。身体を揺さ振りながら、黒スーツ集団へ突撃する。マセルも初斬をいつでも放てる様に構えながら、ハイブマンに続く。マセルの巨体の後ろをネスティが走っていた。あつと言う間にチコモコを追い越す。

レーデの姿は既に消えていた。

残った黒服の四人はそれぞれ武装をしていた。小さな盾と短剣が二人、長剣が二人。対して、短剣だけのハイブマン。大型ハルバートのマセル。細身の長剣のネスティ。

向かって一番右の黒服とハイブマンが衝突する。ハイブマンの身体全体を伸ばした最初の突きは、盾によって軽々と弾かれる。反撃とばかりに短剣の突きがハイブマンの顔を掠める。ハイブマンはその突進態勢のまま余った拳を黒服に叩き込む。……が、これも盾で素早く防がれていた。

「ちっ！」

ハイブマンは風のような突進を防がれて、苦い顔をする。反対に、黒服は軽く笑った。僕でさえ、その二人が戦い慣れていると思える。そしてハイブマンは距離を取った。

右から二番目にいる黒服を狙って駆け抜ける巨体、マセルの一閃は右から襲い掛かった。長剣の黒服は辛うじてその一撃を左へ避ける。マセルは止まって、ハルバートを長剣の黒服に向かって突き出す。黒服は堪らず、後ろへと距離を取る。

マセルが右側に隙間を抉じ開ける。その隙間に向かって白い風が駆ける、ネスティだ。日差しが金髪に跳ね返り、まるで輝いているよう。そして黒服の間を抜けた。……のだが、長剣の黒服がその前に立ち塞がる。白い風の襲来にいち早く気付いていた一番左の黒服だった。

ネスティはその顔を一度見上げ、頭を下げる。

「お願いします。通してください」

「……出来ない相談だ」

長剣の黒服は、剣を抜いていないネスティに斬りかかりはしなかった。

「なら教えてください。一体何が目的なんですか？」

黒服は何も答えない。僕もそれが知る事ができたならと思う。

ゆつくりと歩き出すネスティ。その行き先に、振られる事無かった剣の刃が壁となつて、突き当たる。ネスティも止まるしかない。

「……何故だ？ 何故、剣を抜かない？」

当然の疑問だ。剣を向けられているのに、普通こんな事ができるものか。いつ振り下ろされるか分からないのに、その距離を縮める事なんて自殺行為だ。何より、構える様子が一切無い。その仕草が微塵も感じられない。

「では何故、貴方々は誰も殺さないのですか？」

そこに立っているのが少年だというのが、より思わせる。その凄みを。上位ハンターという人種の、赤髪の少年の威圧感を思い起こさせる。

けれど、その状況は彼らに沈黙と膠着状態を与えるだけだった。

「恨みは無いが、観念してもらおうか」

構え直すマセル。ネスティとは違う意味で、マセルは長剣の黒服を明らかに圧倒していた。

「それはお断りしましょう」

そこ短剣の男が加わる。それは僕が戦闘に参加しないと、見当をつけたからに他ならなかった。マセルを中心に左右へ広がり、三人が一直線に並ぶ。黒服は隙を窺うようにゆっくりとマセルの周囲を回り始める。マセルは横向きに、目の淵に黒服二人を捉えようとゆっくり自転する。

チコモコがようやくマセルを囲む、黒服男の足元を通り過ぎようとしていた。……突然、短剣の男が盾を捨てる。盾はチコモコの横にどさりと落ちた。チコモコは慌ててマセルの足元へ急ぐ。怪我は無い、驚いたただけだ。男はマセルの外周を回りながら、軽く跳んでリズムを刻み始める。しかし、それだけだった。

この黒服の戦士達は一貫して自分達から攻撃を仕掛けない。時間稼ぎをしているのは明白だった。

レーデを含めて、この黒服集団がこの施設を爆発させる理由が本当にどこにあるものか。仮に男の言った計画の中に爆破を含んでいたとしても、彼らの目的が別のところに有ると確信めいて感じた。

自分の居るところだけ太陽光が雲に遮られたように、急に視界周囲が暗くなる。

目の前に大きな塊が落ちてきた。

巨大なものが勢いよく落ちてきたというのに、衝突した音を耳にしなかった。その代わり、舞い上がる土煙と物凄い風圧に押され、後ろへ数歩下がる。

「おーいたぞ。いつになったら帰るんだ？ 臭くてもう我慢できないぞー！」

目の前に落ちてきたのは、プーカポカの乗ったパカパカだった。

第一一日 ギルド職員の真実〜一つだけの分かれ道〜 (約4000字)

大きく開いた中庭の左側を疾駆する。僕の乗ったパカパカの走りに合わせて、跳ねるチコメコを掬い手で拾い上げる。チコメコを拾うために馬上から半ば落ちた身体を強引に戻すと、パカパカは山なりに跳んだ。

軽々と頭上を越えていく馬を誰が普通と思えるだろうか。なりふりなど構っていられなかった。ネスティと対峙する黒服は一瞬怯んだ。けれど足止めとしての役割を放り出したりせずに、その場に留まったまま。むしろ僕が通っていても何も変わらない。そう言わんとするばかりに腰を据えているようだった。

「リキットさん、助けたい人なら躊躇わないで。僕は貴方からデュライが生きていると聞くまで、ずっと後悔してました！」
ネスティの声を背に受けて、パカパカは走る。

中庭を抜け、魔力抽出所の内郭へと進入する。罨が一つも無いものの、造り自体は中庭以前の外郭部分と同じで、鉄柱が不自然さを醸し出していた。人氣が全く無いのも同じだ。

しかし中庭の壁を覆い隠すほどの群集と、罨ばかりだった外郭で想像できる。恐らく、魔力抽出所の外郭は侵入者を撃退するためだけの設備。本来、所員も警備員もこの内郭施設で働いていたはずだ。でなければあれだけの人数が中庭で眠らされているはずが無い。

既に内部の人間を中庭へ運び出しているのだから、レーデは目当てを突き止めていると考えた方が良さそうだ。なのに僕は三方に進路が分かれた通路に立ち往生してしまう。レーデの行き先が分からない。

「どっちに行けば……?」

誰にでもなく聞いていた。

真っ直ぐ　チコメコが僕の頭の上に乗ったまま、真っ直ぐに前

を見つめている。

それは簡単な推測。レーデ達が魔力抽出所に来た理由、逆を言えば、ここで無ければならなかった理由だ。そんなの決まっている……それは抽出システム。それ以外には有り得ない。施設地図でもこの先の中枢部に抽出システムがあるはず。

でも万が一、違ったら。焦りと不安が僕の思考を犯していく。そうじゃなかったら、間違ったらと、簡単な推理も、疑心暗鬼になって返ってくる。息苦しさは僕を包んで、目眩を覚える。パカパカの背に乗っているのも、足が浮いているのもそれに拍車をかける。

立ち止まったままじゃ、ここまで来た意味がなくなってしまう。行こう、この先へ。けれど馬腹を蹴っても、パカパカはうんともすんとも言わず、微動だにしない。

「パカパカ……どうした？」

「なんか嫌な感じがするぞ」

パカパカの代わりに答える小人の精霊。僕の知る限り初めて神妙な面持ちのプーカポカも、前を見て何かを感じ取っているようだ。魔力に敏感な精霊が見る先に、魔力抽出システムがあるのは間違いない。僕から見てもこの先に圧迫感を感じる事ができるのだから、馬であるパカパカにすればこの通路の閉塞感は尋常ではないのだから。

パカパカの背から飛び降りると、自分の足にずっしりと重量が掛かる。改めて全身が浮遊しているように感じるのは、飛び降りた反動ではなく、緊張感からだろうか。静寂に包まれる通路に心臓の音が響いているみたいだ。

ゆっくりと一步を踏み出せば、それに負けまいと左足が、その左足につられて右足が前へ。間の抜けそうな速さでも着実に進み出る手綱を引いていないにも関わらず、パカパカが僕との間を詰める様に歩き始める。

ギィィィ

錆び付いた音を立てながら、視界の端に扉が開かれていくのが見

て取れた。素早く十字路を利用して死角に隠れて様子を見る。

扉から出てきた人物も周囲を警戒しながらゆっくりと姿を現す。それはエクシスとケツペンだった。

「エクシスさん、ケツペンさん……無事でよかったです」

死角から飛び出した僕はそう声を掛けた。覗き見るように僕の姿を捉えた二人は、こちらを向き直る。同時に僕以外の人が居ないのを確認して、怪訝そうな顔付きに変わる。

「他の方はご一緒ではありませんの？」

当然の疑問だった。彼女の同僚へイブマンの友人の弟であり、僕が持ってきた手紙を読んで同行を強要されたという経緯。彼女の知っている事からすれば、僕を警護する人がいないというのは納得がいかないのだろう。

「さつき、中庭のような場所でレーデ達と遭遇して戦闘になって……僕だけ馬で抜け出てきたんです」

「そう。……ではやはりここは中心部の方ということですね？」

「はい。でも本当に死んでしまったんじゃないかと心配していたので、良かったです」

「全然よくななんか御座いませんわ！ 落ちた先がゴミ処理場で、こんなに汚れてしまって……汚らしいっいたらありませんわ」

思い出したように、これでもかとロープをはたき始めるエクシス。「でも、ゴミ処理場だったから生きて出られたんですよね。槍でも立てられた床だったりしたら、もう」

エクシスは目を細めて、少し言いくさそうに口を動かす。

「いいえ……もし稼動していたら確実に死んでいましたわ」

そんな中でもケツペンはただひたすら沈黙を保っていた。

エクシスは場所の確認と、現状を僕から聞きだした。僕はハイブマン達との合流を勧めたが、エクシスは構わず中枢へ向かうと言っ
て聞かなかった。死んでしまいかねない状況に陥ったにも関わらず、その意思表示は彼女が強い人なんだと思わせた。

独りで進むのを諦めて、エクシスとケツペンに続く形で行くことにする。

「ケツペンさんはどうしていつも喋らないのですか？」

警戒しながら進んでいるのに、僕の口から滑って出てきたのは、ずっと思っていたその疑問だった。

「……喋らないんじゃないや御座いませんの。……喋れないんですわ」

振り返る事無く、答えるエクシスの悲しそうな声。

どうやら触れてはいけない部分に触れてしまったらしい。ケツペンの頭の不気味な膨らみと何か関係が有るのかもしれない。

「……その大きなベルト、かつこよくて素敵ですね」

話題を替えようと、エクシスの艶っぽさを強調する腰に巻かれた大ベルトを褒める。

「これは」

ガダンツ！　ゴオオオオオオ……

僕たちが進む先の方から音が響いて、行く先を阻むように強い風が吹きつけてくる。その風は十数秒続き、僕がパカパカに、エクシスがケツペンに身体を預けざるを得ない程の強さだった。そしてチコモコが風にさらわれたと感覚的に理解する。

目を深く閉じ精神を集中させて、チコモコの感覚を受覚する。特に痛みは感じない。ことと変わらない通路で、近くには魔力抽出所の内郭の地図が張り出されているのが見える。間違いなく、先程通ってきた中庭付近の通路だった。中庭方向からは剣戟のぶつかり合う金属音と短い肉声が微かに聞こえる。

随分な距離を飛ばされてしまったらしい。合流するにしても、随分と時間を要する。何より先程の音と風の方が気になる。レーデ達が無かをしたに違いないからだ。

「急ぎましょう」

「そうですね」

パカパカの手綱を引いて、走り出す。

が、手綱を持った手が

後ろに引き戻される。

「どうしたパカパカ？」

見ると、パカパカの上の小人精霊プーカポカが泣きじゃくっているではないか。

「フウルルル」

呼応するようにパカパカも弱々しく鳴き始める。気性を表立って出す事の少ないパカパカが悲しんでいる気がした。

「どうかなさいましたの？」

「パカパカが止まって」

「今の音と風で怯えてしまったので御座いましょう……」

手綱を引いてもびくともしない。プーカポカも激しく泣いていて取りつくしまも無さそうだ。

「動かない馬なんて放って置いて行きますわよ！」

今は一刻も惜しいんだ。パカパカ、プーカポカごめん。そう思いながら、手綱を放して走り始める。

そこからは慎重さを欠いて急いだ。

死角のある分かれ道だけ、立ち止まって様子を窺う。

けれど待ち伏せや罠は何も無く、ついに音を発したであろう場所に到着した。

魔力抽出システムに直結した、魔力発信所。大陸全土のキューブに魔力転送を行うシステムだ。進入時のヘイブマンの説明によれば、魔法通信の応用で魔力転送をしているらしい。施設地図ではこの先に抽出炉がある。

広間ほど空間がある円形の部屋の中心には見た事の無い緑色のキューブが十数台整列していた。周囲には計量器のような物がずらりと並んでいる。そのキューブの前に座る黒スーツの女性と男性がひとりづつ。レーデはおらず、修理職員を装っていた人達だった。

奥には地下へ続く階段があった。その上には階段の蓋となっていただろう巨大な扉が既に空いており、開かれた扉の内側は機械仕掛

けの様相を見せていた。階下へ続く階段と僕たちが入ってきた所の他に出入り口はなく、緩やかな風は地下から吹いてきているとわかる。

「足止めに失敗した……という訳では無さそうだが、三人も来たのか。あとどれくらいだ？」

男がこちらを一瞥して、不愉快そうに黒スーツの女に告げる。

「始めたばかりじゃない。まだ二割といった所よ」

緑のキューブを操作しながら答える女。

「……ドゥーグ、援護してあげて」

女が胸に飾った十字架のネックレスに触れて目を閉じる。すると、女の前に黒い風が巻き上がるように昇って行く。黒い風が過ぎた後には、犬の形だけが残っていった。緑の瞳を持ったその黒犬は、低い唸り声を上げていた。十中八九、精霊だ。

「ケツペンは左へ。私は右へ行きますわ。貴方はご自由に」

そう言うエクシスは緑キューブが占拠した中心より右へ、ケツペンは指示通りに左へ走り出す。ケツペンの向かう先には、既に黒スーツの男が立ち塞がっている。

「見えないってのは、どうもな。でも信用してるぜ、モディ・ドゥーグ」

「ボウ！」

黒い風を纏った黒犬　ドゥーグは緑キューブの中央で作業している女の下から、あつと言う間に右側の通路へと、滑るように移動した。

精霊との戦いなんて考えた事は無かったけれど、見えない精霊と戦うなんて不可能だ。一方的になぶられて終わるのが目に見えている。僕はエクシスの後を追って走りだした。

第一一日 ギルド職員の真実へ至る場所へ (約3000字)

精霊が見えるから勝てるなんて馬鹿な考えなんてありはしない。ただ、エクシスが一方的にやられるよりは、攻撃に対して防衛が取れると思う。勝てる確立だって、数%……いや、万が一にもあるはずだ。

以前、緑キューブを操作し続ける黒スーツの女性。先行するエクシスは、黒服女が相手をしないと踏んで速度を上げて走る。けれども向かうその先には、黒犬モディ・ドゥーグが待ち受けている。

ドゥーグが奔り出す。その動きは動物のような躍動感が無い。足の裏に車輪でもあって、それが回転しているだけのよう滑るような動き。動作無く奔るドゥーグの速度はとてつもなく速い。

「エクシスさん犬の精霊が来ます！」

言い終わるより早くエクシスとの距離を詰めて、軽く触れるように爪が触れると、エクシスの左外腿が切り裂かれる。切られても暫くそのまま走り続けているエクシスだったが、自らの異変に気が付いて左足をちらりと見る。

「……っ!? そう、犬の……精霊ですの?」

エクシスはその姿を確認しようとして左右を見渡すも、当然見えないように立ち止まって動けなくなってしまう。次第に、震え始める。

「すぐに行きます」

「……きが……」

守るにしても、逃げるにしても、混乱しては大変だ。

「大丈夫です、僕には見えますから!」

落ち着かせる事、それが大事だ。対処を考えるのはそれからでも遅くは無いはず。

「精霊如きが……私に齒向かうんじゃない! リセフ、同族の穢れを払いなさい!」

エクシスは腰に巻いた大きなベルトを思い切り引き抜くと、それ

はスルスルほどけて伸びた。伸びきったそれは長い鞭に形体を変えていた。何より、その鞭の持つ手から先端にかけて、赤い火花が散っているように見えた。よく見ればそれは火花ではなく、小さな稲光で地に宙に向かって赤く激しく伸び散っている。

赤い稲光を発する鞭を振るうエクシス。その鞭の軌道は全く見えず、四方八方に鞭の通った残像と飛び散る赤い雷光。まるでエクシスを中心に荒れ狂う嵐のようだった。そう、エクシスの震えが怒りによるものだと言わんばかりに。

「キユイン！」

虚を突かれた黒犬精霊のドゥーグは鞭の軌道の一つに首を打たれたが、すかさず鞭が通る軌道圏内から出ていく。しかし、エクシスは瞳だけを横へ動かし、蔑むようにドゥーグを眺めていた。

「見つめましたわ」

鞭を振るうのを止めていたエクシスは、ドゥーグへ向き直る。鞭を持つ手を握り、その拳を胸の前に震わせながら上げ、黒犬の精霊を見据えていた。鞭から出る赤い稲光のせいだろうか。明らかにさつきまでは見えなかったはずのエクシスから、ドゥーグが見えている証拠だった。

図らずもエクシスとドゥーグの延長線上で、走っていた僕は静止した。

「貴方に戦闘は期待していませんわ。貴方のご友人が主犯なので、それから、しがみ付いてでも止めてご覧なさい。その為に来たので御座いますしょう？」

優にエクシスの背丈の四倍を超える長さの鞭を遊ぶように収束させながら言った。その目はドゥーグを捉えたまま離れない。レーデが主犯という言葉を否定するには、進んで真相を確かめるしかない。そしてそうさせない為に来たのは事実だし、今望む全てだった。言われなくとも、そう思って無言でエクシスとドゥーグを遠巻くように避けて走る。

エクシスの長鞭は正確無比にドゥーグが僕に近寄るのを牽制する

位置で激しく音を鳴らした。赤い閃光が走って、僕のことを援護してくれているらしい。それも二度三度と繰り返されれば、ドウーグも標的をエクシスに戻して身を揺らすように鞭の軌道から逸れて隙を窺う。相変わらず、流れるように動いていて実体を感じない。

緑キューブの対岸、左の通路ではケツペンと黒スーツの男が素手で組み合っていた。黒服男はケツペンよりも一回り小さな体格で、貧弱とは言わないまでも、決して屈強ではない。普通の体躯にも関わらず、僕の身体を軽々と持ち上げるケツペンと組み合って、力負けしていない。何より、表情に余裕まで浮かべていて、底知れなさを感じた。逆にケツペンの表情は曇っていて、歯を食いしばっているようにさえ見える。

苦戦を強いられていくからといって、戦いの手助けはしない。というより出来ない。僕が足手まといになるのが分かるから。だからこそ、今はレーデの下へ向かうべきなんだ。ここまで来てあと少し、あと一歩で辿り着けるから。僕は階下へと足を速めた。

視界の塞がれた楕円状の階段を何十段と落ちるように下る。降りれば降りるほど階段の端には苔や黒ずみがありありと見れるようになっていった。蜘蛛の巣も階段を下るのに邪魔に感じるほど、多数点在している。抽出炉はどれ程下層に位置しているのだろうか。

最後の階段を飛び降り、足をくねらせながら着地した。そこは間違ひなく抽出炉と示されていた。けれど炉のような物を目にする事は無く、ただっ広い空間があった。天井も遠く、何処からとも無く差している光も天井を捉えきれていない。床にはどこか魔術的な様式模様を彫り込んだ金属で、一定間隔に同じ模様が繰り返されている。奥行きもあって、黒い人影が一つ、遠くにぼつりと見えた。黒い上下の服装に対して頭髮が白い、間違ひなくレーデだ。けれど雰囲気何か違った。違和感を感じた僕は、静かに歩き進んだ。

近づくほどに横顔からレーデの表情が明らかになっていく。目を強く閉じ、苦痛に耐えるように歪んでいた。片手で胸を押さええているのが痛々しく感じられる。

「レーデ、大丈夫？」

僕が声を掛けると、歪んだ顔を元に戻して、手を離し、一呼吸つく。そしてゆっくりと目を開けるレーデ。

「大丈夫さ。この周囲の負の魔気が集まっているせいだろうが」

「負の魔気？」

「ああ。ここがどんな場所かリキット、お前は知っているか？」

僕の頭には魔力抽出所という答えしか出てこない。けれどレーデがわざわざわかりきった事を聞いているとは思えなかった。レーデはこちらへ向き直って続ける。

「南衆義業戦役……その最後にして最大の戦場。それがこの場所だ。……多くの命がこの場で失われ、放置された死体も埋まっているだろう。怒り、悲しみ、嘆き、色んなものがない交ぜになった魔気で溢れかえっている」

南衆義業戦役。奴隷解放のために南国サリツサを中心に始まった武力運動を鎮圧するために起きた抗争。それが激化した末に戦争と呼ぶまでに争いは大きくなった。誰もが知っている歴史。最後の戦いによって、無数の戦死者を出し、奴隷制度廃止に向かう事で最終した戦いだ。

「辛いなら。苦しいなら……一緒に戻ろうよ。それに、旅に出てしたい事があるんじゃないかなかったの？」

一拍置いて、

「そのしたい事こそが、今してる事なんだよ。だから邪魔をするな、リキット」

「わからないよ僕には。君たちが何をしようとしているのか。何も教えてくれないじゃないか！」

伝えてくれなきゃ何もわかってあげられない。どうしてあげれば良いかも分からないじゃないか。

「……………俺達は、俺達の奪われたものを取り返しに来た。それだけだ。ただ、それが国を揺るがすような大事になると知った上でやっている」

レーデが言い終わらないうちに、地面の魔術模様が光り出す。何度も繰り返される模様の中心部分の円形が徐々にせり上がってくる。地を揺らしながら、轟音を上げて、それらはそり立っていく。見上げる程に高く伸びきった中心円形の下には、真っ直ぐに円筒形のシヨーケースのようなガラスが張り巡らされていた。ケースの中には、様々な動物、見た事も無い珍獣、人やプーカポカに似た小人が中央に浮くように入っている。それが大量に存在して、中程まで進んでいた僕からは、部屋の壁が全く見えなくなっていた。

「これは、精……霊」

「お前、見えるようになったのか」

その答えに精霊だと確証を得る。

「……………でもどうしてこんなに沢山の精霊が？」

「大陸全土のキューブを稼働させるためには大量のマナが必要だ」

「精霊から魔力を得る、ため？」

「少し違う。精霊自体からでは大した魔力を得られない。得られたとしても、精霊が消滅してしまう。」

この場所なら負の魔気だろうがそれに事足りるだけのマナを得られる。だが、抽出し魔力として転用する方法が無かった……………なら、どうやって恒久的に大量の魔力を抽出するか？」

契約を交わしている僕には、その理屈はなんとなくわかる。通常、魔力を供給して貰えない精霊は魔気を吸収して存続する。そして人間と契約する事で魔力を得る代わりに、人間に力を貸す。ならば精霊の吸収した魔気を、人間が転用できる魔力に転換できるのではないかという事だ。

「その答えが精霊……………でも、負の魔気じゃ精霊は消滅してしまうんじゃない？」

チコメコが排水で弱っていたのを思い出す。

「ここに見当をつけるのを何度も躊躇った理由こそがまさにそれだ。何故かな。それこそギルドが隠してやまない技術の根幹なんだろう。」

「……俺にはどうでもいいことだが」

レーデがここに来た理由、この場に広がる光景。

「レーデ、もしかして君たちの取り返したいモノって……」

「そうだ。俺はここに居る全ての精霊たちを解放する！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7196w/>

OLFEED ~ギルド職員の仕事~

2011年12月29日06時51分発行